

序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積792.31km²のうち、森林が約92%を占める山間地域に、4つの町から成る自治体として、平成29年3月現在、約25,000人の人々が生活しています。

この4町において最も多くの人口を擁する古川町は、町の西寄りを清流宮川が貫流し、その周間に形成されている市街地には、古墳や古代寺院・古代遺跡などの貴重な文化財が数多く分布しています。これは、現高山市国府町とともに古代飛騨における生活の中心地であったことの事実を裏付けるものです。

さて、本報告書の「信包中原田古窯跡」は、圃場整備事業に伴って実施した発掘調査の結果をまとめたものですが、須恵器としての蓋・壺類などの供膳具をはじめ、壺や甕・鉢類などの貯蔵具、水瓶ないし淨瓶などの供養具に及ぶまで多種にわたって確認され、7世紀末から8世紀初期の須恵器窯であることが判明しました。また、窯の構造は半地下式の無階有段登窯で、側壁に板石や角礫を使用していたと想定されています。さらに、灰原からは寿楽寺廃寺に葺いた瓦と同種の軒丸瓦や鶴尾なども出土し、近隣には瓦窯の存在も想定されるなど、貴重な発掘結果であることは間違ひありません。

今後、本報告書はもちろん、現地保存された須恵器窯跡、その周間に眠っている瓦窯跡など、考古学研究の礎として、文化財保護への関心を高めるための一助として、大いに利用されることを願うものです。

終わりに、発掘調査の実施に対しまして深いご理解とご協力をいただきました遺跡周辺地域の皆様、そして、本報告書の作成も含めて多大なるご指導・ご支援を賜りました(故)大野政雄先生はじめ関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成29年3月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長 山本幸一

例　　言

1. 本書は、岐阜県飛騨市古川町信包字中原田264番地（旧吉城郡古川町大字信包字中原田261・264番地）に所在する信包中原田古窯跡（岐阜県遺跡番号G06F06433）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、旧古川町（現飛騨市）が昭和53年度に古川町大字信包字中原田で実施した五ヶ村圃場整備事業施工中に発見された古窯跡（瓦・須恵器類）とその灰原の発掘調査である。調査のうち、灰原地区は圃場整備事業によって失われたが、古窯跡は遺跡保護のため地権者牛丸勝郎氏ならびに五ヶ村圃場整備組合のご助力により埋め戻されて保存されている。
3. 発掘調査は、古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）が主体となり、（故）大野政雄氏（岐阜県文化財保護審議会委員・日本考古学協会会員）が担当した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体 古川町教育委員会

調査担当者 大野 政雄 岐阜県文化財保護審議会委員・日本考古学協会会員

事務局 大平 秀憲 古川町教育委員会教育長（代表）

梅地 与秋 古川町社会教育課社会教育係長

調査期間 昭和53年（1978）年9月中旬～11月下旬

調査面積 20m²

（肩書きは調査当時）

4. 報告書作成作業は、平成27年度に飛騨市よりの業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が担当した。委託業務名称は、埋蔵文化財発掘調査等事業（信包中原田古窯跡二次整理作業等委託／仕様書番号飛市教委－9号）である。

事務局 飛騨市教育委員会

清水 貢（生涯学習課長）

鈴木 茂樹（生涯学習課長補佐兼文化係長）

清水 則久（生涯学習課文化係）

信包中原田古窯跡二次整理作業等委託業務担当

調査主任 河合 英夫（株式会社 玉川文化財研究所調査研究部長・日本考古学協会会員）

調査員 西本 正憲（株式会社 玉川文化財研究所主任研究員・日本考古学協会会員）

補助員 木村百合子（株式会社 玉川文化財研究所主任研究員）

補助員 大貫 由美（株式会社 玉川文化財研究所整理作業員）

5. 本件二次整理作業等委託業務に係わる履行期間は、平成27（2015）年5月8日～平成28年（2016）3月23日迄である。

6. 本書の執筆は、河合英夫が担当した。なお、第1章第1節は三好清超が執筆した。

7. 調査報告書の作成にあたっては、（故）大野政雄氏からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表す。

8. 瓦および須恵器の土色は、小山正忠・竹原秀雄 1994『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

9. 報告書刊行のち、調査記録や出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管・公開する予定である。

目 次

序	i
例 言	ii
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
1. 発掘調査作業	1
2. 報告書整理作業	2
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の地理的環境	4
第2節 周辺の歴史的環境	4
第3章 発掘された遺構と遺物	14
第1節 信包中原田1号窯と灰原の概要	14
第2節 出土遺物	18
1. 須恵器類	18
2. 瓦類	36
3. 灰釉陶器・土師器・陶製品	39
第4章 総 括	67
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形 1	3	第20図 信包中原田古窯跡（須恵器類ほか）13	36
第2図 古川・国府盆地とその周辺における主な 遺跡分布図	5	第21図 信包中原田古窯跡（瓦類）1	40
第3図 信包中原田古窯跡の位置と周辺の主な遺跡	7	第22図 信包中原田古窯跡（瓦類）2	41
第4図 信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形 2	9	第23図 信包中原田古窯跡（瓦類）3	42
第5図 信包中原田1号窯跡	17	第24図 信包中原田古窯跡（瓦類）4	43
第6図 信包中原田1号窯跡出土須恵器分類図 1	20	第25図 信包中原田古窯跡（瓦類）5	44
第7図 信包中原田1号窯跡出土須恵器分類図 2	21	第26図 信包中原田古窯跡（瓦類）6	45
第8図 信包中原田古窯跡（須恵器類）1	24	第27図 信包中原田古窯跡（瓦類）7	46
第9図 信包中原田古窯跡（須恵器類）2	25	第28図 信包中原田古窯跡（瓦類）8	47
第10図 信包中原田古窯跡（須恵器類）3	26	第29図 信包中原田古窯跡（瓦類）9	48
第11図 信包中原田古窯跡（須恵器類）4	27	第30図 信包中原田古窯跡（瓦類）10	49
第12図 信包中原田古窯跡（須恵器類）5	28	第31図 信包中原田古窯跡（瓦類）11	50
第13図 信包中原田古窯跡（須恵器類）6	29	第32図 信包中原田古窯跡（瓦類）12	51
第14図 信包中原田古窯跡（須恵器類）7	30	第33図 信包中原田古窯跡（瓦類）13	52
第15図 信包中原田古窯跡（須恵器類）8	31	第34図 信包中原田古窯跡（瓦類）14	53
第16図 信包中原田古窯跡（須恵器類）9	32	第35図 信包中原田古窯跡（瓦類）15	54
第17図 信包中原田古窯跡（須恵器類）10	33	第36図 信包中原田古窯跡（瓦類）16	55
第18図 信包中原田古窯跡（須恵器類）11	34	第37図 信包中原田古窯跡（瓦類）17	56
第19図 信包中原田古窯跡（須恵器類）12	35	第38図 信包中原田古窯跡（瓦類・陶製品）18	57

表 目 次

第1表 古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡	13
第2表 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）観察表	58
第3表 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）観察表	63

写真図版目次

国版1	信包中原田古窯跡の遠景（平成28年3月撮影）	国版15	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）9
	信包中原田古窯跡の近景（平成28年3月撮影）	国版16	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）10
国版2	信包中原田古窯跡の確認時遠景	国版17	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）11
	信包中原田古窯跡の完掘遠景	国版18	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）12
国版3	信包中原田1号窯跡検出状況（下から）		信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）1
	信包中原田1号窯跡完掘状況遠景（南西から）	国版19	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）2
	信包中原田1号窯跡検出状況（上から）	国版20	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）3
	信包中原田1号窯跡完掘状況近景（南東から）	国版21	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）4
国版4	信包中原田1号窯跡前庭部付近土層断面（南東から）	国版22	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）5
	信包中原田1号窯跡灰原付近土層断面	国版23	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）6
国版5	信包中原田1号窯跡燃焼部完掘状況（焚口部から望む）	国版24	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）7
	信包中原田1号窯跡焚口部～燃焼部完掘状況（北西から）	国版25	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）8
国版6	信包中原田1号窯跡焼成部完掘状況（焚口部から望む）	国版26	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）9
	信包中原田1号窯跡窯尻部完掘状況（南西から）	国版27	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）10
	信包中原田1号窯跡完掘状況（南西から）	国版28	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）11
	信包中原田1号窯跡調査終了時の視察風景	国版29	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）12
国版7	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）1	国版30	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）13
国版8	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）2	国版31	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）14
国版9	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）3	国版32	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）15
国版10	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）4	国版33	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）16
国版11	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）5	国版34	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）17
国版12	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）6	国版35	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）18
国版13	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）7	国版36	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）19
国版14	信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）8	国版37	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）20
		国版38	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）21
		国版39	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）22
		国版40	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）23
		国版41	信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）24

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

信包中原田古窯跡は、飛騨市古川町信包字中原田（旧吉城郡古川町大字信包字中原田）に位置する。

当遺跡周辺は、戦前から瓦や須恵器などの破片が田畠から採集されていたため、古くから窯跡の存在が指摘されていた。昭和9年には郷土史家の角竹喜登氏や上杉一枝氏らが中原田地区一帯の確認調査を実施したが窯跡の発見には至らなかった。したがって、本格的な発掘調査は今回が初めてとなった。

発掘調査の対象となったのは、五ヶ村圃場整備事業に伴うものである。遺跡発見の経緯について、昭和53年9月15日発行の「北飛ニュース」は、工事施工中の同年9月4日大型ブルドーザーが圃場整備地内の丘陵裾を削り取っていたところ、多数の瓦や須恵器の破片が出土したと報じている。施工者から連絡を受けた古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）では、古川町史編さん委員である大野政雄氏（岐阜県文化財保護審議会委員・日本考古学協会会員）ならびに岐阜県教育委員会文化課へ連絡を入れた。9月8日に現地を訪れた大野氏は、瓦や須恵器の破片が多量に出土している状況から圃場整備地区に灰原や、農道を抉んだ丘陵南東緩斜面に窯跡が存在すると予測した。

大野氏の指摘をもとに、古川町教育委員会では関係部局と協議を執り行った結果、圃場整備事業に影響を受ける灰原部分については発掘調査を行い、また窯体本体については存在を確認したのち発掘調査を実施し、その後は窯体を埋め戻して保存することとなった。

古川町教育委員会では、文化財保護法第57条の5の規定により昭和53年9月8日を遺跡発見日とし、昭和53年9月9日付け古教社第95号にて遺跡発見届出書を文化庁長官宛に提出した。また、同法98条の2の規定により同9日付け古教社発第96号にて、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の施行について文化庁長官宛に通知した。同通知では、発掘調査担当者を大野政雄氏、土地所有者の発掘調査承諾を同年9月9日、着手を同年9月18日とした。文化庁からは、昭和53年10月30日付け委保第5の3989号にて遺跡の発見と本発掘調査の実施について通知がなされた。

発掘調査は昭和53年9月中旬から11月中旬にかけて約2ヶ月間の予定で行い、その後、一部整理を進めたが、本格的な二次整理作業は町村合併を経て飛騨市に引き継がれ、平成27年度に飛騨市が株式会社玉川文化財研究所に委託して実施した。発掘調査報告書は平成28年度に刊行することとなった。

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査作業（昭和53年9月中旬～11月中旬）

信包中原田古窯跡は、昭和53年9月の旧古川町大字信包字中原田地内の五ヶ村圃場整備事業施工中に発見され、協議が概ね終了した9月中旬から主に古窯跡の実態を解明するための発掘調査を開始した。

まず窯本体の位置および規模などを確認するため、窯跡の存在が予想される山林の伐採から開始し、その後、表土掘削に着手して表土直下で窯体の平面確認を進めた。この段階で調査地の地区割を行い、斜面上方の窯体から下方の灰原にかけて主軸ベルトを設定し、窯体の構造および灰原の確認を目的に主軸方向に直交する土層観察用のベルトを数本設けた。このうち斜面下方に設定したベルトにおいて、

厚さ1m以上の灰原を検出した。灰原は圃場整備地区にまで及んでおり、窯跡発見の契機になった。

窯体部分は、すでに天井部が崩落していたため高さや構造などは不明であるが、前庭部、燃焼部、焼成部、煙道ともほぼ完全な形を留めており、その構造は半地下式の無階有段の登窯と考えられる。

調査時において窯跡出土資料として取り上げた遺物は瓦類と須恵器類で占められる。それらは遺物整理箱(55×39×14cm)に換算して60箱分である(洗浄後の収納状態)。その大半は窯の前庭部付近から斜面下方の灰原にかけて出土したもので、瓦類と須恵器類の割合は整理箱で換算すると7対3で瓦類が主体であった。また、瓦類の中には鶴尾や軒丸瓦(八葉素弁蓮華文・八葉單弁蓮華文)なども出土しており、寿楽寺廃寺出土の鶴尾や軒丸瓦と同型式であることから両者間の受給関係が明らかにされた。なお、当時は瓦陶兼業窯として理解されていた。

発掘調査は11月中旬まで行い、11月21日に現地で新聞記者会見、22・23日現地説明会が実施され、その後、埋め戻し作業を経て、11月下旬に終了した。

調査終了後、報告書の整理作業は中断していたが、古川町内において上町遺跡D地点や向町地点(古町廃寺)、杉崎廃寺跡などの調査事例が起こり、盆地内出土瓦類の比較検討の必要が生じた。筆者らはこれら遺跡の発掘調査に関わったことから信包中原田古窯跡出土の瓦や須恵器などの洗浄・注記に携わることになり、平成3～5年にかけて実施した。さらに、瓦・須恵器類の一部については、大野政雄氏のご配慮により蛍光X線分析を行い、その成果を上町遺跡D地点の発掘調査報告書に掲載することができた(古川町教育委員会 1991)。

2. 報告書整理作業(平成27年7月1日～平成28年3月23日)

飛騨市教育委員会は、過去の発掘調査における未報告分(信包中原田古窯跡)について、飛騨市と株式会社玉川文化財研究所との間で、[埋蔵文化財発掘調査等事業－信包中原田古窯跡二次整理作業等委託－(飛市教委－9号)]に基づく二次整理作業等委託業務を平成27年7月1日に締結し、飛騨市教育委員会事務局より業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所がその整理業務を担うこととなった。業務期間は、平成27年7月1日から平成28年3月23日までの9ヶ月間。本業務の管理技術者として河合英夫が担当することとなった。

信包中原田古窯跡の二次整理作業等委託業務として、以下の整理作業を行った。

1. 遺構関連 周辺遺跡の分布図、窯跡の遺構図作成、同デジタルトレース、版下作成。遺構写真の焼き付けと版下作成。
2. 遺物関連 出土遺物(瓦・須恵器類)の接合、同復元、同摘出。摘出遺物(瓦・須恵器類)の実測・拓本、同デジタルトレース。実測遺物の版下作成、実測遺物の写真撮影と版下作成。
3. 原稿執筆および割付作業。

なお、調査終了後、整理開始までの期間が長かったことや、調査担当者の大野政雄氏が逝去されたことなどに起因して、窯跡に関する図面類の一部が確認できない状況にあった。そのため、今回の報告書の作成作業にあたっては、遺跡や遺構、出土遺物の詳細に関しては大野氏が残された記録類や「中原田古窯跡調査メモ」(昭53.11.21)ならびに写真資料(モノクロ・カラーフィルム)、社会教育課に保管されていた「中原田古窯跡発見届発掘調査関係」などをもとに調査の概要や窯跡の図面を作成した。瓦類や須恵器類などの遺物に関しては、個々に記された情報をもとに出土位置を判断したが、なかには断定できないものもあった。



第1図 信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形 1 (1 / 2,500)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的環境

信包中原田古窯跡は、岐阜県飛騨市古川町（旧吉城郡古川町）信包字中原田264番地ほかに所在し、JR高山本線飛騨細江駅の南西約1.1kmに位置する。古窯跡から古川町の市街地へは南東方向に5kmほどで、徒歩で概ね1時間ほどである。

飛騨市は、岐阜県の最北端に位置し、平成の大合併によって吉城郡内の4自治体（古川町、神岡町、宮川村、河合村）が合併し誕生した。北は富山県と県境を接し、南と東は高山市、西は白川村と接する。古川町は古川・国府盆地を中心に、北は流葉山から本堂山にかけての稜線により宮川村および河合村と接し、西は尾崎山・猪臥山の連峰により大野郡清見村（現高山市）、南は猪臥山・安房山の支脈により国府町（現高山市）、東は安房山から数河畔の背梁により神岡町に接する。また、北端に位置する神岡町および宮川村は富山県境と接している。

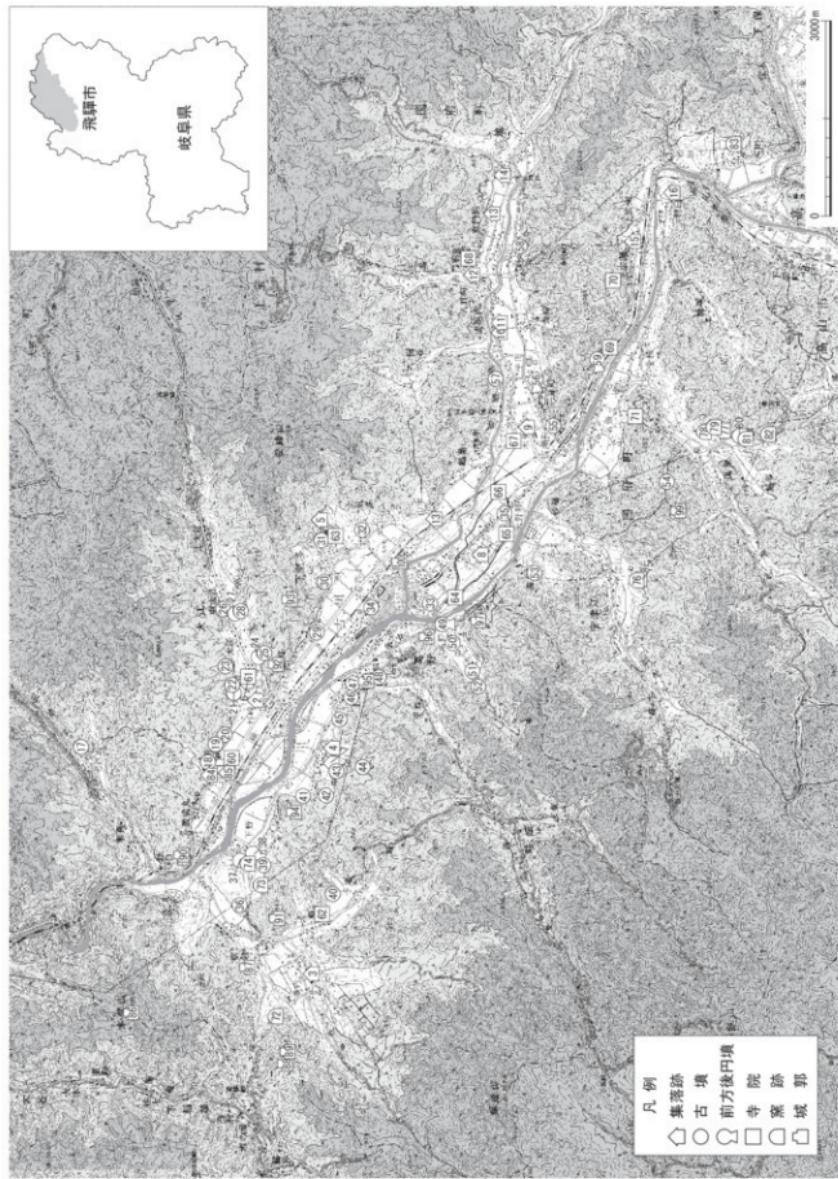
地勢的には、神通川水系高原川流域にあたる東部域と、同水系宮川流域にあたる西部域に分かれ、両者の間を山地が分かち、宮川沿いの古川・国府盆地と高原川沿いの河岸段丘上にややまとまった平坦地がある以外は、宮川および高原川とそれらの支流に沿って小規模な山間平坦地が点在する程度で、他は急峻な山地が連なっている。古川市街地の標高は480～500m、神岡市街地では400m程度である。

窯跡が所在する古川・国府盆地は、主に宮川流域に形成された細長く延びる山間盆地である。盆地のほぼ中央に市街地が形成され、周囲には1000m級の山々がすぐ近くを囲む。宮川は盆地のほぼ中央付近で荒城川と合流し、盆地の西側を北西に向かって緩やかに蛇行して北西端の古川町袈裟丸付近まで続く。長さは南東から北西方向に約10km、幅は古川町の市街地付近で最大でも1.8km程度と狭い。JR高山本線や国道41号もほぼ宮川に沿う。平坦地は主に宮川と荒城川の氾濫砂礫によって形成され、周囲はいくつもの支流により細長い段丘や小丘陵、扇状地、緩斜面などに枝分かれしている。

今次報告の信包中原田古窯跡は盆地の西北寄りに位置し、宮川左岸の下野から信包に至る丹生坂をやや上った南西側の丘陵先端付近に所在する。この丘陵は南西から北東に向かってなだらかに延びるもので、窯跡は丘陵先端付近の南東斜面中腹に築かれている。丘陵の頂部には向小島城跡が築造され、山頂からは古川・国府盆地を一望できる。窯跡の焚口付近で標高約507m、山頂との比高差は約140m、宮川左岸の下野地区で480m前後である。また、窯跡に近い宮川左岸の段丘上には6世紀初頭頃の造営とされる信包八幡神社古墳（前方後円墳・県史跡）が所在している。

第2節 周辺の歴史的環境

飛騨地方には現在のところ、7世紀から8世紀にかけて造営された古代寺院跡が、伝承地を含めて16ヶ所ほど確認されている。美濃や尾張では、同時期の寺院跡が40ヶ寺以上を数えるのにくらべると三分の一程度であるが、荒城・大野の二郡という国の規模からすれば、その数はむしろ多いといえる。さらに、これら16ヶ寺は、すべて宮川流域の狭隘な二つの盆地－高山盆地、古川・国府盆地－に集中しており、その密集度は特筆すべきものとなっている。



第2図 古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡分布図（1/75,000）

飛騨市古川町内には、縄文時代から中近世に至る時代の遺跡が数多く発見されているが、ここでは信包中原田古窯跡に関連する盆地内の古墳時代以降、奈良・平安時代を中心とする主な遺跡について概観したい。なお、第2図に使用した「古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡分布図」は古川町史の編纂時に作成した『飛騨古川 歴史をみつめて』をもとに作成した（飛騨市 2015）。同様に、周辺の主な遺跡については、『上町遺跡向町地点』（飛騨市教育委員会 2013）の報告書の記載に際して詳細に記したので、ここでは向町地点を参考にして記述した。

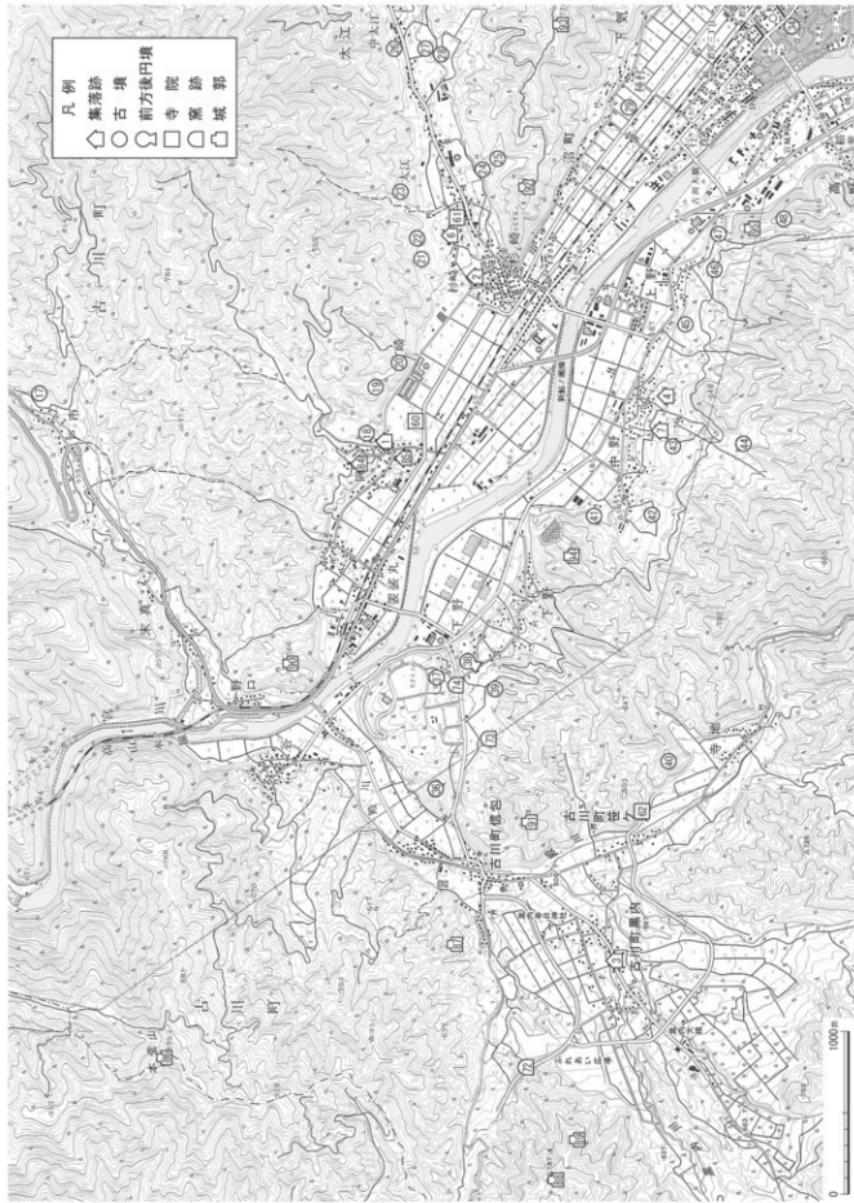
古川・国府盆地が古墳時代以降、高山盆地とともに飛騨の中心をなしていたことは古墳の数や古代寺院の様相からも窺い知ることができる。それを顕著に示す事例として古墳の数が挙げられる。現在までに知られているだけでも古川町で103基、国府町で387基を数え、すでに消滅したものも含めると500基を超すと推測されている（岐阜県教育委員会 1990、国府町史刊行委員会 2007）。これらの多くは横穴式石室を内部主体にもつ後期古墳とみられるが、発掘調査が行われた古墳はきわめて少ないとからその具体相については今後の課題である。

盆地内における古墳の成立の時期については、近年国府町の南垣内遺跡⁶で3基の円墳が調査され、5世紀初頭のものであることがわかつてきた。古川町の上町D地点^⑧では一辺の中央に陸橋をもつ、古墳時代前期初頭の方形周溝墓の存在も明らかにされており、飛騨に前期古墳が確認される日もそう遠くないものと思われる。また、近年国府町の三日町大塚古墳⁶では周溝の確認により前方後円墳の存在が確認され、飛騨地域では最大の古墳であることがわかつてきた（国府町史刊行委員会 2007）。古墳の築造年代については主体部の調査を待たなければならぬが、墳形の形状から4世紀代に遡る可能性も十分あり、飛騨における前期古墳の存在もいよいよ現実味を帯びてきたといえる。

前述までの資料が公になるまでは、飛騨地方で最古の古墳とされてきた国府町広瀬の亀塚古墳⁵⁵は5世紀前半頃に位置づけられてきた大形の円墳である。明治28年に小学校建設により削り取られたが、明治期の字絵図によると径60mにも及ぶと考えられている。埋葬主体は、当時の記録によれば割石を木口積みした竪穴式石室で、甲冑・鉄刀・鉄劍・鉄鉢・鐵鎗などの副葬品が出土している（国府町史刊行委員会 2007）。一方、高山盆地における初期古墳の事例では、冬頭王塚古墳⁵⁶や赤保木5号墳など的小円墳がわずかに知られるのみである。埋葬主体はいずれも川原石積の竪穴式石室で、5世紀中頃から後半の年代が与えられている（高山市教育委員会 1971・1985）。なお、高山盆地に前方後円墳は、現在までのところ確認されていない。

このように飛騨における古墳時代初期の展開をみると、古川・国府盆地でもとくに旧国府町荒城谷寄りの南側に面する平野部から緩斜面にかけて築造していく傾向が窺え、この地域が飛騨における初期の古墳を築造し得る豪族の中心基盤地域であったと考えられる。

盆地内における後期の様相は、古川町信包の信包八幡神社古墳⁵⁷に示される定型化した大形の前方後円墳が注目される。明治24年に主体部の発掘が行われ、その際に勾玉をはじめとする馬具や武器類などの副葬品が出土している。これらの資料は京都国立博物館に保管され、近年八賀晋氏による測量調査の成果とともにまとめられている（飛騨市教育委員会 2004）。これらの成果によれば、全長64mの前方後円墳で、石室は扁平な削石を小口積みにして構築した無補式の横穴式石室である。本古墳の年代観は馬具や鐵鎗の型式から6世紀初頭に位置づけ、飛騨の横穴式石室の導入時期としている。一般に飛騨の古墳文化を考えるとき美濃と飛騨の対比で捉える向きが多いが、藤田富士夫氏は扁平な削石を用いた小口積みの構築技術は美濃では確認できないことから、石川県下の竪穴系横穴式石室と関



第3図 信包中原田古窯跡の位置と周辺の主な遺跡（1/30,000）

連づけて説明している（藤田 1990）。この手法で築造された横穴式石室は信包八幡神社古墳を初現として、高山市小丸山古墳や国府町かうと洞2号墳⁵⁵、国府町うしろご3号墳、古川町沢2号墳、さらに7世紀代の小石室墳などにも採用され、系譜的な繋がりが指摘されている。

また、飛騨地方における古墳で注目されるのは7世紀代、とくに終末期の頃の横穴式石室墳である。その多くは円墳であるが、7世紀後半頃の築造とみられる4基の方墳は注目される。方墳はいずれも宮川左岸の山麓に位置し、古川町中野の大洞平1号墳・2号墳・5号墳⁵⁶の3基と、国府町宇津江の海具江古墳⁵⁷を加えた計4基で、これらは地域的にごく限られた範囲に造営された点でも注意される。これらの方墳や当該期の円墳でとくに注目されるのは、巨石を用いて築造された横穴式石室墳である。盆地内でもっとも古いものとしては、県下最大の横穴式石室墳である国府町広瀬のこう岬口古墳⁵⁸があげられる。石室は全長18m、高さ3m以上の石室をもつ古墳で、巨大化と巨石化を特徴としており、近年の地下探査の結果では前方後円墳の可能性が指摘されている（国府町史刊行委員会 2007）。

巨石を横穴式石室の石材にする例は7世紀後半の古墳に多くみられるが、先の海具江古墳の場合は奥壁に巨石2枚、側壁に方2mの巨石を含む8石、天井は2石で架構し、古川町高野の水上古墳⁵⁹の場合は奥壁に巨石1枚、左壁は上下2段積みで6石、右壁は下段2石・上段4石、天井は2石で架構している。古川町内では高野の光泉寺古墳⁶⁰や中野の大洞平1号墳⁶¹などでも知られており、巨石を用いて構築された古川・国府盆地の石室墳は、近畿の後期古墳と比べても遜色のない石室といえよう。なお、国府町のかうと洞1号墳⁶²では玄室に巨石を用いているが、渓道は削石を木口積みした形態である。

この他に盆地の山塊や山腹には小円墳からなる後期の群集墳が多く確認されている。前方後円墳に繋がる連続性には乏しいが、これらの分布をもとに盆地内の地域圈を類推すると、南東側では荒城谷の開口部付近を中心とする広瀬・半田一帯、宮川左岸の海具江一帯、南西側では宮川左岸の高野一帯、やや下流の上野・中野一帯、北西側では下野・信包を中心とする一帯、北東側では宮川右岸の太江を中心とする一帯などの小地域を基盤とする、それぞれまとまりをもっていたことが看取される。

次に本窪跡とも関連する飛騨地方の古代寺院についてみると、古川と高山の両盆地における寺院の分布は、白鳳期の寺院では古川・国府盆地に11ヶ寺（杉崎庵寺⁶³・寿楽寺庵寺⁶⁴・沢庵寺⁶⁵・古町庵寺⁶⁶・上町庵寺⁶⁷・塔ノ腰庵寺⁶⁸・堂前庵寺⁶⁹・安国寺庵寺⁷⁰・石橋庵寺⁷¹・光寿庵跡⁷²・名張庵寺⁷³）、高山盆地に3ヶ寺（三仏寺庵寺・東光寺跡・大輔寺跡）の計14ヶ寺が知られる。これらに飛騨国分寺と尼寺を加えると、実に16ヶ寺を数え、これらの寺が狹小な飛騨の地に堀を並べていたことになり、飛鳥や奈良の寺院建立の姿を彷彿させる。この分布からもわかるように初期の寺院造営の中心は古川・国府盆地であったことが窺えるとともに、寺院造営主体者の地域領域の姿がみえるようである。

これらのうちで、調査が行われた寺院は、古川・国府盆地では杉崎庵寺⁶³・寿楽寺庵寺⁶⁴・古町庵寺⁶⁶・石橋庵寺⁷¹の4ヶ寺と、高山盆地では三仏寺庵寺の1ヶ所のみである。

杉崎庵寺⁶³は、古くから金堂の礎石と二重孔式の塔心柱の存在が知られており、県営土地改良総合整備事業が計画されたために、平成3年度から範囲確認に発掘調査が実施され、白鳳期に創建された主要伽藍が明確になるとともに、伽藍中枢部の区画施設や内部に敷設された石敷などが明らかにされた。また西側の排水施設からは鰐名が記された符木簡が出土しており、行政末端機構に結びつくものとしてとくに注目された。また、最近では寺域の確認調査が行われ、寺院空間の様相が判明しつつある（飛騨市教育委員会 2012）。



第4図 信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形2 (1/10,000)

寿楽寺廃寺^④は、杉崎廃寺跡の東へ約1.5kmに位置する。平成10年から12年にかけて岐阜県文化財保護センターにより調査が行われ、飛騨ではもっとも古い寺院の一つと考えられており、その創建は7世紀後半と推測されている。遺構は、講堂跡とそれに取りつく回廊跡が発見されている。遺物では、「高家寺」と墨書きされた郷名を冠した須恵器环が注目される。また、鶴尾や塑像、蹄脚硯、三足火舎など、寺院に関わる資料も多く出土している。出土した素弁系蓮華文軒丸瓦は創建期の軒丸瓦とされ、この瓦は今次報告の信包中原田古窯跡^⑤で焼かれている。この素弁系の軒丸瓦は特徴的な技法であり、近江衣川廃寺、信濃明科廃寺、甲斐天狗沢瓦窯などにも分布し、衣川廃寺が初現とされている。同系統の瓦が畿内（近江）から延びる交通路（東山道／駿路）に沿って点在することは、瓦の伝播を考える上でも注目される（櫛原ほか 1990）。また、尾張元興寺や河内野中寺と同系の忍冬文軒丸瓦も出土しており、この事例も有力寺院との係わりが窺え、飛騨で最古の寺といわれる所以である。

古町廃寺^⑥は、上町遺跡D地点^⑦の調査で瓦類がまとまって出土したことから、岐阜県遺跡地図の改訂版で命名された廃寺跡である（岐阜県教育委員会 1990）。寺院関連の遺構は確認されなかつたが、出土した單弁八葉蓮華文軒丸瓦は盆地南部の芦谷窯跡（丸山窯跡）^⑧や瓜果わせ洞窯跡（下り谷窯跡）^⑨などからの供給であるのに対し、盆地北部の杉崎廃寺や寿楽寺廃寺などの供給元である信包中原田古窯跡の供給領域とは異なっている。

石橋廃寺^⑩は、国府町上広瀬に所在する寺院推定地で、戦前から塔心礎や人物戲画等が線刻された平瓦が知られていた。昭和60年代に調査が行われたが寺院に関わる遺構は発見されていない。また、飛騨地方では初めての畿内産土師器が出土している。

高山盆地では三仏寺廃寺がその代表例で、寿楽寺廃寺と並んで飛騨地方ではもっとも古い寺院跡の一つとみられている。創建年代は、寿楽寺廃寺と同様に7世紀後半に遡ると考えられている。「大寺山田寺」と墨書きされた平瓦も出土しており、のちの官の寺としての性格も有するとみられる。

飛騨に寺院があったことが、初めて文献に登場するのは『日本書紀』朱鳥元年（686）の大津皇子の謀反に連座して新羅僧行心が「飛騨の伽藍」へ移配されたという記事である。これが事実であれば、7世紀後半には中央にまで知られた寺院が飛騨にあったことがわかる。飛騨はまた、古代にあっては木工技術を背景に、調庸を納める代わりに木工が交替で京師に勤番し、造宮省や木工寮で各種建物の造営に従事する「匠丁の國」としても知られる。大宝令の賦役令斐陀国条は飛騨国のみに適用された、きわめて例外的な規程であった。

狭い盆地内に伽藍が立ち並ぶ景観は、当地域の先進性の象徴ともなっているが、律令制下における飛騨の特殊性を考慮すれば、賦役令斐陀国条にみえる工匠との関係が想定されるのである。

大宝2（702）年に大宝律令が施行され、飛騨国は東山道に属し、大野郡と荒城郡からなる下国で、国府の所在地は明確ではないが、高山市内に比定する説が有力である。国分寺は高山市内の現国分寺の場所にあったとみられ、国分尼寺跡はその西方の現辻ヶ森三社において金堂跡が確認されている。この頃になると政治や行政の中心は、古川・国府盆地から高山盆地に移ったものと考えられている。

白鳳期の寺に瓦を供給した瓦窯としては、古川町では信包中原田古窯跡^⑪、国府町では芦谷窯跡^⑫、釜洞窯跡^⑬・^⑭、瓜果わせ洞窯跡^⑮などがあり、中原田古窯跡以外は瓦陶兼業窯と考えられている。古川町内の須恵器窯としては、信包中原田古窯跡と同じ信包に所在する信包塙屋窯跡^⑯や下野羽根板窯跡^⑰などがある。

一方、古墳や寺院関連以外で時期的に重複する遺跡として、古川町内では上町遺跡^⑮、太江遺跡^⑯、

たいえい

岡前遺跡①、杉崎廃寺跡⑥、中野山腰遺跡④、中野大洞平遺跡⑦などの調査事例がある。

上町遺跡⑧は、国道41号の国府古川バイパスの新設工事が契機となって発掘調査された遺跡である。昭和62年以來、これまでに30ヶ所以上の発掘調査が行われ、調査面積はすでに16,000m²以上に達する。時期は古墳時代前期から古代、そして中世に及んでおり、その範囲は東西約1.5km、南北約500mにわたると推測される（古川町教育委員会 1991）。古代の遺構では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く確認され、なかでもD地点で発見された東西や南北に配置された複数棟からなる掘立柱建物跡は、地方支配の拠点とも目される荒城都衙関連の施設ないし家族居宅をイメージさせる遺構と推測される（古川町教育委員会 2001）。このD地点の調査をきっかけに、バイパスの波及効果による土地利用の進展に伴い、国道41号沿いのD地点に面したトヨタ地点（古川町教育委員会 1994）や金子・氷見地点（古川町教育委員会 2001）、向町地点（飛騨市教育委員会 2013）などの調査が行われている。この間、上町から向町にかけての国道41号沿いが飛騨地方では前例のない、古墳時代から中世に及ぶ層別の遺跡であることが判明している。

太江遺跡⑨は、宮川右岸の太江の高台に位置する遺跡で、県道の拡幅工事に伴う一環として、寿楽寺廃寺の北側を含む一帯が平成10年から3ヶ年にわたりて県文化財保護センターにより調査された。寺院跡については先に示したとおりであるが、周辺には古墳時代後期から平安時代にわたる居住域であることが判明し、両者の消長関係についてまとめられている（財團法人岐阜県教育文化財団 2005）。

岡前遺跡①は、杉崎廃寺跡の北側の高台に位置する遺跡で、平安期の竪穴住居跡が確認されたほか、飛騨では最初の和同開珎が出土した遺跡（財團法人岐阜県文化財保護センター 1995）として知られている。

杉崎廃寺跡⑩は、古代の寺院跡として著名であるが、廃寺跡の周辺からは古墳時代前期から後期の竪穴住居跡や5世紀代の円墳も確認されている（古川町教育委員会 1998・飛騨市教育委員会 2012）。また、出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器には北陸系の影響が顕著に認められる。

中野大洞平遺跡⑦は宮川左岸の段丘上に位置する遺跡で、縄文時代および奈良時代の竪穴住居跡が確認されている（財團法人岐阜県教育文化財団 2006）。この遺跡の並びには縄文中期の集落跡として著名な中野山腰遺跡④が調査されているが、この地区からは平安時代の竪穴住居跡が発見されている（古川町教育委員会 1993）。また、宮川支流の殿川流域の段丘上には平安時代の山岳寺院跡とされる西ヶ洞廃寺⑫が調査されている（財團法人岐阜県教育文化財団 2006）。

中世では、上町遺跡D地点⑧で得られた資料が特筆される。ここでは、掘立柱建物跡や竪穴状遺構、配石遺構、集石遺構、溝、道路遺構などが確認されている。遺物では12世紀から16世紀代の舶載磁器（龍泉窯系青磁碗類）や国産陶器（山茶碗・天目碗・常滑瓶・瀬戸灰釉瓶子・摺鉢・平鉢類）などが出土している。発見された遺構・遺物の多くは、宮川対岸の山塊に築造された古川城（蛤城）⑨との関連が窺える資料と考えられる。杉崎廃寺跡の調査では中世と考えられる集石遺構が確認されている。地元では杉崎廃寺跡の礎石について宮谷寺跡という伝承がある。宮谷寺は小島時光の菩提寺とされるもので、杉崎廃寺跡の背後の谷を宮谷というが、その名称は宮谷のほとりにあってこそ然るべきあり、今後の考古学的課題でもある。

南北朝時代に至ると姫小路家綱が飛騨国司に補任され、初めは黒内城に入城し、のちに小島城⑩へ移り北方に拠点を置いたとされる。一方、幕府は南朝に対抗し、佐々木（京極）高氏氏を飛騨国守護に補任し、南の益田から大野郡を勢力範囲に治めた。姫小路氏はこの抗争に敗れ、小島（小島城⑩）、

小鷹利（向小島城⁹⁰）、古河（古川城⁹¹）の三家に分かれて賄立することになった。応仁の乱の影響は山国飛驒にも及び、戦国期には北部の江馬氏、南部の三木氏（京極氏の被官）が勢力をほぼ二分していた。当時飛驒は甲斐の武田、越後の上杉の対立抗争の渦中にあって去就が定まらなかったが、天正10（1582）年に三木氏が江馬氏を破り飛驒の大部分を平定した。その後、まもなく秀吉の意を受けた金森長近が飛驒を攻略して三木氏を滅ぼして飛驒一円を平定した。長近は入部当初、鍋山城を居城としたが、天正16（1588）年頃より高山城の築城に着手したとみられる。ほぼ同じ頃より飛驒では唯一の平城である増島城⁹²が荒城川沿いに築かれる。平成9年より本丸・二の丸曲輪を中心に確認調査が行われ、石垣・堀削などの曲輪の状況が明らかにされている（飛驒市教育委員会 2010）。

引用・参考文献

- 高山市教育委員会 1971『冬頭大塚発掘報告』
- 高山市教育委員会 1985『赤保木5号古墳』『高山市内遺跡発掘調査報告書』高山市埋蔵文化財調査報告第22号
- 岐阜県高山市教育委員会 1986『高山城跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 岐阜県高山市教育委員会 1988『高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 国府町教育委員会 1988『飛驒国府シンポジウム 古代の飛驒－その先進性を問う－』
- 古川町教育委員会 1989『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡C地点発掘調査報告書』
- 藤田富士夫 1990「4 北陸から見た飛驒」『第1回 飛驒国府シンポジウム 古代の飛驒－その先進性を問う－』国府町教育委員会
- 岐阜県教育委員会 1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 古川町教育委員会 1991『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡D地点発掘調査報告書』
- 国府町教育委員会 1993『半田垣内遺跡1次・2次発掘調査報告書』
- 古川町教育委員会 1994『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡トヨタ地点・O地点・栗原センター地点発掘調査報告書』
- 名古屋市教育委員会 1994『尾張元興寺発掘調査報告書』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995『岡前遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第20集
- 森浩一・八賀晋福者 1997『飛驒 よみがえる山国の歴史』 株式会社大巧社
- 古川町教育委員会 1998『岐阜県吉城郡古川町 杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
- 国府町教育委員会 1998『桜本遺跡発掘報告書』
- 古川町教育委員会 2001『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡金子地点・水見地点発掘調査報告書』
- 財団法人岐阜県教育文化財団 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第74集
- 岐阜県吉城郡国府町教育委員会 2003『三日町大塚古墳』
- 飛驒市教育委員会 2004『岐阜県史跡 信包八幡神社古墳測量調査報告書』
- 国府町教育委員会 2004『海具江古墳発掘報告書』
- 財団法人岐阜県教育文化財団 2005『太江遺跡Ⅱ』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第94集
- 国府町教育委員会 2005『三日町大塚遺跡範囲確認調査』

国府町教育委員会 2005「かうと洞1号古墳・2号古墳調査報告書」

国府町教育委員会 2005「南垣内遺跡発掘報告書」

国府町教育委員会 2005「石橋廃寺調査報告書」

財団法人岐阜県教育文化財団 2006「西ヶ瀬廃寺跡 中野山越遺跡 中野大洞平遺跡 大洞平5号古墳」

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第98集

国府町史刊行委員会 2007「国府町史」 考古・指定文化財編

飛騨市教育委員会 2010「増島城跡」 飛騨市文化財調査報告書第3集

飛騨市教育委員会 2012「杉崎廃寺跡2」 飛騨市文化財調査報告書第5集

飛騨市教育委員会 2013「上町遺跡向町地点」 飛騨市文化財調査報告書第6集

飛騨市 2015「飛騨古川 歴史をみつめて」

第1表 古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡（第1・2図に対応）

1	国前道路／縄文・古代
2	御番人越道跡／縄文（縣史跡）
3	黒内細野道路／縄文・古代
4	中野山越道路／縄文・古代
5	沢道路／縄文
6	太江道路／縄文・古代
7	中野大洞平道路／縄文・弥生・古墳・古代
8	上町道路／弥生・古墳・古代・中世後期
9	平田山内道路・弥生後期～古墳後期
10	桙本道路・古墳後期～奈良前期
11	立石道路／縄文
12	深沼道路・水田跡
13	森ノ八ノ道跡／縄文
14	荒城神社道路／縄文
15	宮ノノ道跡／縄文・古墳
16	村山道路／縄文
17	戸市古墳群1・2号墳／古墳後期
18	国前御詔神社裏1・2号墳／古墳後期
19	杉崎廃寺山古墳群（1～10号）／古墳後期
20	杉崎廃寺山古墳／古墳後期
21	福地社古墳群（1～3号）／古墳後期
22	太江八度古墳群（1～8号）／古墳後期
23	太江平手1～3号古墳・古墳後期
24	太江中手野1～4号古墳・古墳後期
25	沼町天王洞古墳・古墳後期
26	太江福地1・2号古墳・古墳後期
27	太江古墳／古墳後期
28	太江日影古墳・古墳後期
29	種村古墳／古墳後期
30	小坂社跡古墳／古墳後期
31	上氣多1～3号古墳・古墳後期
32	上氣古墳／古墳後期
33	五阿山廃寺古墳・古墳後期
34	中氣多・塚1～3号墳／古墳後期
35	上町三塚1～3号古墳・古墳後期
36	丸山古墳・古墳後期
37	羽根坂古墳群（4基）／古墳後期
38	信久八幡神社跡古墳（前方後円墳）／6世紀前
39	八幡古墳・古墳後期
40	寺地跡・穴1・2号墳／古墳後期
41	中野宮田古墳・古墳後期
42	中野古糸・糸古墳・古墳後期
43	大洞古墳群（5基）／古墳後期・方墳1・2・5号
44	中野山越古墳群（12基）／後期古墳
45	上野山内洞古墳群（17基）／後期古墳
46	上野舟谷古墳群（5基）／後期古墳
47	上野舟谷1・2号墳／後期古墳
48	上野舟谷古墳群（5基）／後期古墳
49	高野山古墳群・後期古墳
50	高野山ノ上古墳・後期古墳
51	高野水上古墳／後期古墳
52	高野高皇寺円墳／後期古墳
53	海共江古墳／方墳（7世紀後）
54	かくと洞1・2号墳／（7世紀後）
55	庄瀬龜塚古墳／円墳（5世紀）
56	二日町大塚古墳・前方後円墳（5世紀）
57	平田柳洞古墳群（1～5号）／古墳後期
58	油原内形彩繪墓／4～5世紀
59	ここの町古墳・前方後円墳（6世紀）
60	利崎庵寺跡・白鳳（県指定）
61	春光寺廢寺（左近庵寺跡）／白鳳
62	西・洞庵寺跡・平安
63	洞庵寺跡・白鳳
64	古町庵寺跡・白鳳
65	上町庵寺跡（久中庵寺跡）／白鳳
66	塔の腰庵寺跡（日旦庵寺跡）／白鳳
67	堂原庵寺跡
68	安因寺廢寺・白鳳
69	石鶴庵寺跡・白鳳
70	光寿庵跡・白鳳
71	名張庵寺跡・白鳳
72	白毫庵跡古窯跡・須恵器窯
73	信州中源田古跡跡・須恵器窯
74	下野郡根坂古窯跡・須恵器窯
75	芦谷古窯跡（丸山古窯）／瓦陶窯
76	小才ヶ洞古窯跡（2基）
77	糸糸釜翁1号古窯跡
78	糸糸釜翁2号古窯跡
79	糸糸大洞古窯跡群（2基）
80	糸糸小坂古窯跡
81	糸糸中島古窯跡
82	糸糸わせ洞古窯跡（下り谷古窯）
83	大堀古窯跡
84	岡前奥御堂跡・中世
85	岡前館跡・中世
86	木曾山城跡・中世
87	城見寺城跡・中世
88	小篠利城跡・中世
89	黒内城跡・中世
90	野口之城跡・中世
91	向小島城跡・中世
92	小島城跡・中世
93	下北城跡・中世
94	池之山城跡・中世
95	高岩城跡・中世
96	百鬼城跡・中世
97	古川城跡・中世
98	庄瀬城跡・中世
99	高野城跡・中世
100	珊瑚城跡・鐵砲～近鉄前

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 信包中原田1号窯と灰原の概要

信包中原田古窯跡は、宮川左岸の下野から信包に至る丹生坂をやや登った南西側の丘陵部先端付近に位置している。この小丘陵は南西から北東方向になだらかに延びるもので、窯跡は丘陵先端付近の南東斜面中腹に築造されている。また、灰原は斜面下方から水田面に至る約30m内の範囲に及んでいる。この灰原の分布およびその周辺の踏査より推測すると、この丘陵南東斜面には瓦や須恵器を焼成した複数の窯跡の存在が予想される。また、下野から信包に至る丹生坂の北緩斜面にも9世紀前半ごろと考えられる須恵器を焼成した羽根坂古窯跡が確認されており、この中原田から羽根坂一帯には瓦窯や須恵器窯が築かれていたものと推測される。

窯跡の位置する丘陵地帯の標高は、およそ海拔500mから600m程度で、南ないし南西へ向かって次第に高くなる。南西の丘陵頂部に築かれた向小島城跡の山頂で約650m、窯跡の焚口付近で約507m、宮川左岸の下野地区で海拔480m前後である。

丘陵地帯を形成する地層は、古川・国府盆地の周縁地域に広く分布する更新世堆積層である。この地層は比較的凝固度の低い砂礫・砂・粘土からなり、第三紀鮮新世末から第四紀更新世にかけて堆積したものである。この上部堆積層は全体に風化が進み、粘土化が進行している。信包や羽根坂の地域が瓦や須恵器の生産地として100年以上の歴史を保つことのできたのは、丘陵を構成する更新世堆積物層を窯の窯体構造の基盤として、また瓦や須恵器の陶土として利用したことにはかならない。

発掘区域内では1基の窯跡とそれに伴う灰原を検出した。また後述するが、区域内には未確認の須恵器や瓦の窯跡が存在する可能性があるため、本古窯跡を信包中原田1号窯跡と命名して説明を行う。

窯体の中心部は黄褐色粘土質の地山に掘り込まれているが、焼成部の窯尻寄りでは砂質岩や泥岩で構成された手取層を抜いて構築されている。天井は崩落しているが、前庭部、焚口部、燃焼部および焼成部の床面、窯尻などは概ね形を留めており、その構造は半地下式の無階有段窯と考えられる。

灰原は、窯の前庭部先端から下方へ向かって扇形に広がっていたと考えられるが、瓦や須恵器類の散布状況から調査時には圃場整備による工事の影響でだいぶ削り取られていたと推測される。なお、その一部は、現水田下へ入り込んでいるものと思われる。写真資料から判断すると、調査した部分で灰原（遺物を含む黒色炭化物層）のもっとも厚いところでは1m以上に及ぶものと考えられる。

窯体や灰原から出土した瓦類や須恵器類は、主に窯跡の前庭部付近から斜面下方の灰原にかけての範囲である。瓦類の中には焼成部・燃焼部の注記がわずかにみられるが、大半は灰原からの出土で、窯体内からはほとんど出土していない。瓦類は大半が丸瓦と平瓦で、これらに混じて熨斗瓦や鶴尾、軒丸瓦（素弁八葉蓮華文・単弁八葉蓮華文）などもわずかに出土している。これらと同形式の鶴尾や軒丸瓦は、太江の寿楽寺廃寺からも出土しており、その需給関係が明らかにできたものと考えられる。須恵器類では注記を手がかりに出土位置をみると、灰原以外に、窯体、焚口付近、前庭部などからも出土しており、それら遺物の出土状況から判断すると、信包中原田1号窯は瓦類ではなく、須恵器を焼いた窯の可能性が高い。以下では、大野先生が遺された「中原田古窯跡調査メモ」を掲載し、窯の構造などを含めて須恵器窯なのか、あるいは瓦陶兼業窯なのか、再度検討を加えたい。

中原田古窯跡調査メモ

昭53、11、21

所 在 地 吉城郡古川町大字信包字中原田261・264番地

調査の動機 土地改良工事により灰原が窯跡の近くまで削り取られ、多数の遺物が掘り起こされた。昭和9年角竹喜登・上杉一枝（いずれも故人）らが2回にわたりこのあたりを調査したときには、窯跡の発見にはいたらなかった。

調査期間 昭和53年10月～11月

調査概要 1. 時 代 白鳳時代（奈良前期）

2. 構 造 地下式無段無階登窯

3. 形 態 全長11.2m、幅1.2m、勾配30度前後、主軸方向南東（N-135°-E）、天井が崩落し高さは不明であるが、前庭から煙道まではほ形が残っている。

4. 用 途 瓦陶兼用窯

5. 出土遺物 a. 古瓦 - 瓦当（八葉素弁蓮華文瓦、八葉單弁蓮華文瓦、とくに後者は花弁を図案化した独創的なデザイン）、丸瓦、平瓦、堤瓦、瓶等破片。
b. 須恵器 - フタツキ、タカツキ、マリ、ハチ、ツボ、ヘイ、カメ等すべて破片のみ。

6. ま と め 瓦を焼いた窯跡としては県下で最も古い7世紀中ごろ（約1,300年前）、この窯で焼かれた瓦は古川町大字太江字左近（現寿楽寺付近）に建てられた古代寺院の屋瓦に用いられた。

7. 保 存 雪の来る前に埋め戻して長く保存したい。

土地所有者 牛丸勝郎。

以上の大野調査メモおよび遺跡・遺構の写真資料をもとに窯体の構造について整理すると、窯体は砂礫混じりの黄褐色粘土をベースとしている。大野調査メモでは窯の構造について、地下式無段無階登窯としているが、アーチ状の地山を切り抜いた痕跡が認められず、地下式では天井部の厚さが一定以上ないと強度が保てない。また、後述するが、焼成部の床面上にはテラス状の段が認められること、表土直下20～30cm程度で窯体が確認できしたことから推測すると、半地下式無段有段の登窯と考えられ、天井部は架構式になっていたものと思われる。

窯の規模は、調査メモには全長11.2m、幅1.2mとあるが、全長11.2mは前庭部までを含んだ数値と考えられ、焚口から窯尻までの窯体は8.5m程度であったと推測される。また、幅1.2mは焚口付近の最大幅と思われるが、窯体内は上部が下部よりせり出した構造になっていることから、実際はもう少し幅が広かった可能性がある。窯体の勾配は約30度であることから焚口部から窯尻までの比高差はおよそ4m強と推測される。第5図は現存していた資料をもとに図上復元したものであるが、全体に細長い形態の窯で、横断面は概ねかまぼこ形を呈している。

焚口部から前庭部にかけては扇状に広がり、この部分が作業スペースと考えられる。床面幅は焚口部付近で1.1～1.2m程度・灰原に向かって1.3mほどのテラス面が形成されている。この下方が灰原であるが、その途中に幅2.4m、奥行20m、深さ30cm前後の土坑状の掘込みがある。

焚口部から燃焼部へは次第にすばまっている。焚口部から焼成部に至るまでの緩勾配を燃焼部と推測すると、燃焼部は緩やかな傾斜の床面をもち、長さは1m程度と推測される。窯壁は厚さ10cm前後と考えられ、焚口部から燃焼部の側壁には板石を立て、燃焼部の側壁には角礫を用いて構築している。また、燃焼部付近ではスサ入り粘土による補修箇所も部分的に認められる。焚口部付近では瓦も壁に埋め込まれている。なお、板石や角礫、スサ入り粘土の残片は灰原からも出土している。

焼成部は、燃焼部の傾斜変換部から窯尻に向かって30度前後の勾配で幅を狭めながら立ち上がる。焼成部の床面上には、テラス状の低い段が途中に数段認められる。焼成部の両側壁は燃焼部と同様に両側壁とも角礫を積んで構築され、その隙間にはスサ入り粘土が塗り込まれている。角礫は窯尻付近にも用いられている。

遺存する側壁の高さは50~60cm、窯尻側では30cmほどと推測される。また、焼成部のテラス面には少量の瓦片が床面に密着した状態で残っているが、これらは焼台と考えられる。

焼成部の上方から窯尻にかけては削平されているため煙出しの構造は不明である。また、床面幅は窯尻寄りで40~50cmと推測され、だいぶ狹くなっている。

つぎに、遺物整理の過程で出てきた疑問のひとつが、この窯で何が焼かれたかということである。この信包中原田1号窯が須恵器窯なのか、瓦窯なのか、それとも瓦陶兼業窯なのか。また、それぞれ別々に焼かれたのか。あるいは先にどちらかを焼いてから、時間が経ったのち別なのが焼かれたのか。

これらを検討するうえで、瓦類や須恵器類の出土状況が重要になるのであるが、出土遺物の多くが灰原からの出土であり、窯体内に残された資料から瓦窯なのか、須恵器窯なのか、あるいは瓦陶兼業窯なのか、直ちに判断できない。瓦類や須恵器類とも当地で焼かれたことは間違いないことから瓦陶兼業窯と呼ばれてきたが、実はその大半が窯の前庭部付近から灰原にかけて出土したものである。

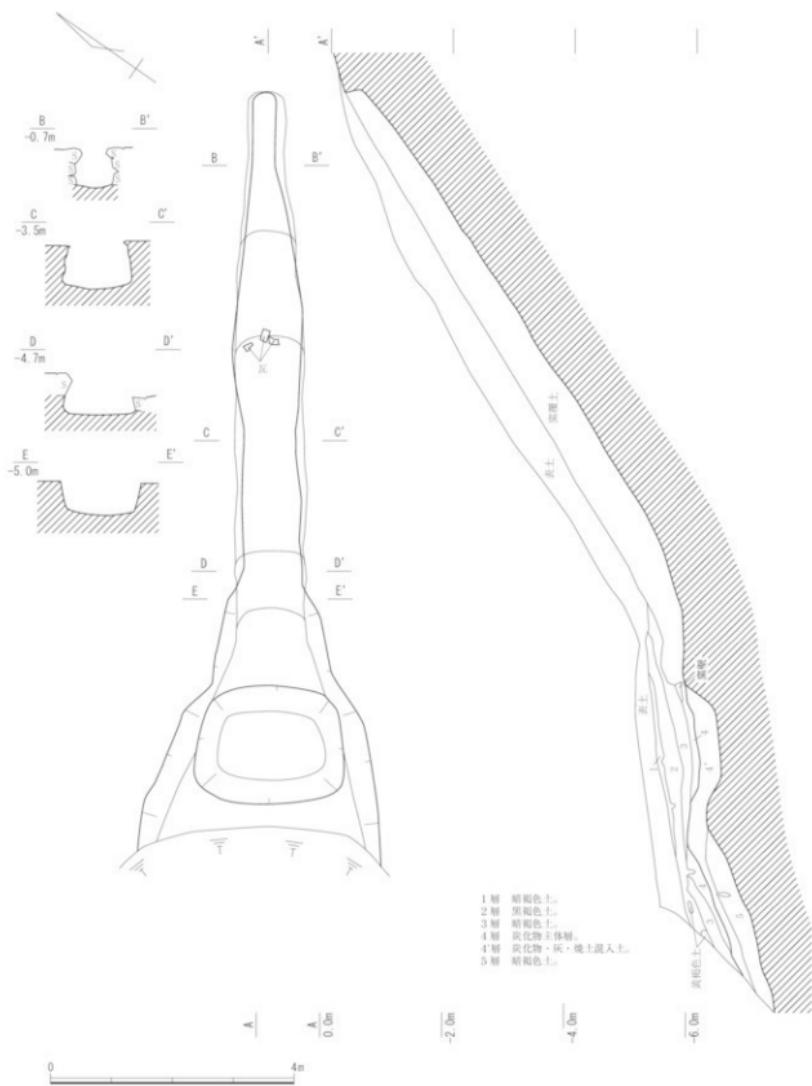
仮に須恵器窯とした場合、須恵器からみた窯の操業年代は8世紀第1四半期の前半頃と推測され、一方、瓦陶兼業窯とした場合には、供給先（寿楽寺廐寺）の創建年代との関係が問題となる。

再度、遺物整理によって得られた所見をもとに、何を焼いた窯なのか、結論を出してみたい。

まず瓦類では、焼成部や燃焼部の出土を示す注記がわざかにみられるが、大半は灰原からの出土で、窯体からはほとんど出土していない。注記から出土位置がわかる瓦は、焼成部の床面（テラス面）に密着した状態で出土したものと、焚口部の壁に埋め込まれていたものである。これらの瓦はいずれも製品の残存としてではなく、焼台や焚口などの壁に用いられていたと考えられるのが穏当であろう。また、燃焼部や焚口部、前庭部にかけても小破片が出土しているが、これらも瓦も壁や天井部などの架構用材であった可能性が考えられる。さらに灰原出土の資料であるが、造瓦技術の視点からみると、桶巻作りと一枚作りの平瓦が出土しているにもかかわらず、時期の異なる瓦を同一視してきたことも問題を複雑にしてきた要因と考えられる。

一方、須恵器類でも同様に、注記を手がかりに出土位置をみると、多くは灰原からの出土であるが、燃焼部、燃焼部下層、焚口部、焚口部下層、前庭部などの表記は瓦類よりも確実に多く認められる。また、上記の資料は形式的にも一括遺物として取り扱えるものであり、灰原出土の瓦類とは分離して扱うべきものと考えられる。

以上のような観察結果および出土遺物の検討をもとに、この窯で何を焼いていたかを推測すると、信包中原田1号窯は瓦ではなく須恵器を焼いた窯であったといえよう。



第5図 信包中原田1号窯跡 (1/80)

第2節 出土遺物

信包中原田1号窯において出土した遺物は瓦類と須恵器類であるが、上述の観察結果の所見からは須恵器窯であることがわかった。以下では、窯跡および灰原出土資料の須恵器と、灰原出土の瓦とに分けて説明していく。

1. 須恵器類（第6～18図、図版7～18）

須恵器類は、遺物整理箱に18箱分が出土している。これらの多くは灰原出土のものであるが、窯の燃焼部や焚口部、前庭部などからも若干検出されている。前章および前節でも述べたことであるが、出土状況の詳細については不明な点が多い。本来、検討すべき窯の操業面との関係や灰原の層位関係などにつても触れなければならないことであるが、この点については本報告では提示できないことをお断りしておきたい。

まず出土資料の掲載にあたっては、須恵器類の器種分類（第6・7図）を示したのち、器種ごとの概要を説明したい。その分類にあたっては、都城の土器集成（古代の土器研究会編 1991ほか）や猿投窯の器種分類（三河考古刊行会 1999ほか）などを参考にして種別した。提示した須恵器類の多くは、灰原出土の資料であるため、その性格上、時期の異なる須恵器類も含まれている。おそらく隣接地に別な時期の窯が存在するものと考えられる。

最初に器種ごとに、それぞれの概要について説明を行う。

須恵器には、蓋・壺・塊・盤・高环などの食膳具、壺・甕・鉢などの貯蔵具、水瓶ないし淨瓶などの供養具、それに円面鏡などの文房具がある。

蓋類には壺類・高环類・壺類に対応する各種の蓋がある。壺類の蓋には、壺H蓋（壺蓋）、壺G蓋（返り蓋）、摘み蓋の3種類がある。壺H蓋は、古墳時代以来の壺H身（壺身）に対応する蓋である。壺G蓋は天井部に摘みを有し、内面に返りのある蓋である。壺類との関係では、ヘラ切り技法による平底の壺G身に対応するものと考えられる。摘み蓋は天井部に摘みを有し、口縁端部が折り返された蓋である。壺類との関係では、回転ヘラ削り技法による平底の壺Aないし高台をもつ壺Bに対応するものと考えられる。高环に対応する蓋（有蓋高环蓋）は、古墳時代以来の伝統的な壺H蓋の天井部に摘みをもつものである。壺類に対応する蓋は、葉壺や短頸壺などの小形品に伴う蓋と考えられる。

壺類には、壺H身、壺G身、壺A、壺B、塊Aの5種がある。壺H身は、古墳時代以来の壺H蓋に対応するもの。壺G身はヘラ切り技法による平底の壺で、口径の違いから数種に細別できる。壺Aは回転ヘラ削り技法による平底の壺で、口径・器高の違いから数種に細別できる。壺Bは壺Aに高台を付けたものである。口径・器高などの違いから数種に細別できる。塊Aは無台壺のうち、底部の切り離し技法が回転糸切りのものである。この資料は灰原から1点出土したのみである。

盤類には、いわゆる無台の盤と、脚台を有する高盤の2種がある。後者は脚台径の違いから数種に細別できる。

高环類には、蓋の有無、壺部の深さ、脚の長短などの違いから数種に細別できる。これらのうちで、その中心は無蓋短脚高环と推測され、長脚の高环は古墳時代に廻るものと考えられる。

壺類には、長頸壺（瓶）、短頸壺、広口壺、横瓶の4種がある。長頸壺は口縁部形態、頸・胴部の違い、短頸壺・広口壺は口縁部の違いから数種に細別できる。なお、フラスコ瓶・平瓶・提瓶などは

確認されていない。

甕類には、大小とバラエティに富み、口縁部の違いからさらに細別できる。出土量は器種の中でもっとも多いが、全容のわかるものはない。底部の形態は平底の個体が確認できないことからすべて丸底と推測される。外面は主に平行文叩きによって整えられ、内面は青海波文や同心円文などの当具痕を残すものが多い。内面に綾杉文叩きや無文当具あるいはナデ等によるものも例外的にみられる。

鉢類には、大小の2種がある。小形の器種は坏・椀類とも異なるが、それらは食膳具のうちに含め、大形品はいわゆる広口鉢である。杉崎庵寺や寿楽寺庵寺などで検出された鉄鉢類は出土していない。

水瓶ないし淨瓶とした器種は、高台部の形態より判断したものである。供養具に分類したもので、近隣の寺院に供給されたものと考えられる。

硯は円面硯のみで、焚口部や灰原から出土している。奈良文化財研究所の『平城京出土陶硯集成』(奈良文化財研究所 2006)の陶硯の分類に従えば、圓足圓面硯に分類される。

つぎに図示し得た資料について、それぞれ器種ごとに要約したい。なお、詳細は後述の表2の出土遺物観察表(須恵器類)を参照願いたい。

有蓋高坏蓋 (第8図1・2、図版7)

古墳時代以来の伝統的な器種で、高坏類に対応する蓋である。坏H蓋の天井部に摘みをもつもので、図示し得た資料は後述の坏H蓋に比して器高がやや高い。丸みを帯びた天井部から口縁部に移行し、口縁端部は丸く収めている。2点とも口径が12cm台で、これらは灰原からの出土である。なお、窯体内からは確認されていない。本資料は、後述の長脚高坏(第11図99)とセットになるものと考えられ、出土量はきわめて少ない。

坏H蓋 (第8図3・4、図版7)

後述する坏H身と対応する蓋で、古墳時代に広く普及した器種である。天井部は全体に浅く扁平で、天井部と口縁部との境界は不明瞭である。有蓋高坏の蓋と同様に口縁端部は丸く収めている。口径は12cm台で、灰原からの出土である。なお、出土量は少ない。

坏H身 (第8図5~9、図版7)

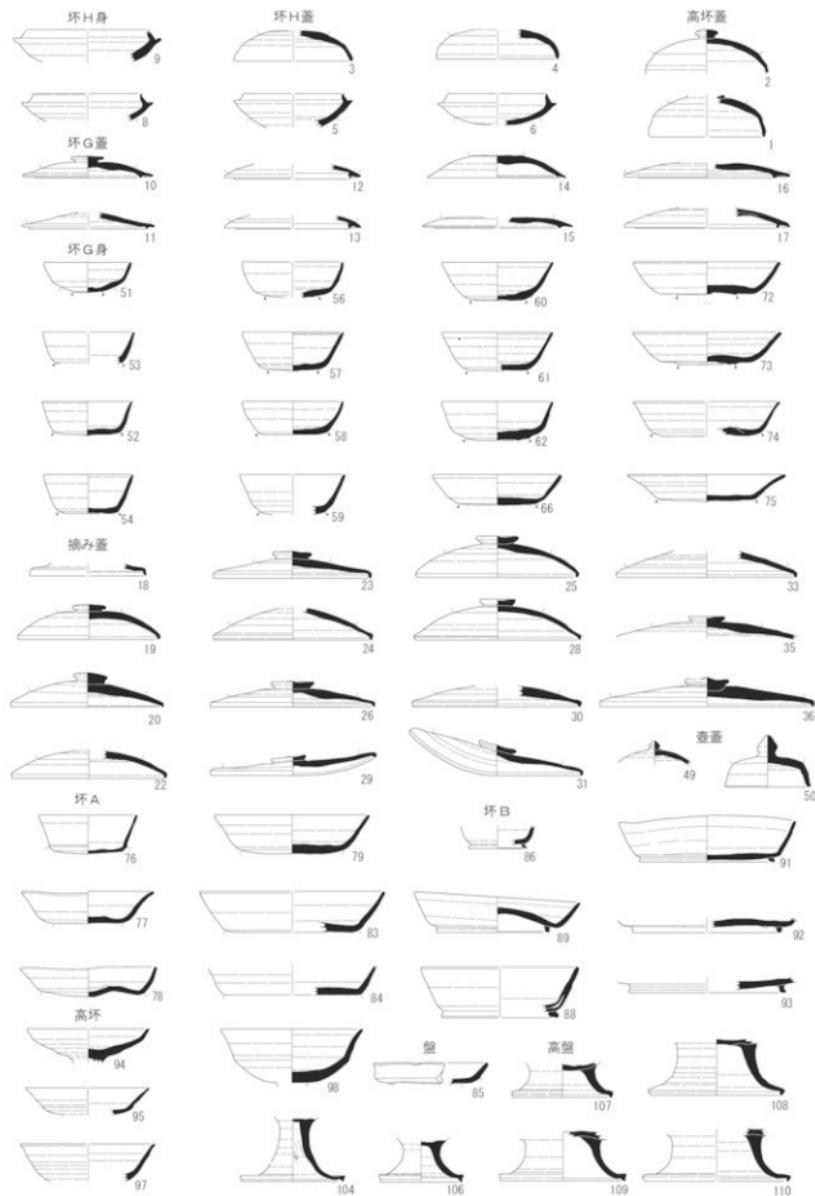
受部の立ち上がりは矮小化し、受部は水平ないし上向きに延びている。底部は全体に浅く、扁平な器形である。図示し得た資料は5点で、口径が10~11cm台の小型のもの(5~8)と、12cm台のもの(9)がある。いずれも灰原からの出土で、これらも出土量は少ない。

坏G蓋 (第8図10~17、図版7)

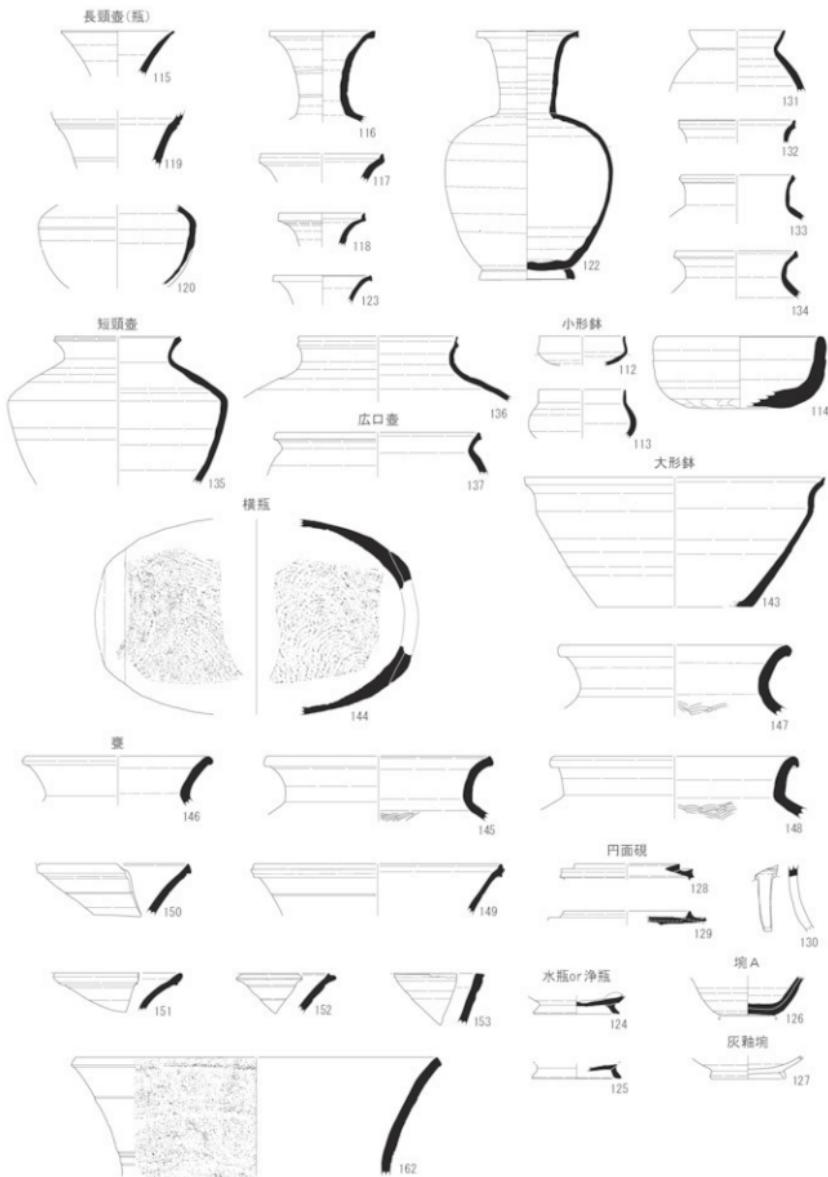
天井部に摘みを有し、口縁端部内面に返りをもつ。また、返り蓋とも呼称される。天井部は全体に浅く扁平な器形である。図示し得た資料は8点。口径の違いから13~14cm台前半(1類)と、15cm台(2類)、17cm台(3類)の3種に分けられる。出土位置は、焚口部記載が1例で、他は灰原出土と推測される。坏類との関係では、坏G蓋1類が坏G身3類、坏G蓋2類が坏G身4類、坏G蓋3類が坏G身5類との対応が推測される。

坏G身 (第9~11図51~75、図版8・9)

へラ切り技法による平底の坏で、前述の坏G蓋(返り蓋)とセット関係にあるものと推測される。図示し得た資料は25点であるが、そのうち口径が計測できた19点の資料をもとに細別すると、9cm台前半(1類)、10~11cm台前半(2類)、11cm台後半~12cm台前半(3類)、13cm台前半(4類)、15~



第6図 信包中原田 1号窯跡出土須恵器分類図 1 (1/5)



第7図 信包中原田1号窯跡出土須恵器分類図2 (1/5)

16cm台前半（5類）の5種に分けられる。出土位置は、焼成部・燃焼部・焚口部・灰原など、多岐にわたって出土しており、窯内出土の坏類は焼成時の資料と推測される。

摘み蓋（第8・9図18～49、図版7・8）

天井部に摘みを有し、口縁端部が折り返された蓋の総称で、蓋類の中ではもっとも多い器種である。天井部の形態は、全体に丸みのあるものと浅く扁平な二者がある。摘みはボタン状の径3cm台後半～4cm台のもので占められるが、擬宝珠状の蓋が1点ある（49）。口径が計測できた18点の資料をもとに細別すると、12cm内外（1類）、14cm台（2類）、15cm台後半～17cm台前半（3類）、18cm台（4類）、22cm台（5類）の5種に分けられる。多くは15～17cm台に収まる3類で、もっとも大きい5類の蓋は、広口壺、盤、坏B 4類などの器種に対応するものと推測される。

壺蓋（第9図50、図版8）

擬宝珠状の摘みを有し、天井部が扁平で、口縁部が長い形態の小型の蓋。短頸壺ないし薬壺などの小形品の蓋と推測される。図示し得た資料以外に確認した個体はない。出土位置は灰原と推測される。

坏A（第11図76～84、図版9）

回転ヘラ削り技法による平底の坏で、前述の摘み蓋とセット関係にあるものと推測される。図示し得た資料は9点であるが、そのうち口径が計測できた5点の資料をもとに細別すると、10cm台（1類）、14cm台（2類）、16cm台（3類）、19cm台（4類）の4種に分けられる。出土位置は、焚口部・前庭部・灰原などであるが、これらも焼成時の資料と推測される。

坏B（第12図86～93・111、図版10）

坏Bは坏Aに高台を付けたもので、本資料も前述の摘み蓋とセット関係にあるものと推測される。図示し得た資料は9点。そのうち口径が計測できたものが3点であるが、高台径より復元した資料を加え細別すると、8cm台（1類）、16～17cm台前半（2類）、18cm台（3類）、20cm台（4類）の4種に分けられる。この他に器高の深い器種がある（111）。出土位置は、燃焼部・焚口部・灰原などで、これらも焼成時の資料と推測される。

盤（第11図85）

口縁部が明瞭に折れる扁平な皿状の器種で、破片のため詳細は不明であるが、この資料は灰原から1点出土したのみである。

高盤（第12図106～110、図版10）

脚台のみの資料で、図示し得た資料は5点。脚台は短脚の1種のみで、長脚のものはみられない。脚台径の違いより小中大の3種程度に分けられる。出土位置は灰原のみである。これと同種のものが杉崎庵寺の鐘楼跡から出土しており、杉崎庵寺では長脚のものも確認されている。

高坏（第12図94～105、図版10）

全体を窺える資料がないため詳細は不明であるが、坏部の形態や口径、深さ、脚の長短、脚台部の径などの違いより細別できる。図示し得た資料は12点で、その大半は無蓋短脚高坏と推測され、長脚高坏（99）は1点のみ。これは古墳時代に遡るものと思われる。出土位置は、灰原が中心であるが、焚口部からも確認されている。

長頸壺（瓶）（第13図115～123、図版11）

全体を窺える資料は1点のみであるが、口縁部および頸・肩部の違いから数種に種別できる。図示し得た資料は9点。口縁部の違いでは、直口縁のもの（115）と口縁端部に縁帯をめぐらすもの（116

～123)、頸部・肩部の違いでは、頸部が外反するもの(115・116～118)と直線的に延びるもの(122)、肩部に棱を有するもの(120)と丸みをもつものの(122)などに分けられる。肩部に棱を有するものは胴上半に沈線をめぐらし、胴部が短い(120)。一方、丸みをもつものは胴部が全体にやや長い(122)。また、頸部に沈線をめぐらすものもある(116・119)。肩部が折れるものが古く、丸みをもつものに形式変化すると推測される。出土位置は、灰原が中心であるが焚口部やその周辺からも出土している。

短頸壺 (第14図131～136・141・142、図版12)

全体を窺える資料がないため詳細は不明であるが、概して口縁部が短く折れ、直立ないし外反し、胴部の上半に肩部を形成するものを短頸壺として一括した。図示し得た資料は12点であるが、口縁部形態だけでも多種多彩で種別は難しい。とくに後述する広口壺との区別は簡単ではない。また、壺との種別では、外面の叩きや当具痕の有無で判断した。出土位置は灰原と推測される。

広口壺 (第14図137、図版12)

全体のわかるものはないが、短頸壺に対して大きく口が開くものを広口壺とした。識別できたものは1個体のみ。出土位置は灰原と推測される。

壺底部 (第14図139・140)

短頸壺ないし広口壺の底部と推測される部位である。出土位置は灰原と推測される。

横瓶 (第15図144、図版12)

俵形の体部に「く」の字状と考えられる短い口縁部が付くものであるが、体部のみの資料である。識別できたものは1個体のみ。出土位置は灰原と推測される。

塊A (第13図126、図版11)

塊Aは無台壺のうち、底部の切り離し技法が回転糸切りのもので、出土位置は灰原と推測される。なお、この資料は重ね焼されたもので、近隣には当該期の窯跡があるものと考えられる。

鉢 (第13・14図112～114・138・143、図版11・12)

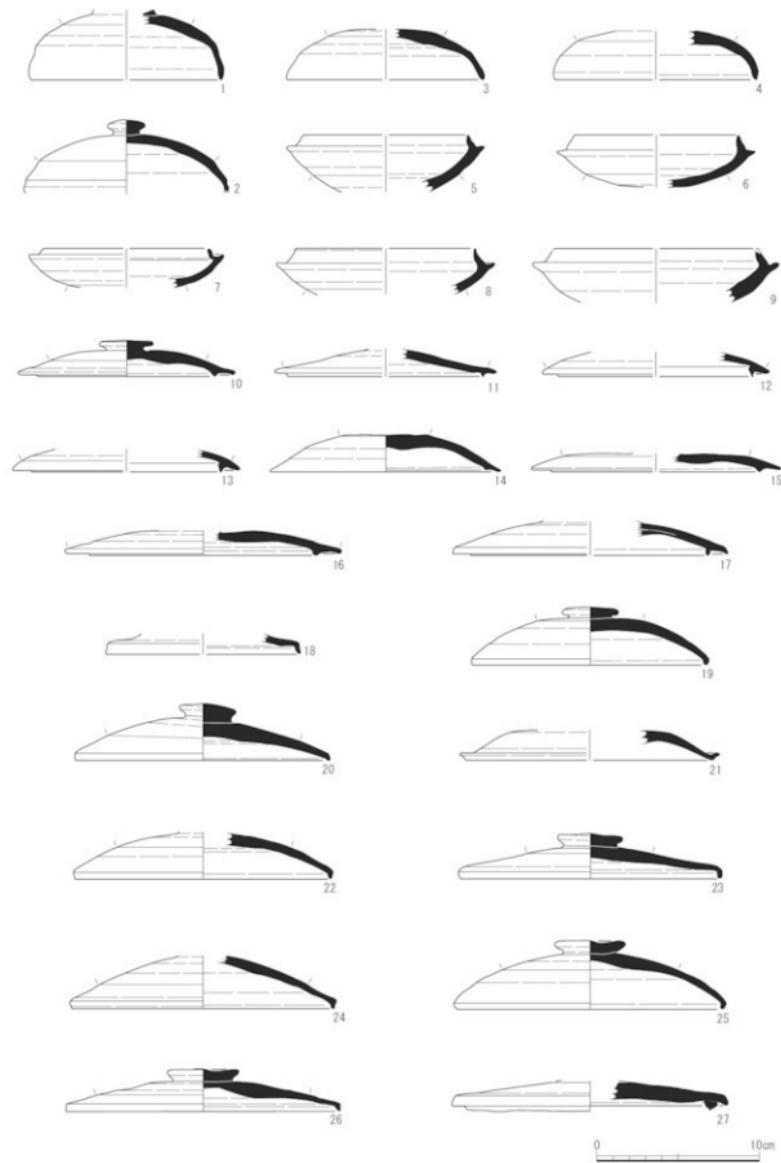
壺や壺類とも異なり、ここでは大小を問わず、広口形態の器種を一括して鉢類として取り扱った。大形の鉢(138・143)は、図示し得たものは2点であるが、主要器種の一翼を担うものと推測される。小形の器種(112～114)は、壺や小形の壺とも異なるが、それらは食膳具のうちに含められるものと考えられる。出土位置は灰原と推測される。

甕 (第15～18図145～196、図版15～20)

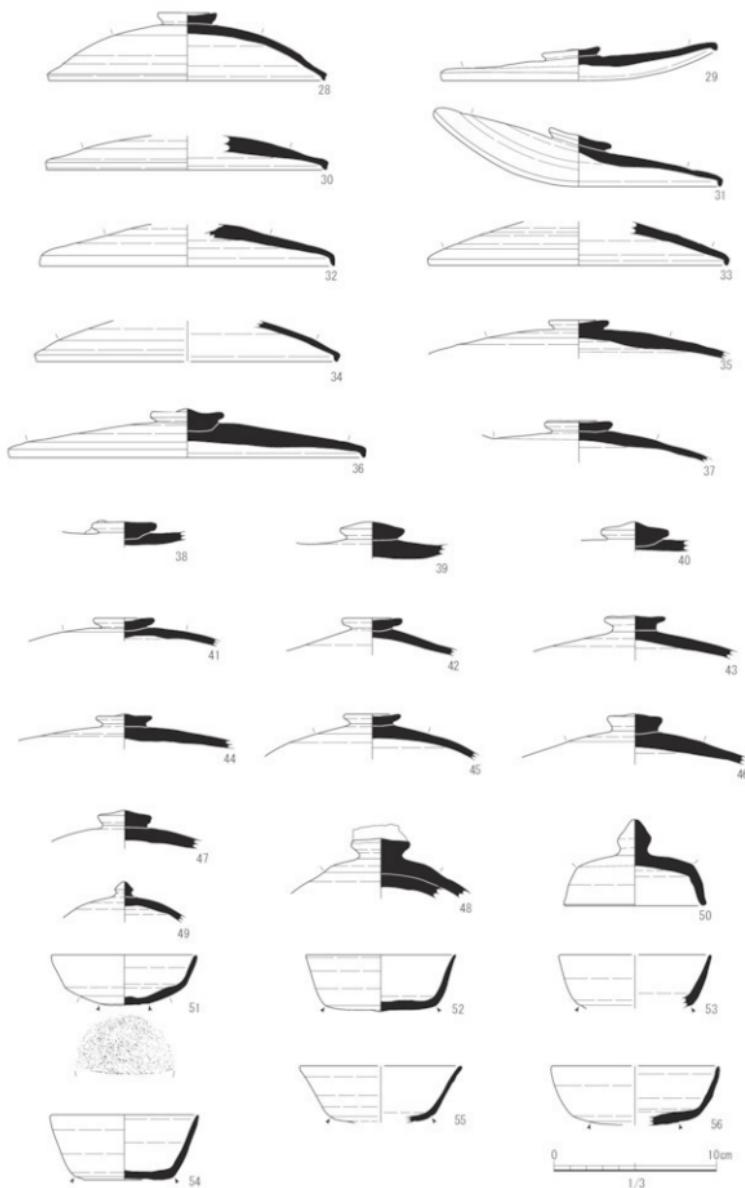
甕は出土量とともに大中小とバラエティに富むが、全体を窺える資料がないため詳細は不明である。大中小を基準に種別すると、口径が40cm前後の大形品(1類)、25cm前後の中形品(2類)、20cm前後の小形品(3類)に分けられる。また、口縁部形態による種別では、口縁部の短いもの(145～148)と、やや長いもの(149～164)に分けられ、前者は古型式の遺制を残すものと推測される。加えて後者の口縁部外面には、櫛齒状工具による波状文や廉状文、斜行文、列点文などが施される。胴部外面には平行文叩きや横位のカキ目なども一部に認められる。また、胴部内面には同心円文や青海波文叩きが一般的であるが、無文の当具痕による調整やナデなどが加えられたものもある。甕類の出土位置は、灰原が中心であるが、焚口部やその周辺からも出土している。

硯 (第13図128～130、図版11)

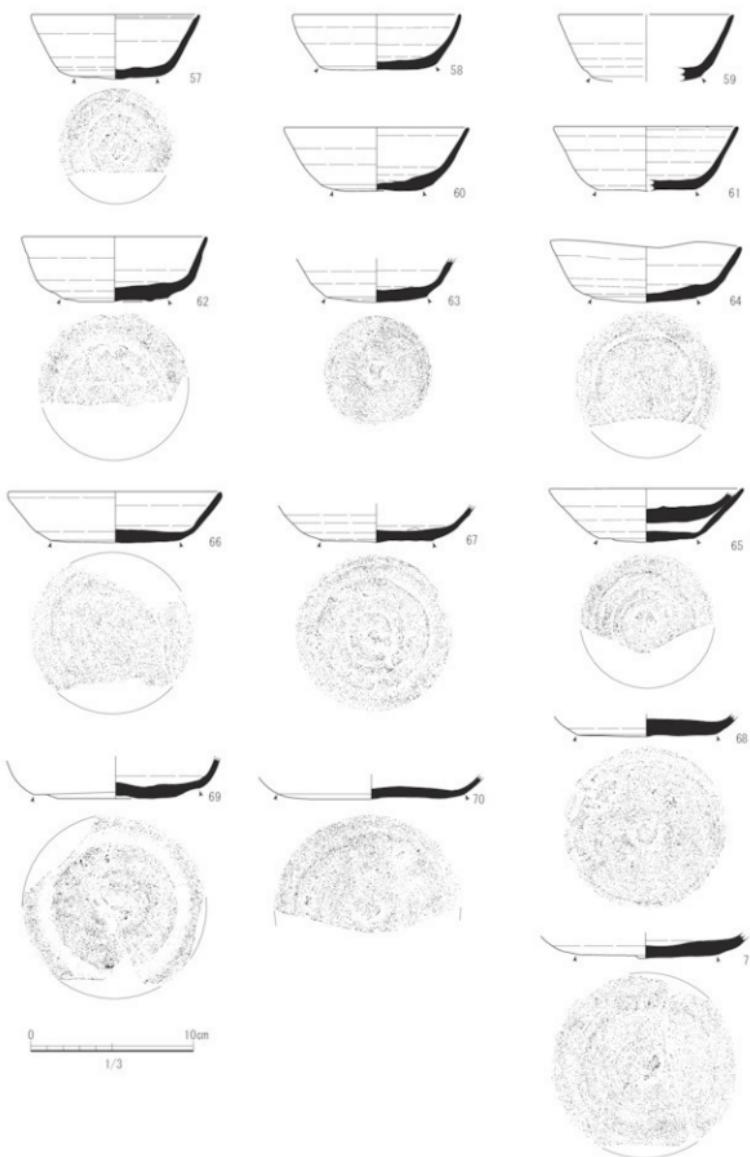
硯は円面硯のみで、焚口部や灰原から出土している。奈良文化財研究所の『平城京出土陶硯集成』(奈良文化財研究所 2006)の陶硯の分類に従えば、圓足円面硯に分類される。



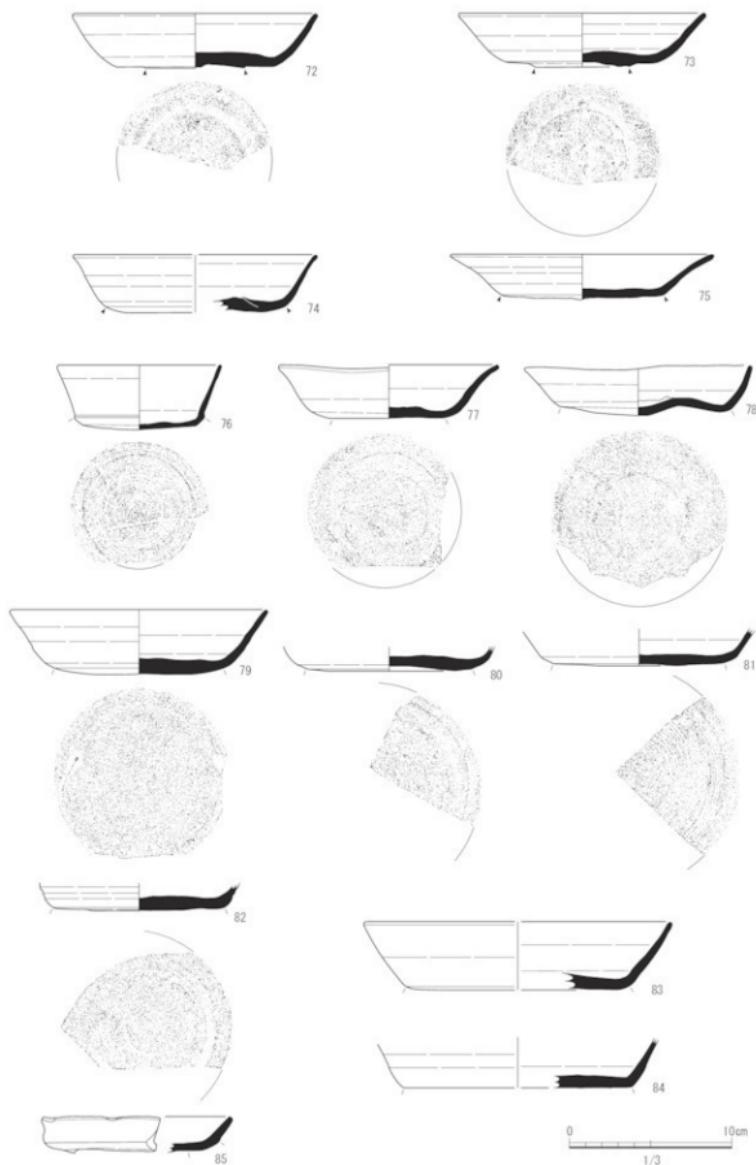
第8図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）1



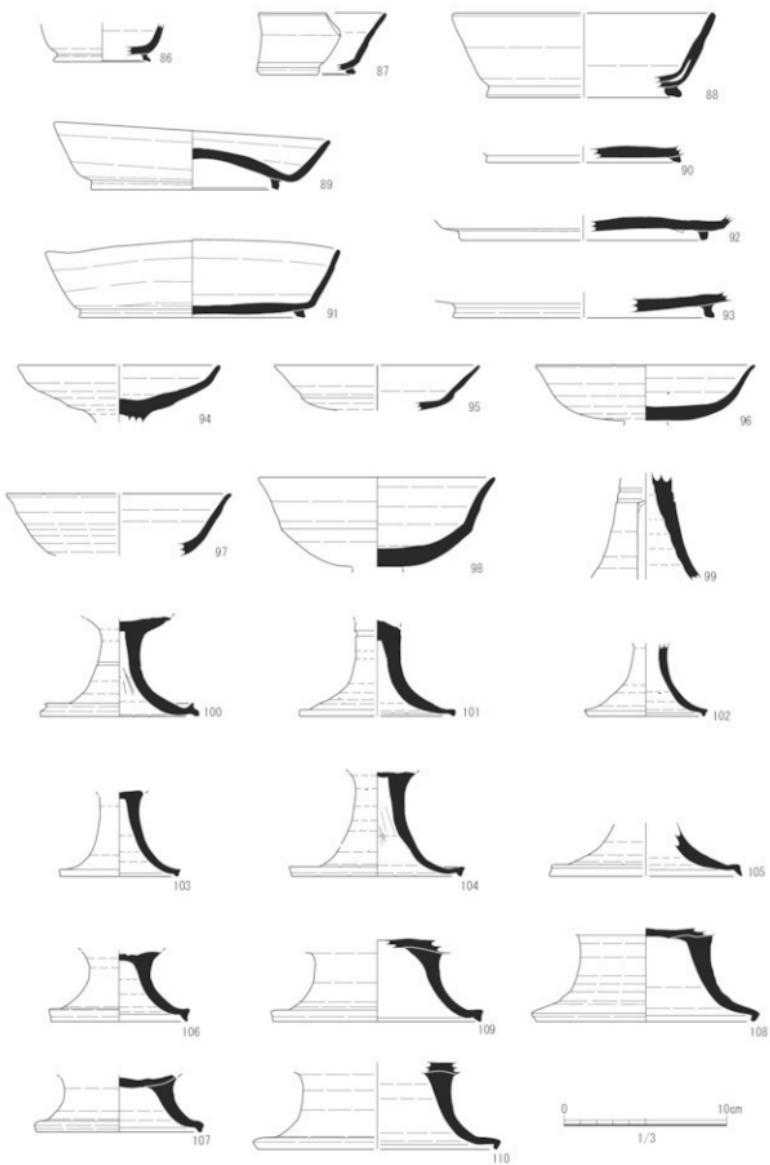
第9図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）2



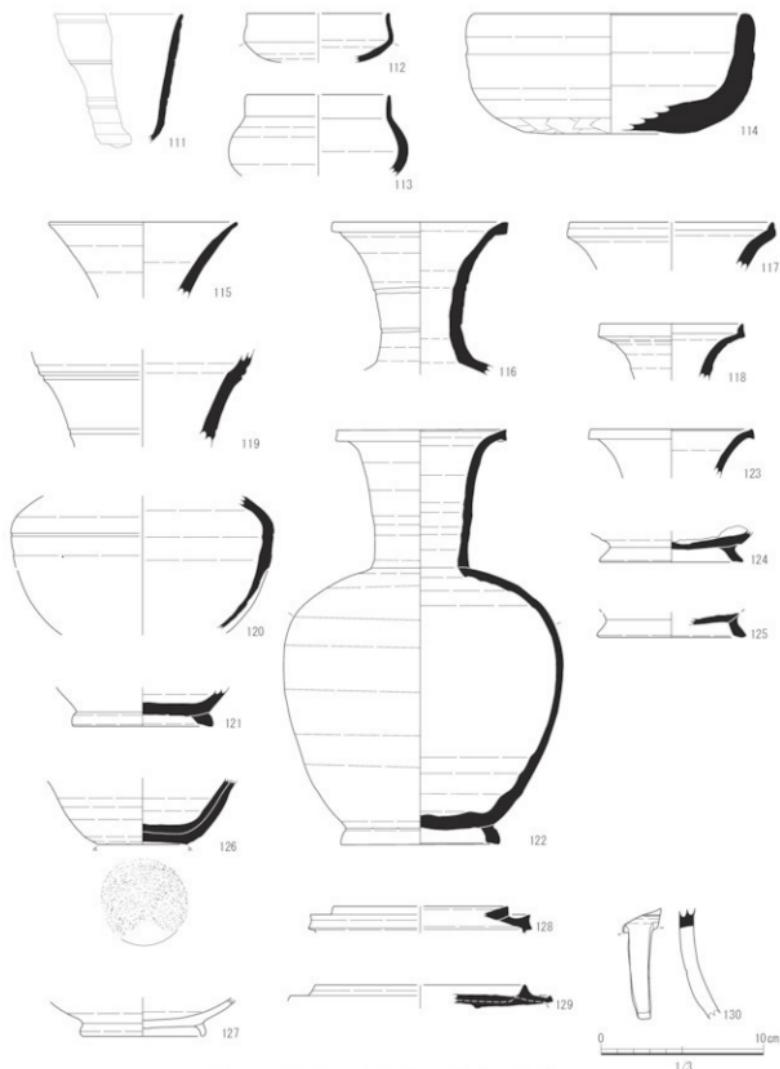
第10図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）3



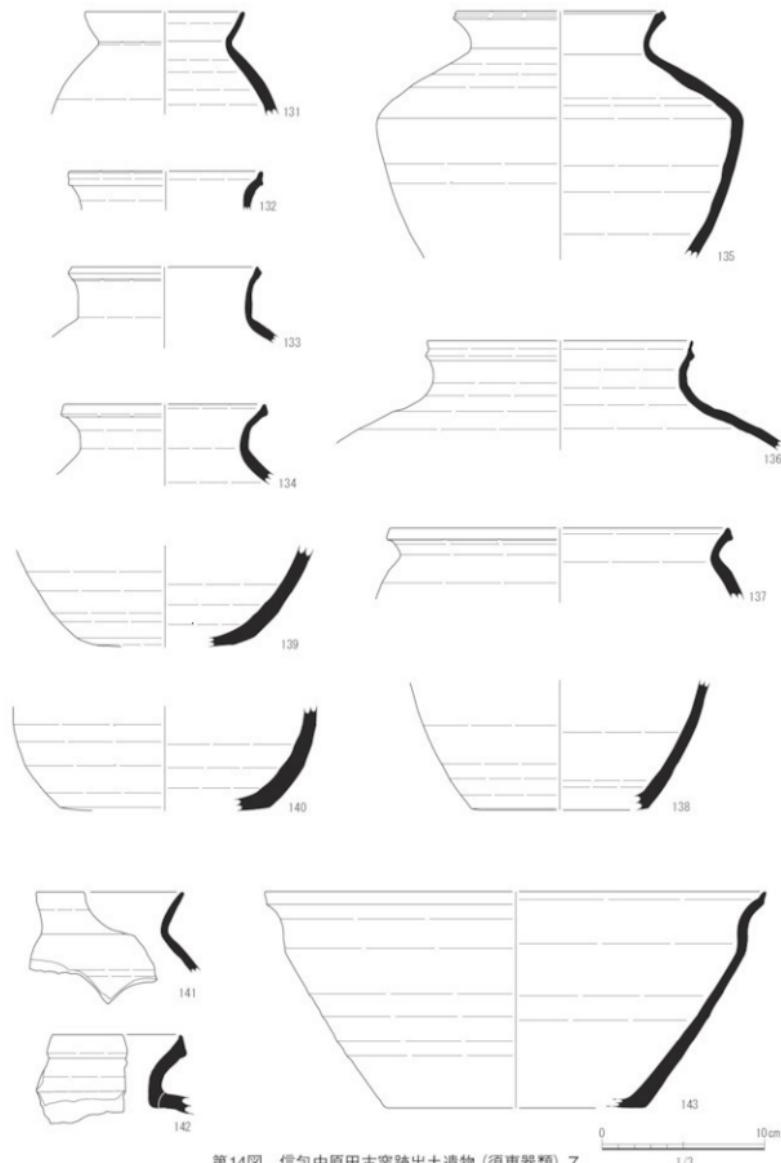
第11図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）4



第12図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）5

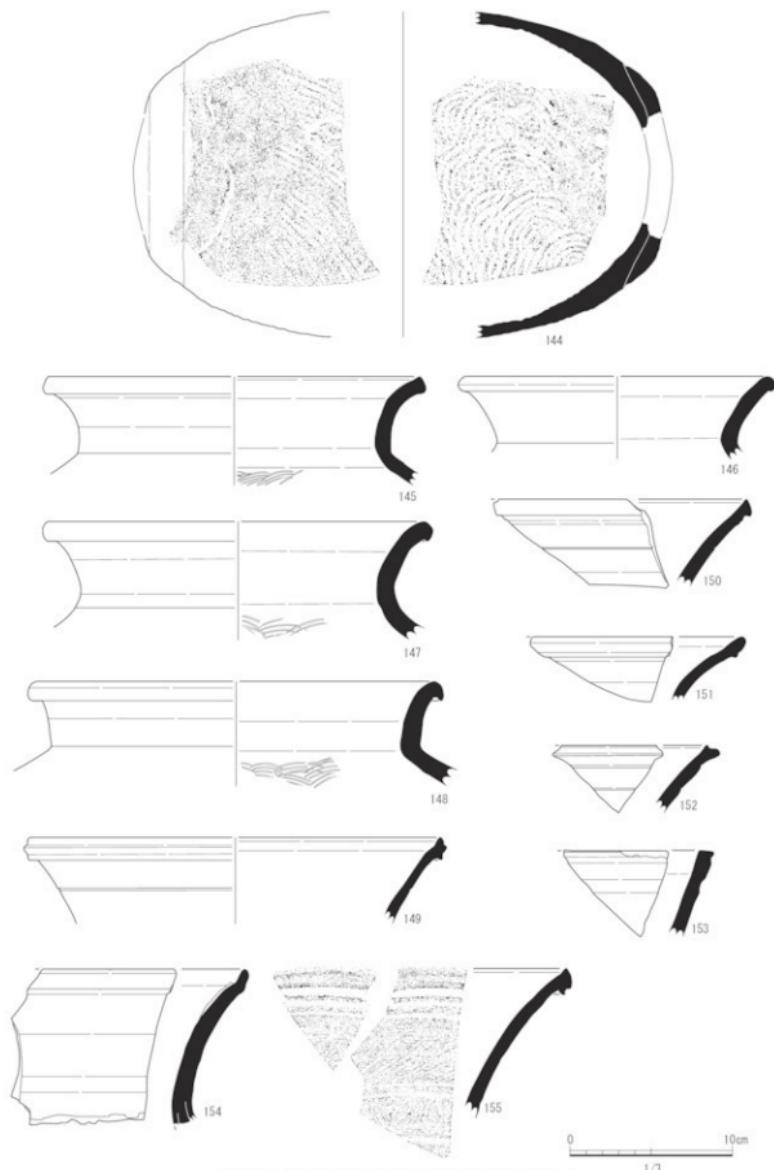


第13図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）6

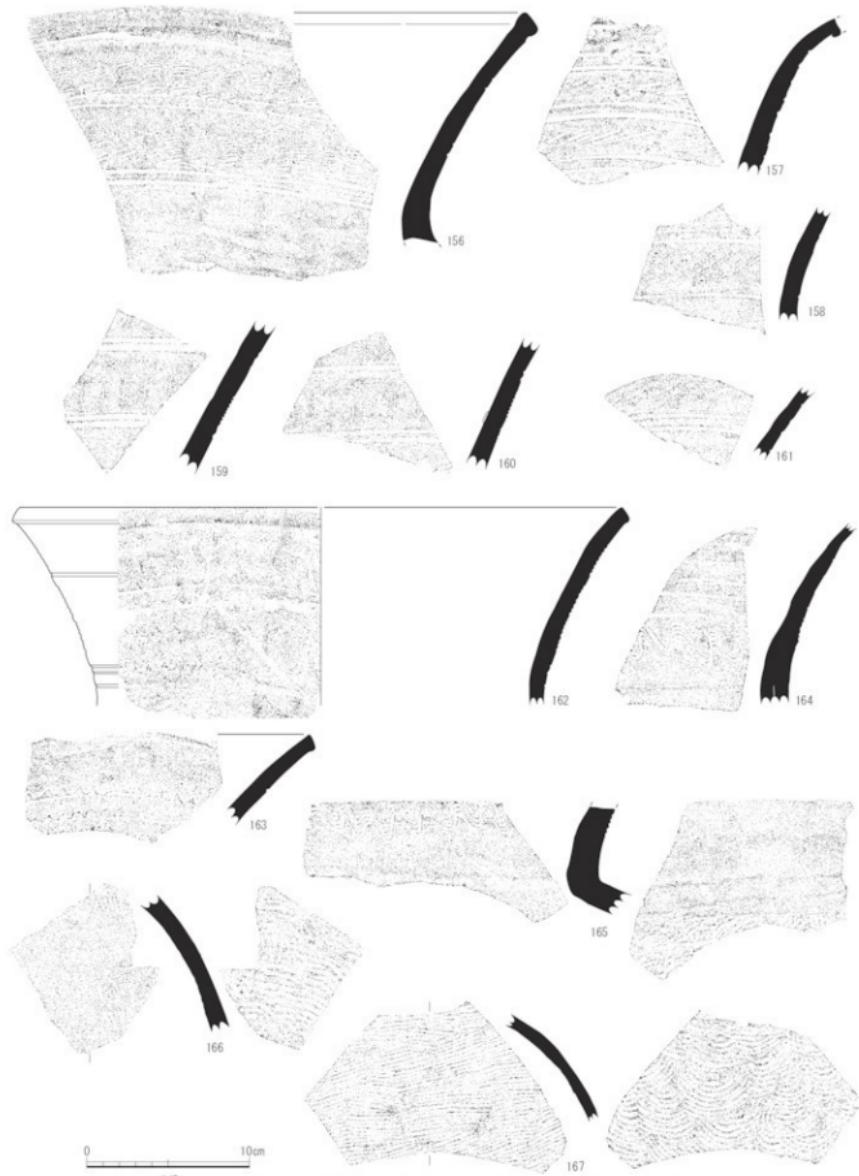


第14図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）7

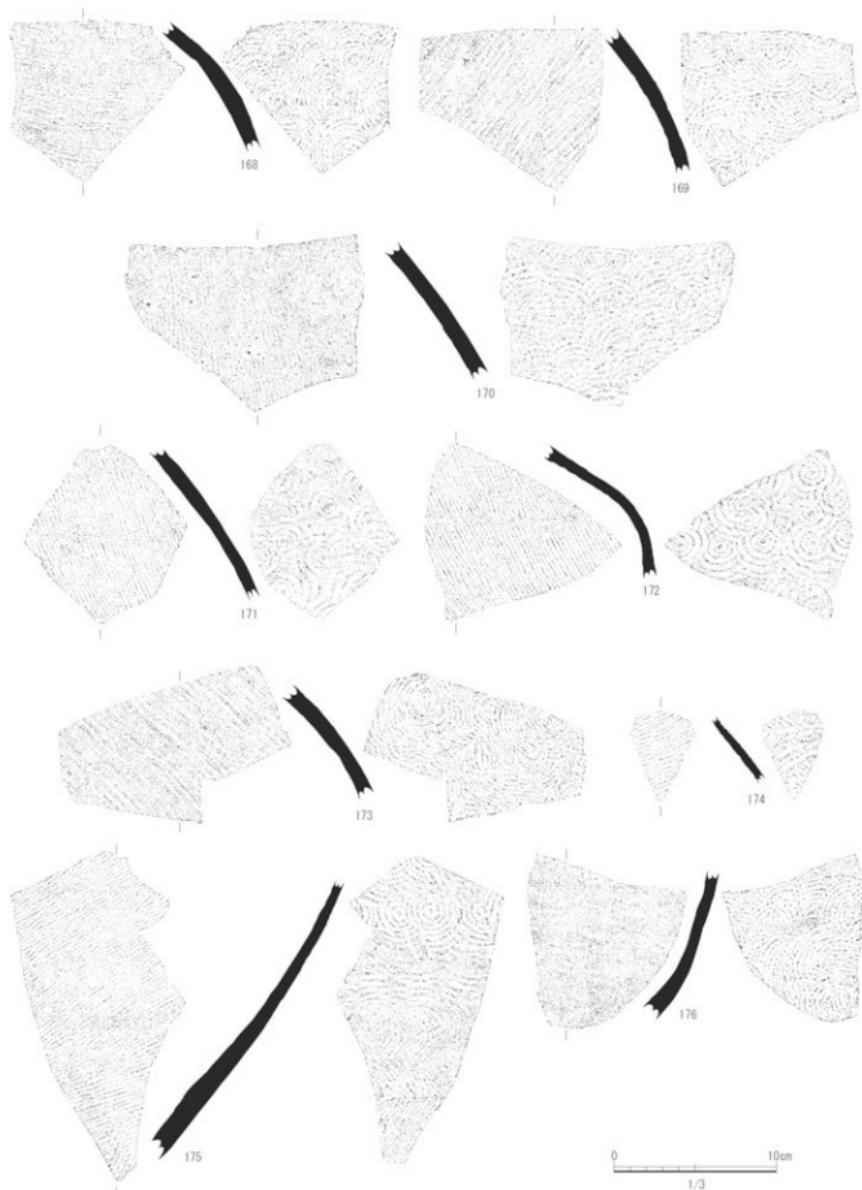
0 10cm
1/3



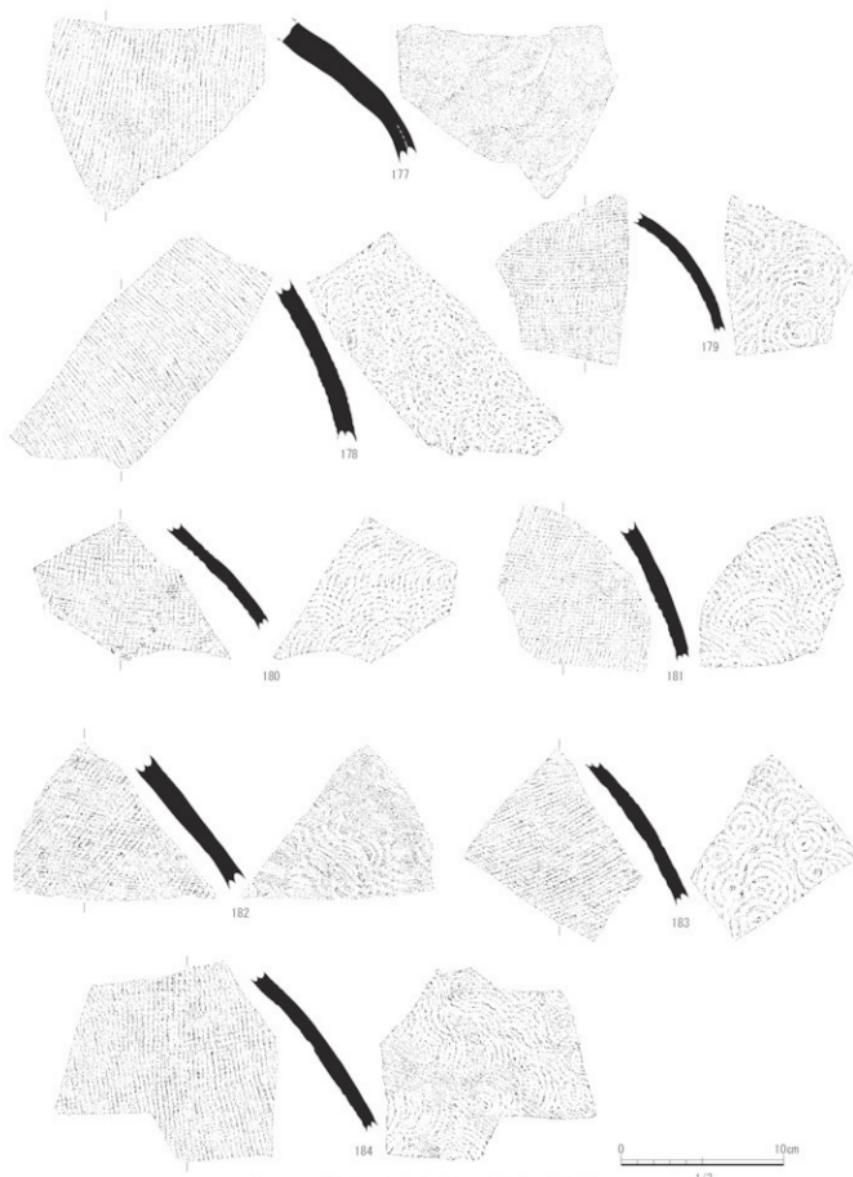
第15図 信包中原田古窯跡出土遺物(須恵器類) 8



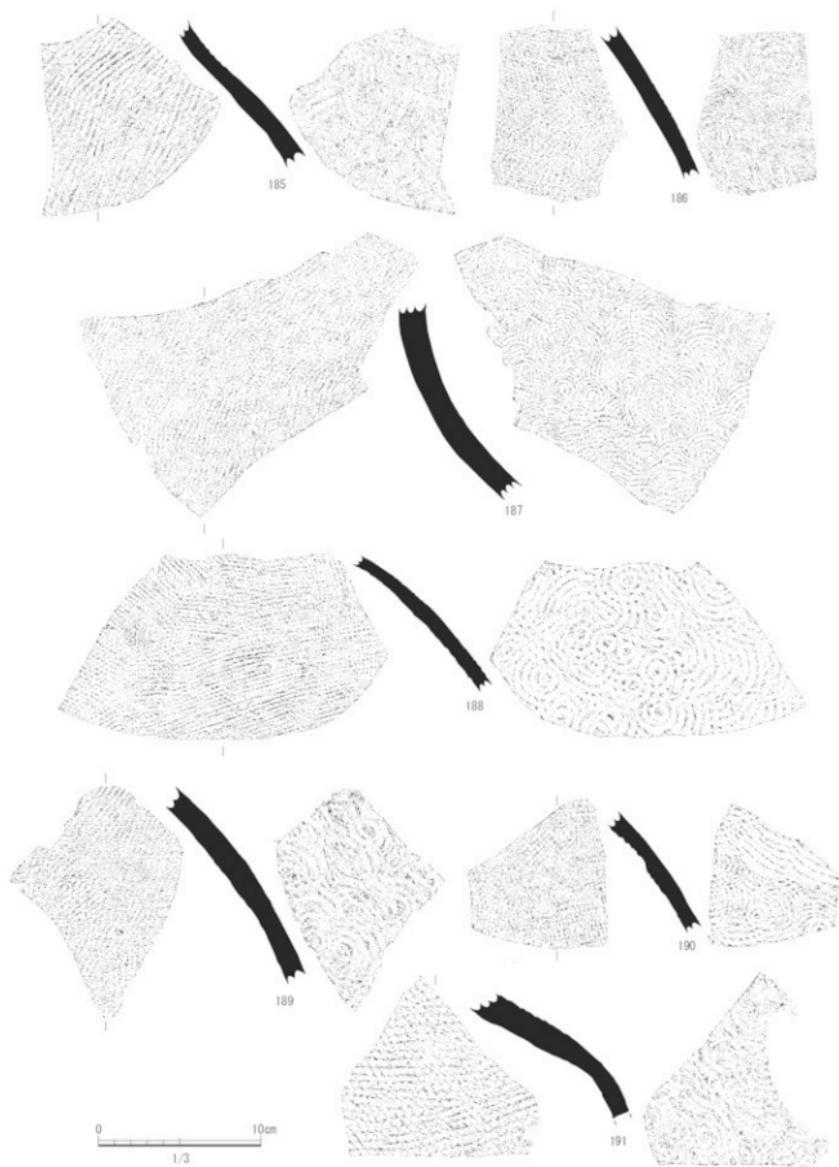
第16図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）9



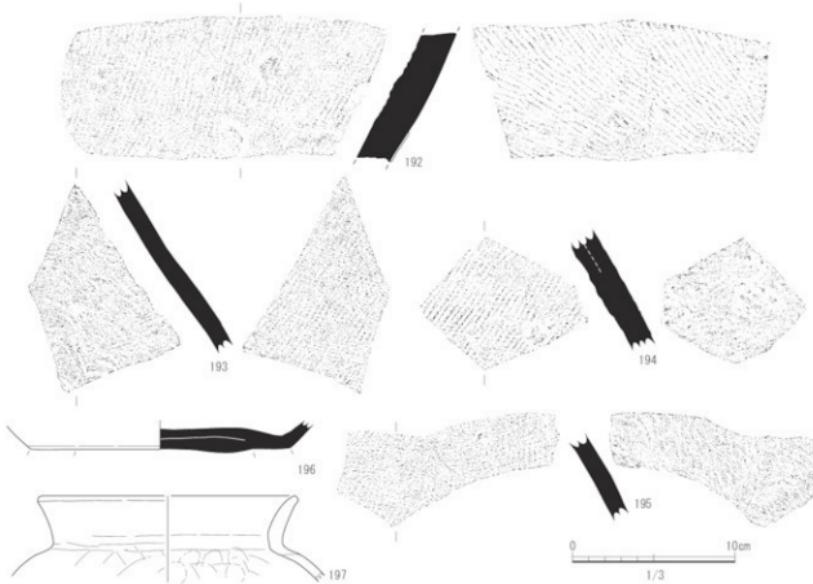
第17図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）10



第18図 信包中原田古窯跡出土遺物(須恵器類) 11



第19図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）12



第20図 信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）13

2. 瓦類（第21～38図、図版18～41）

瓦類は大半が丸瓦と平瓦で、これらに混じって熨斗瓦や鷲尾、軒丸瓦（素弁八葉蓮華文・単弁八葉蓮華文）などもわずかに出土している。これらと同形式の鷲尾や軒丸瓦は、太江の寿楽寺廃寺（財団法人岐阜県教育文化財団2002）からも出土しており、中原田から寿楽寺廃寺への需給関係が明らかにできたことは大きな成果であったといえる。

出土した瓦類は遺物整理箱で42箱分を数えるが、これらは須恵器を焼成した1号窯とは関係のない、灰原出土の資料であることが判明した。また、これらの大半は焼成した直後に廃棄されたものであり、今後は隣接地に予想される瓦窯の確認作業が重要な課題となろう。

出土瓦の掲載にあたっては、瓦の種類および用途に分けて提示することに努めた。出土した瓦には、鷲尾、軒瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦がある。これらのうち、まとまって出土した丸瓦・平瓦については、成形技法（凸面・凹面・側面・端面・断面など）に関して観察し、実測図および観察表に記述した。

本項では、鷲尾、軒瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦のそれぞれの特徴について記述する。

鷲尾（第21図1～5、図版18・19）

図示し得た5点以外に、胴部および縦帯の部位と思われる小破片が4点出土している。1は胴部片。
2・3は連珠文を廉状の沈線で表した縦帯部分の破片。^{かくてんび} 鰭部と腹部の間には二本一組の沈線が縦帯として施され、両者を区画している。連珠文は、いわゆる二重のコンバス文で、成形は型押し技法と考えられる。このコンバス文は、寿楽寺廃寺出土例の縦帯部分と瓜二つである。また、二重の円弧を描くのがその特徴であるが、他の例では各務原市の平蔵寺跡出土の縦帯部分の連珠文と近似している。

4・5は前者の縦帶部分とは別種の破片と考えられ、少なくとも2個体分の破片資料と推測される。焼成は全体に軟質（酸化焰焼成）のものが多く、寿楽寺廃寺出土例ときわめて近似している。なお、飛驥地域での鶴尾の出土例は窯場では信包中原田例、寺院跡では寿楽寺廃寺例がともに初例である。

棟の端を飾るのは鬼瓦であるが、とくに大棟の両端部には鶴尾を飾るのが本式であったとすれば、寿楽寺廃寺は格式の高い寺院であったと考えられる。

軒丸瓦（第21図6～10、図版19）

軒瓦は軒丸瓦の小破片のみで、軒平瓦は出土していない。図示し得た軒丸瓦は5点、これら以外に瓦当部の細破片が3点あるが、丸瓦部まで分かることはない。ここでは寿楽寺廃寺出土例の型式分類に沿って記述する。

6は内区の破片。菱形に図案化された三重圓縁八葉蓮華文軒丸瓦の部位と推測される。子葉間にはT字楔形の間弁をもつ。菱形に図案化された蓮弁は、三角形の花弁と菱形の子葉で構成され、端正な印象を受ける。瓦当裏面はナデ調整され、布目痕は認められない。寿楽寺廃寺VI型式軒丸瓦と同型式。

7～10は内区ないし周縁部にかけての破片。これらは素弁八葉蓮華文の部位と推測され、花弁端は三角状を呈し、弁間の界線も直線的で幾何学文様ともいいくべき様相を呈する。子葉間にはT字楔形の間弁をもつが、それぞれ微妙に異なるため瓦面には何種があるものと考えられる。また、特徴として中房は小さく、蓮子は1+4、花弁は薄内で、周縁が低い。8の中房は八角形状を呈する。瓦当径の復元できたものは8のみであるが、総じて小型のものと考えられる。瓦当裏面は7のみがナデ調整で、他は布目痕である。これらは寿楽寺廃寺I型式軒丸瓦と同型式と推測されるが、寿楽寺廃寺I型式の瓦当裏面はすべて布目痕である。

熨斗瓦（第21・22図11～17、図版19・20）

熨斗瓦は棟の下に短冊形に積んだ瓦で、鶴尾の出土から大棟を形づくりうえで重要な瓦であったと考えられる。図示し得た7点以外に、両側面などの状況より熨斗瓦と判断した破片が19点ほどある。これらはその形状より平瓦を縦に分割して整えたものと推測され、製作工程上では焼成前に分割したものが大半と考えられるが、分割面の粗い側面未調整の17は焼成後に分割されたものと推測される。

熨斗瓦の幅は、両側面が計測できたものは少ないが、その多くは11.0～12.0cmの幅に収まっている。極端に幅の狭い17の例があるが、前述の分割面の特徴から推測すると、焼成後に分割された可能性が考えられる。また、両端幅（広端幅・狭短幅）には若干の差が認められる。

一般に熨斗瓦は反り方によって分類されるが、本窯場出土の熨斗瓦は直熨斗（17）の一例を除くと、一定の反り具合をみせていることから、平瓦を素材として作られていたと考えられる。棟瓦として、特定の場所に葺かれるにもかかわらず、専用品としてではなかったことが窺える。

熨斗瓦の基本的な調整は平瓦に準じているが、凹面には糸切痕や枠板圧痕、布目痕などが認められ、凸面には主に側縁ないし端縁方向のナデが施され、叩き板によって調整されたものは少ない。また、枠板圧痕や粘土合わせなどの痕跡から、熨斗瓦の大半は平瓦における粘土板桶巻作りの特徴を示しているものと考えられる。

丸瓦（第22～27図18～45、図版20～25）

丸瓦は、葺き重ね用の繋ぎ目の有無から無段式（行基式）と有段式（玉縁式）丸瓦に分けられるが、中原田古窯跡の窯場からは無段式丸瓦のみで有段式はまったく出土していない。これらの基本成形は、円筒状の成形台に粘土用材を巻き付けて形づくったものと推測される。円筒を作る技法として、土管

ないし円筒形の成形台に粘土板を巻き付けるものと、粘土紐を巻き上げるものがあるが、大半は前者のもので、後者は少ない。粘土板を巻き付けるものは凹面に粘土板の合わせ目の痕跡が残る場合が多く、また粘土紐のものは凹面に幅2~3cmほどの粘土紐の痕跡(23・29)を認めることができる。前者の粘土板の場合には糸切りの痕跡が残る。この他に凹面に残る痕跡には、糸切り・布目痕以外に細い枠板幅の痕跡が認められる。平瓦では、枠板を連結した成形台(造瓦器具)の痕跡を枠板圧痕として説明したが、丸瓦のそれは竹を割って連結した円筒形の成形台による痕跡と推測される。

これらを仮に「竹状模骨痕」と呼ぶと、丸瓦では竹状模骨痕の痕跡を残すものが多い。竹状模骨痕の不明瞭なものについては、丸太状の木型に残った調整跡のようにみえるものもある。わずかであるが竹状模骨痕の痕跡がまったく認められないもの(28)もあるので、その復元には慎重を要する。

凸面では、側縁ないし端縁方向にナデもしくは箒ナデによる調整痕を残すものが大半で、叩き目の痕跡を残すものは少ない。また、叩き目を残すものでは、側縁方向の平行叩きのもの(38)、交互に平行叩きを施したもの(39)、櫛齒状工具による波状を呈するもの(40)、縄叩きのもの(41・42~44)、格子叩きのもの(45)などがあるが、波状と格子叩きの例は図示し得た資料のみである。なお、格子叩きの凹面には側縁方向に指ナデの調整が加えられ、糸切り・布目痕などの痕跡は認められない。

両側面と両端面の調整は、凹面では成形台から外しただけで、基本的には両側縁の面取りを除いて調整痕は認められない。凸面では側縁を面取りするものが図示し得た資料の中に2点(18・32)ある。なお、分割の際の分割突帯や分割裁線などの痕跡は確認されていない。

丸瓦の狭端縁側の中央部には貫通孔のある例(第22図18~20)が若干認められるが、貫通孔を確認できたものはすべて丸瓦である。また、凸面の調整は、いずれも側縁方向の箒ナデ調整である。孔は略円形で、径は1.5~1.8cmである。

平瓦(第27~38図46~106、図版26~41)

出土した平瓦の大半は、概ね4~5cmの板を綴じ合わせた桶型の成形台(裁頭円錐形)に、粘土板を巻き付けて粘土円筒を作り、これを3分割ないし4分割して完成させた桶巻作りによるものである。この他に、凸型に湾曲した成形台の上で、粘土板や粘土紐を用いて作った一枚作りが若干認められる。

まずははじめに、出土した桶巻作りによる平瓦の特徴をみると、凹面では桶型の成形台の痕跡を示す枠板圧痕、桶縫じ痕跡、糸切り痕、粘土板合わせ目痕、それに布の綴じ合わせ目などの痕跡を根拠に粘土板桶巻作りの成形技法と判断した。とくに、枠板圧痕の痕跡は桶型の成形台を示す根拠となるが、今回の資料のなかに枠板圧痕の痕跡が不明瞭なものが含まれていた。出土量は少ないが、粘土板一枚作りによる凸型台の痕跡と考えることもできるため、復元には注意を必要としよう。また、本資料のなかに1例であるが凹面に粘土紐の痕跡(66)が認められるものがある。この資料は粘土紐一枚作りと推測される。凸面調整では、ナデもしくは箒による調整痕を残すもと、叩き目の痕跡を残すもののがほぼ半々である。前者のなかには平行叩きの痕跡がわずかに認められるものも含まれるが、これらは一次調整で平行叩きしたものをナデもしくは箒による再調整によって叩きが消されたと考えられる。また、叩き目を残すものでは平行叩きのものが多い。平行叩きには、側縁方向のもの(78・79・81)、斜方向のもの(80・82~87・90・91)、端縁方向のもの(88・89)、交互に施したもの(94~98)などがある。これら以外に、長方形格子叩きのもの(99~106)と縄叩きのもの(107)があるが、縄叩きで図示し得たのは本資料のみである。

また、凹面には端縁方向にある等間隔で数条の窪み(63・70・82・90・98・101)が認められるが、

これは桶枠を固定するための痕跡（桶縫じ痕跡）と考えられる。同様に凸面には縄を巻き付けた痕跡（49・64・65）が認められるが、これは桶型の成形台に叩き締めた粘土板を固定するために用いた紐の痕跡と推測される。

なお、側面ないし側縁において分割凸帯や分割裁線などの分割に関わる痕跡は確認できていない。

一方、一枚作りによる特徴では、凸型の成形台上に弓で切った平瓦一枚分の粘土板ないし粘土紐を素材として一定の形に整える点で桶巻作りとは異なる。成形台に布を用いる点では桶巻作りの場合と同じ目的であるが、つぎの3点で大きな相違がある。1点目は枠板圧痕の痕跡が認められないこと。2点目は曲率の弱いものが多いこと。3点目は成形台に使用する布の使用方法が異なるため布目痕に重みが少ないとされる。これらの特徴を示す平瓦は図示し得た中に2点（58・59）ある。凸面ではナデもしくは箒ナデによる調整痕を残すのみである。

3. 灰釉陶器・土師器・陶製品（第13・20・38図、図版11・18・41）

窯場付近およびその周辺から出土した須恵器・瓦以外の同時代との関連が推測される灰釉陶器塊、土師器甕、陶製品について掲載する。

灰釉陶器塊（第13図127、図版11）

窯場付近出土の採取資料で、灰釉製品は本例のみ。高台部および体部の一部が遺存する資料である。三日月形を呈する高台部の特徴より黒鉢90窯式に比定される。

土師器甕（第20図197、図版18）

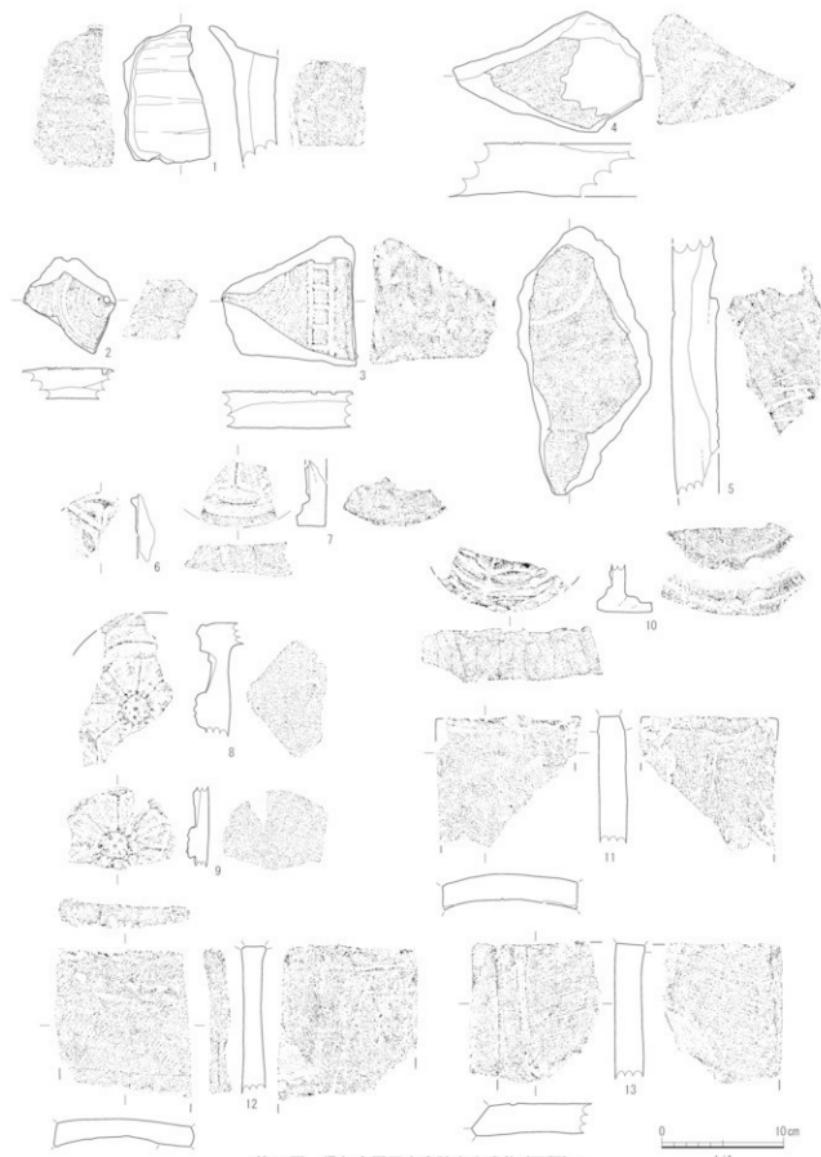
灰原出土の資料と考えられる土師器甕で、土師器片は何点か出土したが図示し得た資料は本例のみ。口縁部は「く」の字状に外傾し、胴部は球形状を呈するものと推測される。

陶製品（第38図108、図版41）

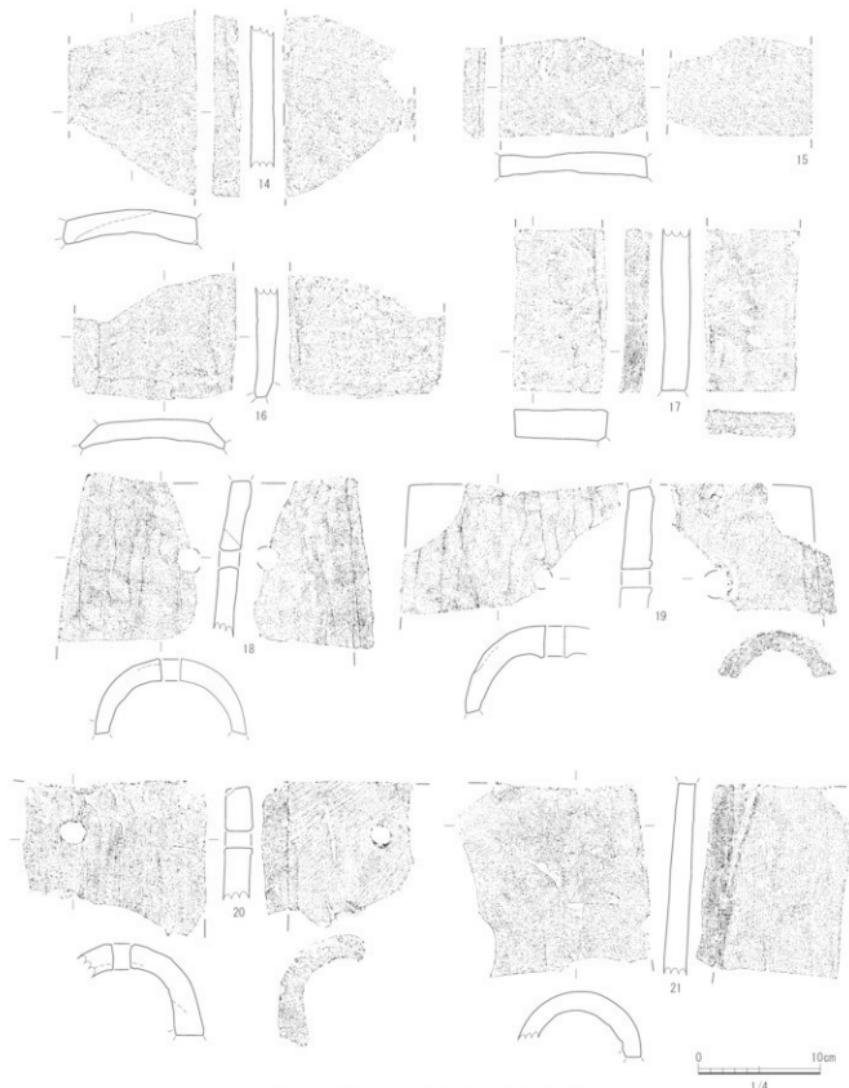
灰原出土の資料で、長さ9.2cm、幅3.0～3.4cmの直方体を呈する陶製品である。四面をヘラで整え、中央部の角に斜めの穿孔を設けている。

引用・参考文献

- 古代の土器研究会編 1991『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』
- 古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』
- 大塚 章 1994『寿楽寺廐寺出土の軒丸瓦について－飛驒地方の古代寺院に関する一考察－』『岐阜県博物館調査研究報告』第15号 岐阜県博物館
- 古川町教育委員会 1998『岐阜県吉城郡古川町 杉崎廐寺跡発掘調査報告書』
- 三河考古刊行会 1999『第4回三河考古合同研究会 古墳時代の猿投窯と湖西窯』
- 財團法人岐阜県教育文化財団 2002『太江遺跡・寿楽寺廐寺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第74集
- 財團法人岐阜県教育文化財団 2005『太江遺跡II』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第94集
- 奈良文化財研究所 2006『平城京出土陶硯集成I－平城宮跡－』
- 窯跡研究会編 2010『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』



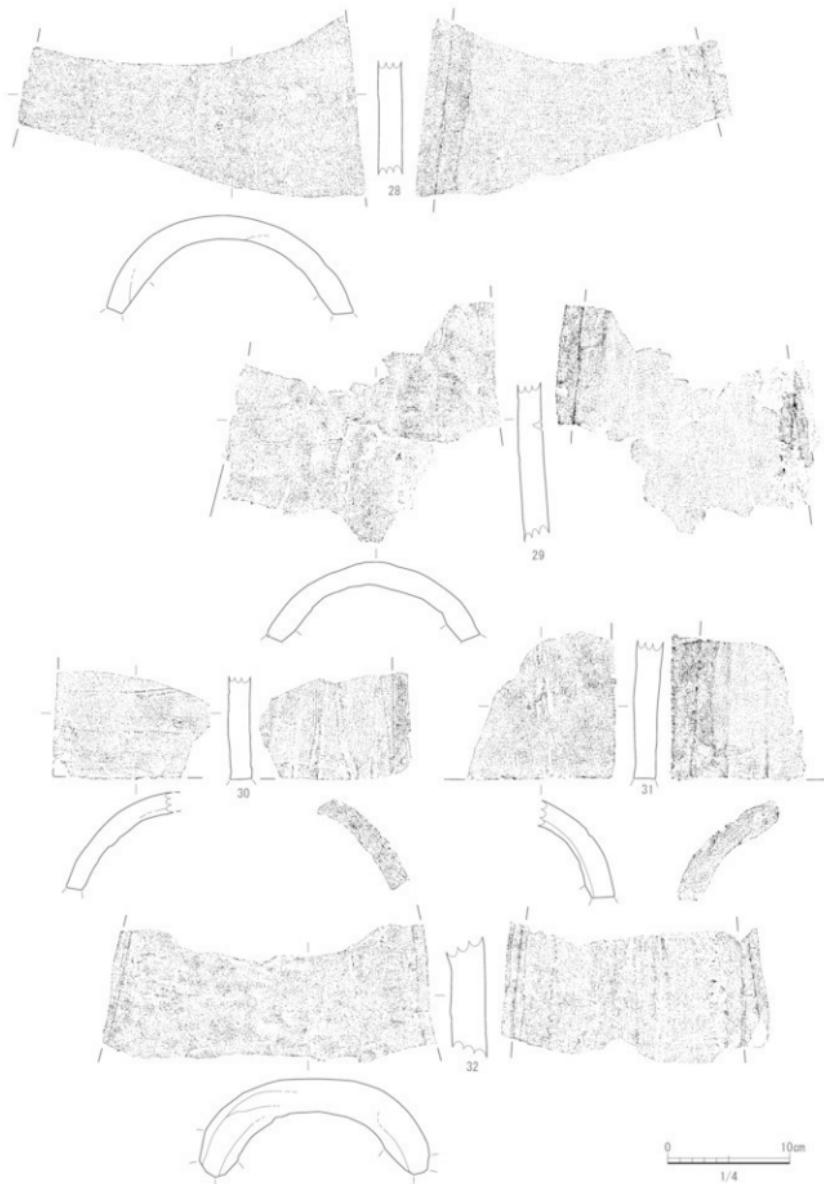
第21図 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）1



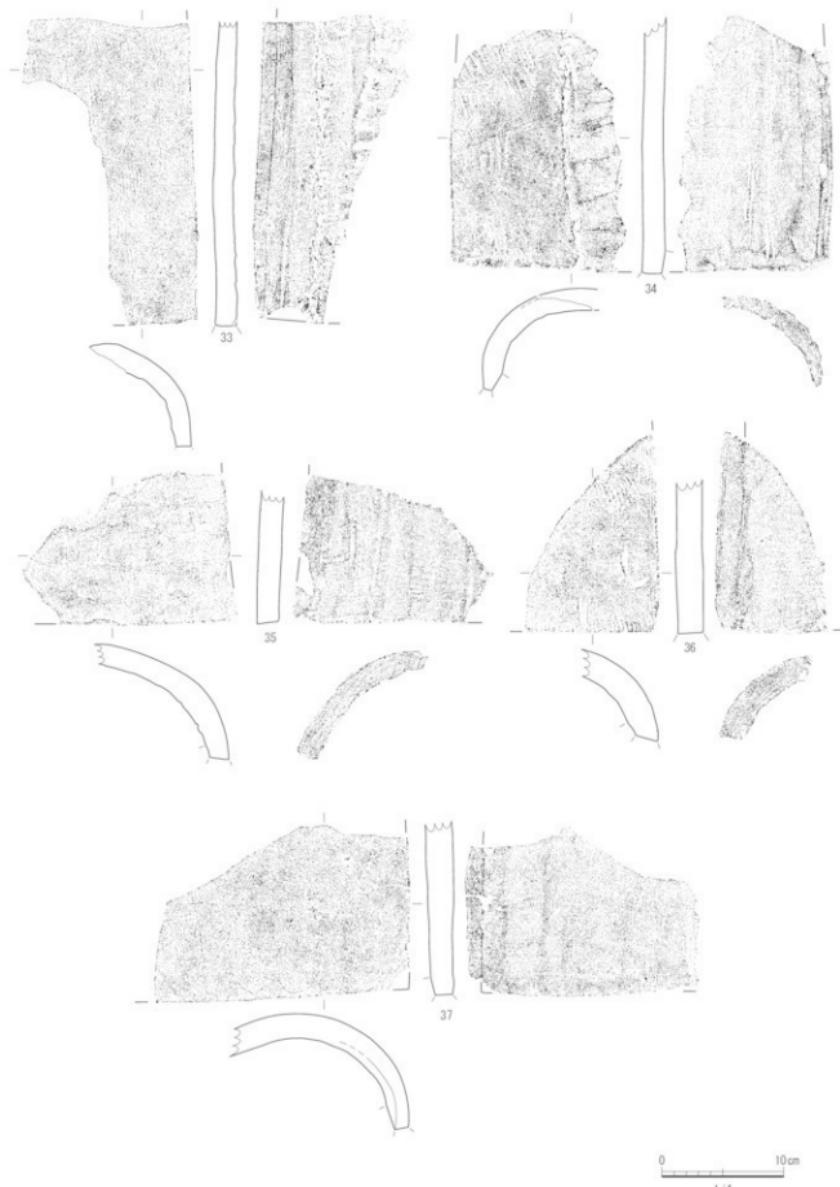
第22図 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）2



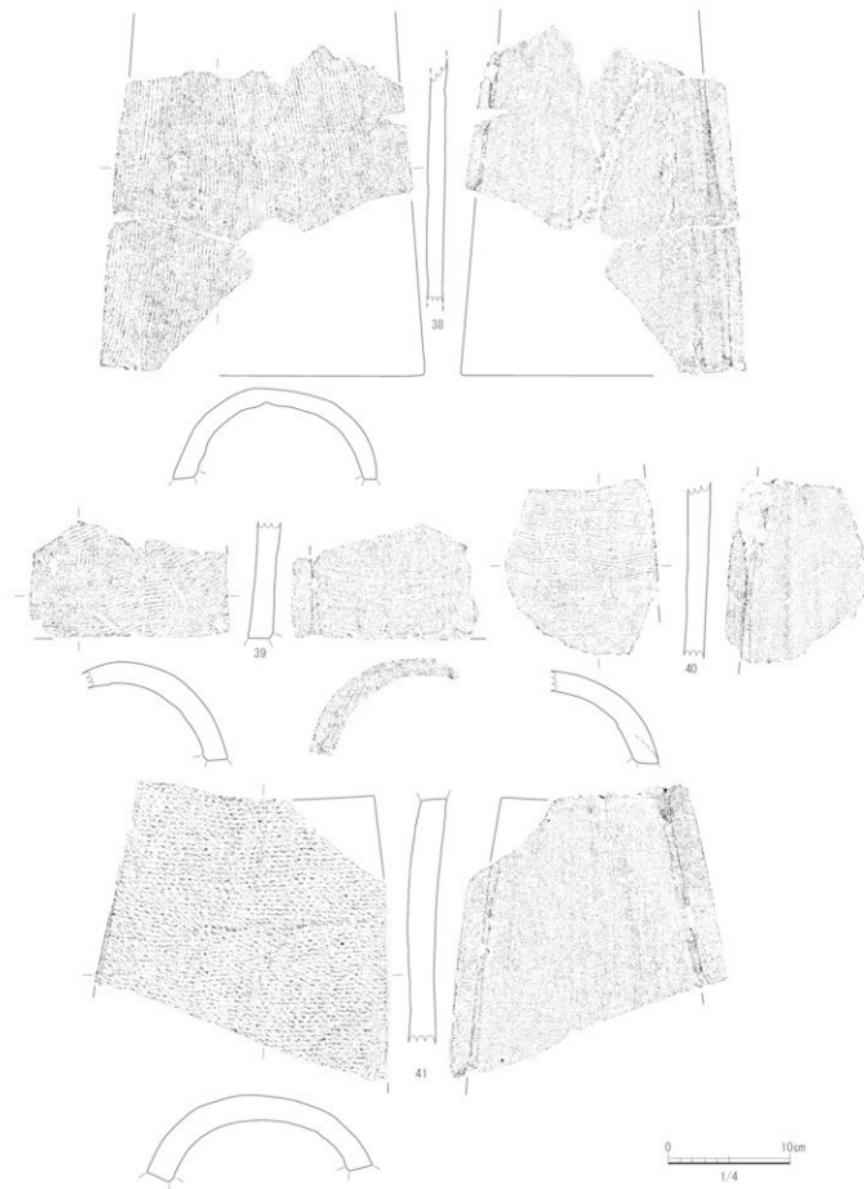
第23図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)3



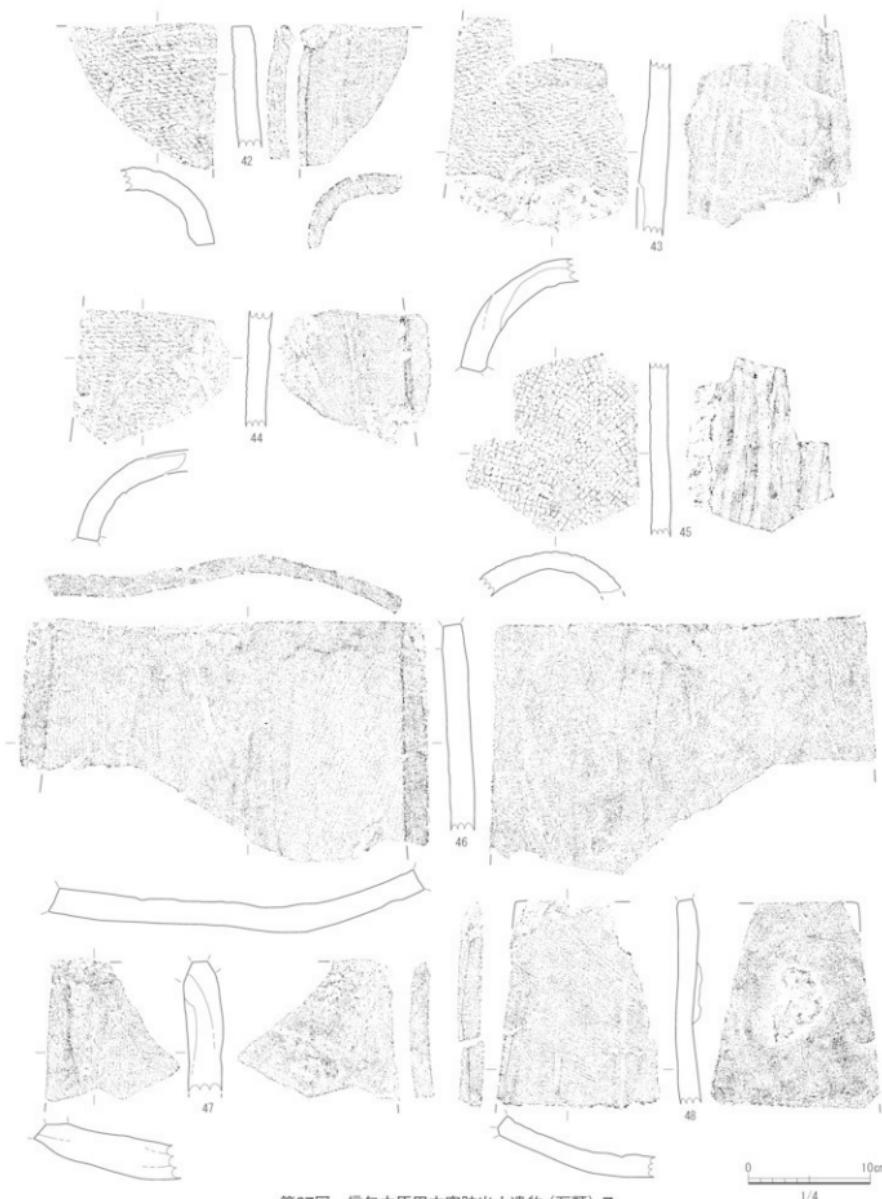
第24図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)4



第25図 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）5



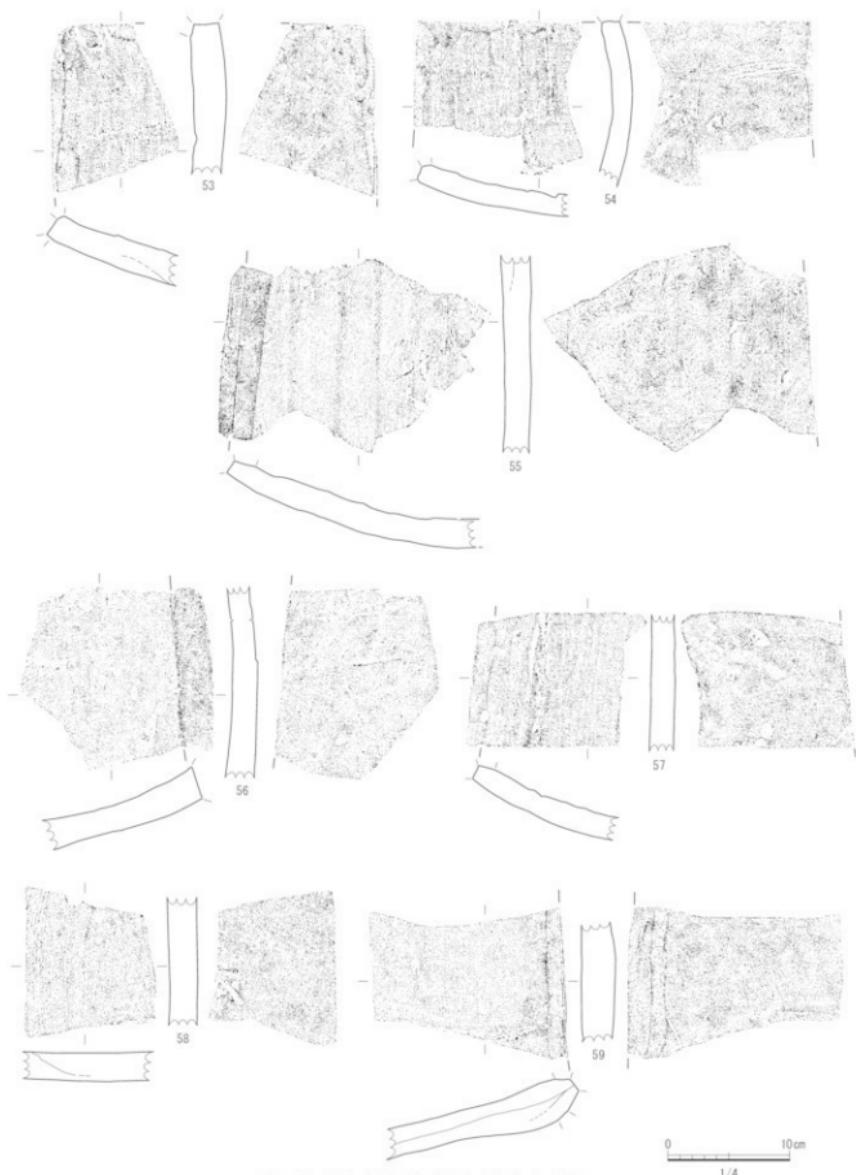
第26図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類) 6



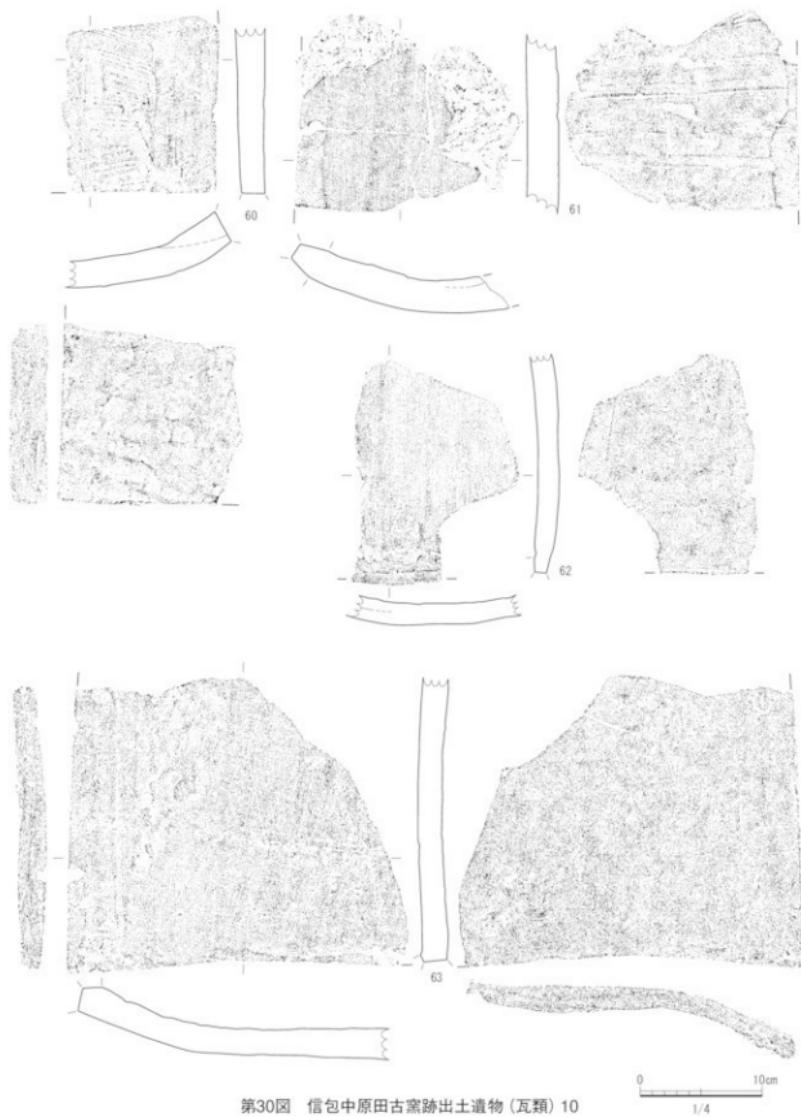
第27図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)7



第28図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)8



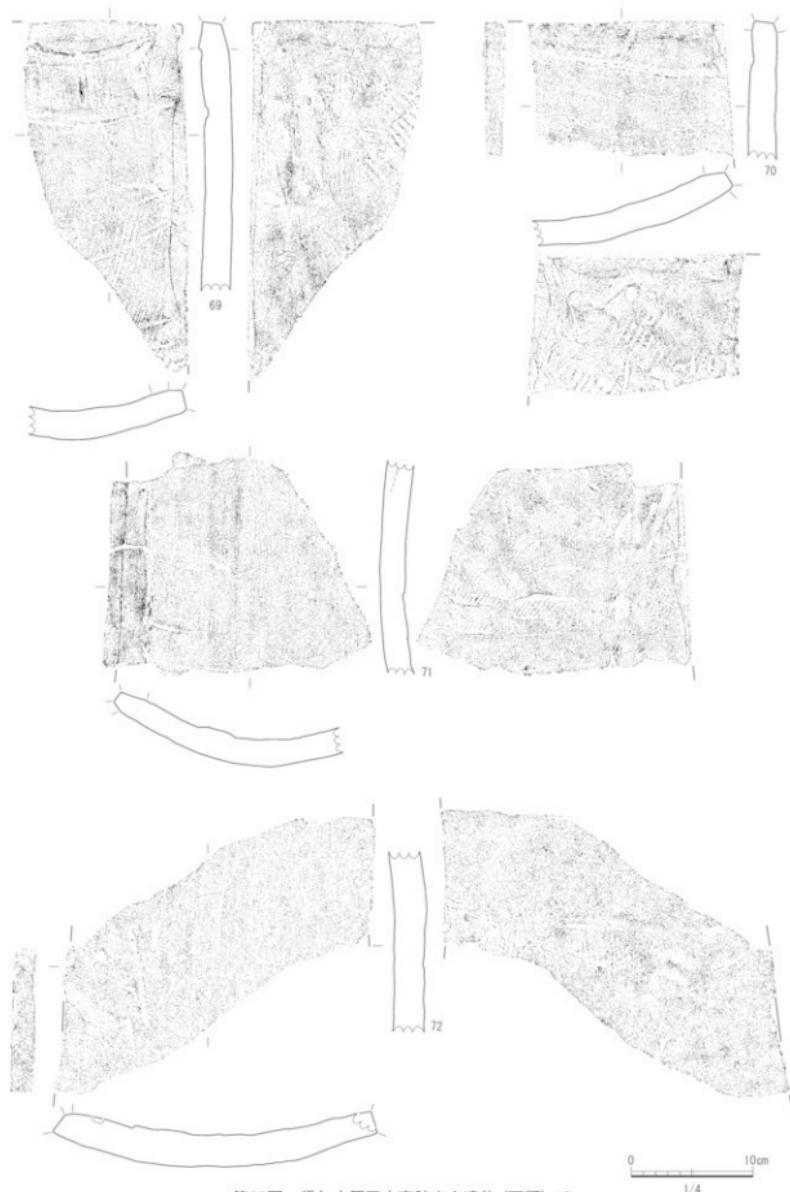
第29図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)9



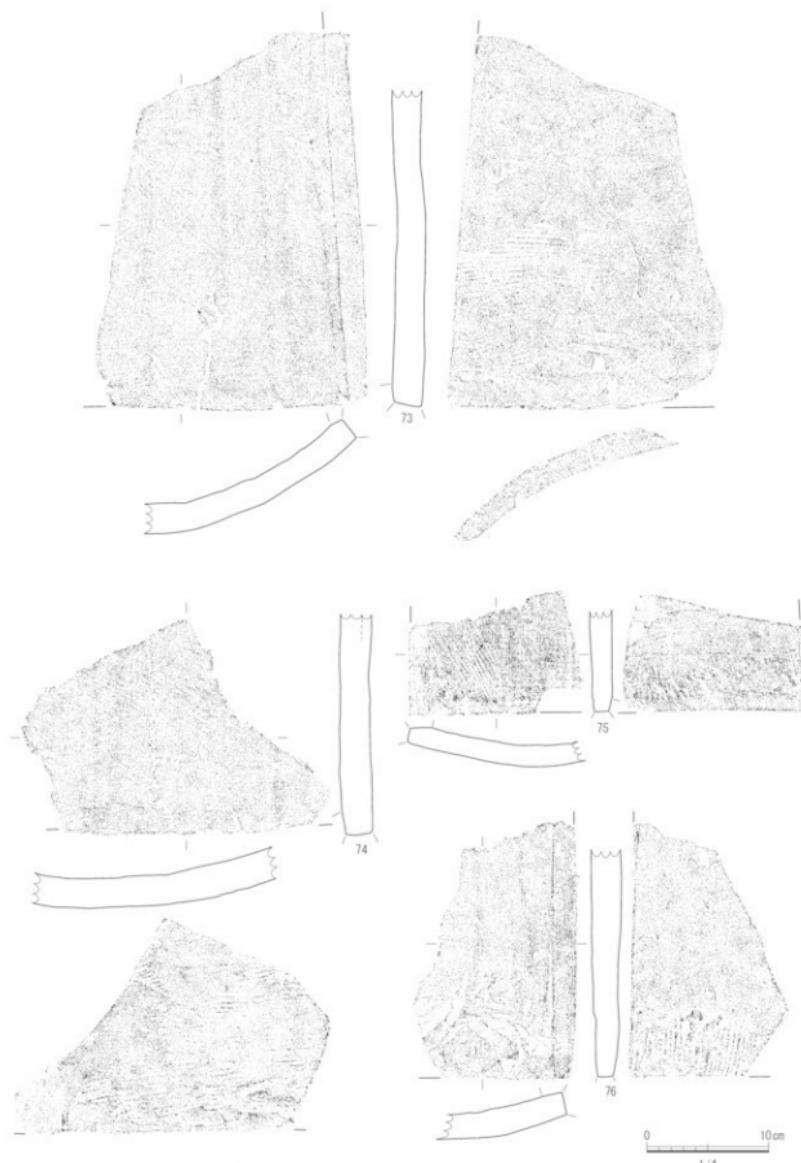
第30図 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）10



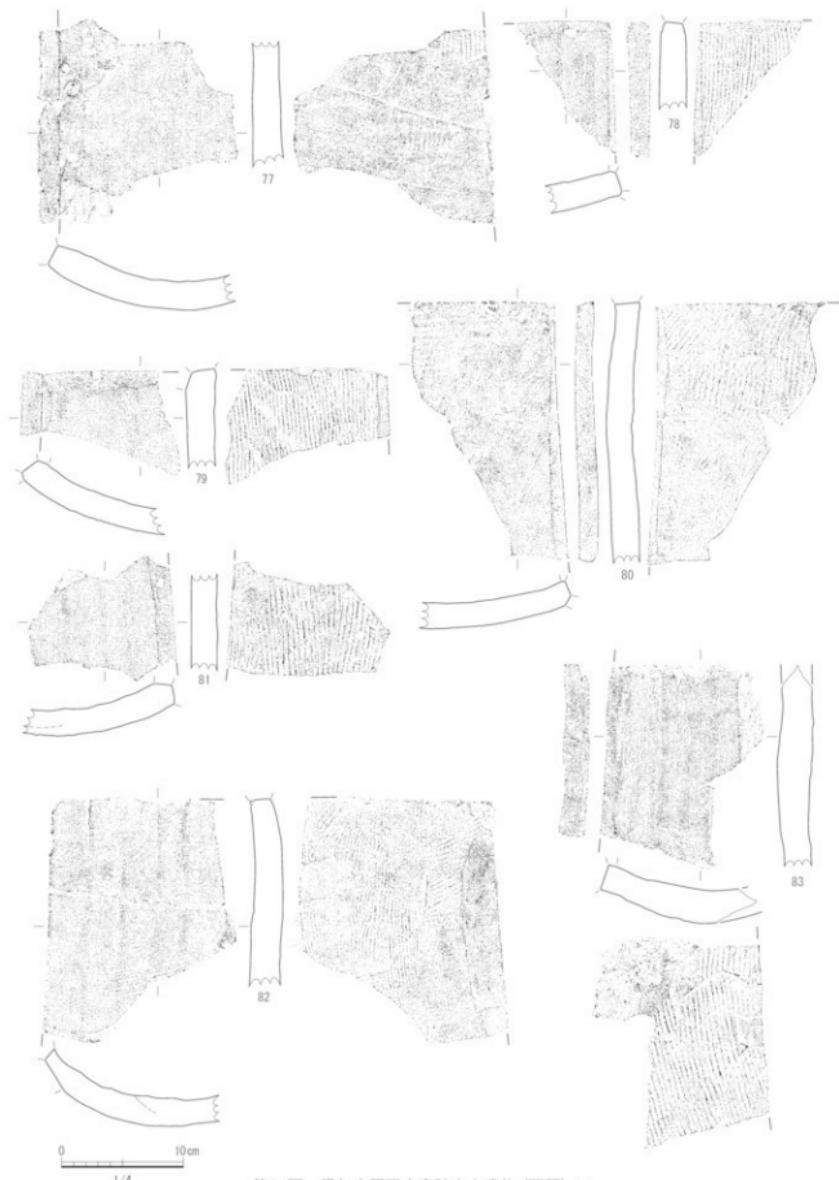
第31図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)11



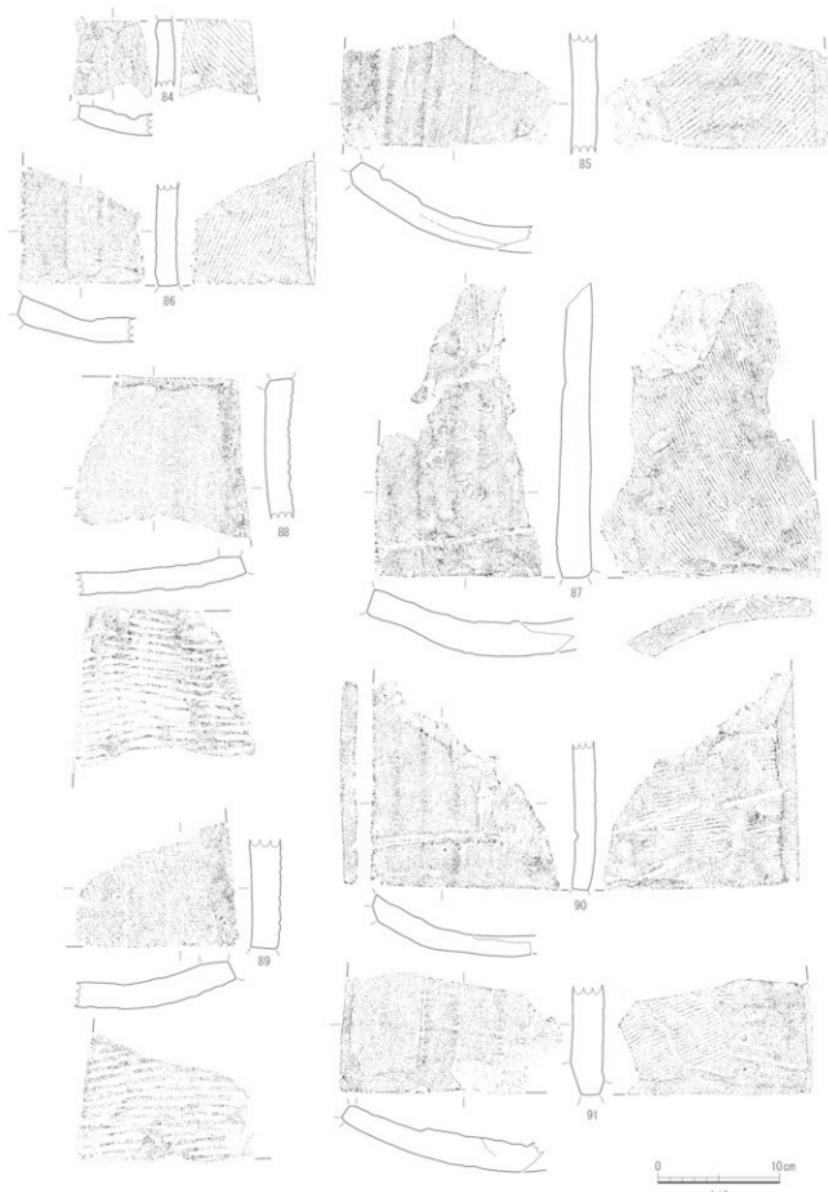
第32図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)12



第33図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)13



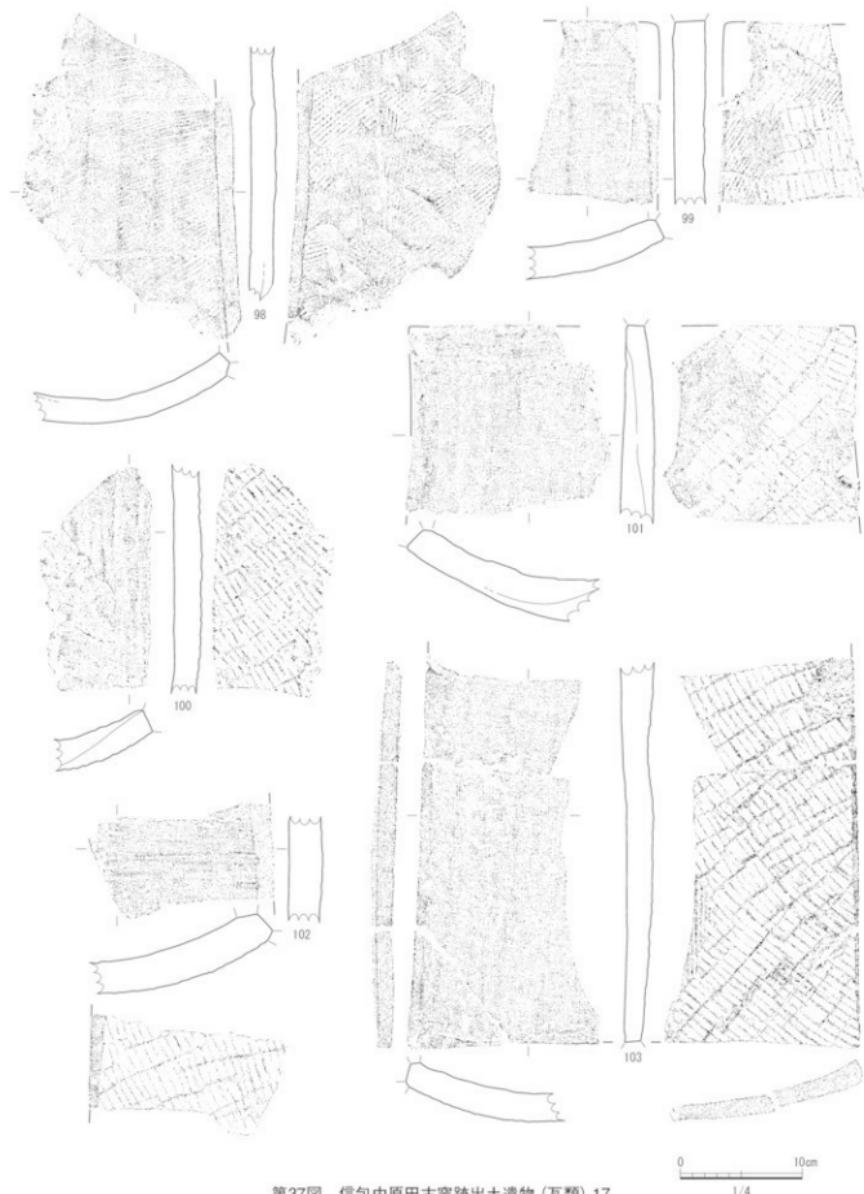
第34図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)14



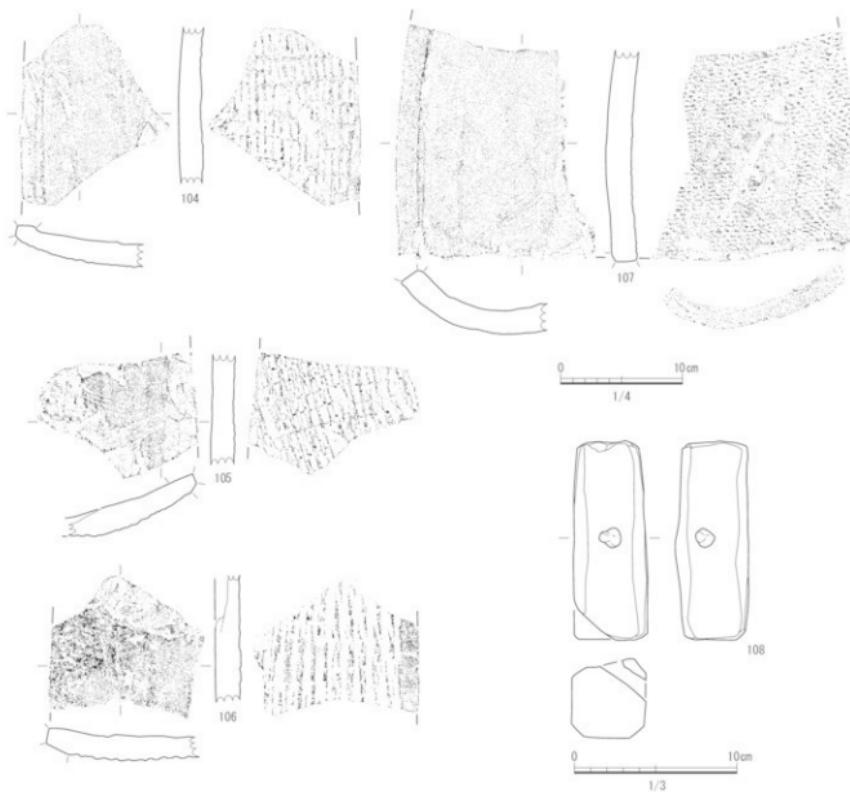
第35図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)15



第36図 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）16



第37図 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類) 17



第38図 信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類・陶製品）18

第2表 信包中原田古墳跡出土遺物（須恵器類）観察表

〔〕は現存値、（）は推定値

番号	出土 場所	層位	器種	法量 (cm)			現存 率	出土	焼成	色調		成形・調整等	備考	検出番号 出典番号			
				口径 底径		器高				外面							
				口徑	底径	器高				5Y6/1-3/1 灰	3Y6/1 灰						
1	E6	灰層	有蓋高環 盞	(120)	-	(40)	1-4	堅緻。白色小粒子含む。黒 色粒子含み、さらつこ。	良好	5Y6/1-3/1 灰 オリーブ灰	3Y6/1 灰	天井部1/2回転へラ削り。 底部1/2回転へラ削り。	抹み部欠損。 第8回 回7	第8回 回7			
2	C80・100	灰層	有蓋高環 盞	(124)	-	(45)	1-30	堅緻。白色小粒子含む。	良好	30Y3/3 灰	25Y3/1 灰	天井部1/2回転へラ削り。	抹み部ボタン孔。 第8回 回7	第8回 回7			
3	D124	灰層	环耳盞	(122)	-	(34)	1-8	堅緻。白色小粒子・少 量含む。	良好	5Y6/1 灰	7,3YRS1 灰	天井部1/2回転へラ削り。	第8回	第8回			
4	D55	灰層	环耳盞	(126)	-	(30)	1-60	堅緻。白色小粒子含む。	良好	30Y5/1 灰	10Y5/1 灰	天井部1/2回転へラ削り。	第8回	第8回			
5	D16	灰層	环耳身	(101)	-	(35)	1-6	堅緻。白色小粒子含む。	良好	5Y5/2 灰 オリーブ	3Y5/2 灰	天井部1/2回転へラ削り。	第8回	第8回			
6	D18	灰層	环耳身	(102)	-	(32)	1-8	堅緻。白色粒子・細 量含む。	良好	2,3Y6/2 灰 オリーブ	2,3Y6/2 灰	天井部1/2回転へラ削り。	第8回	第8回			
7	C32	灰層	环耳身	(102)	-	(24)	1-8	堅緻。白色小粒子含む。	良好	3Y7/1 灰	3Y7/1 灰	天井部に一端回転へラ削り。	前面に隣灰。	第8回			
8	C49・D15	灰層	环耳身	(110)	-	(28)	1-40	白色小粒子・細量 量含む。	良好	5Y5/2 灰 オリーブ	25Y4/2 灰	天井部1/2回転へラ削り。	第8回	第8回			
9	D17	灰層	环耳身	(126)	-	(32)	1-6	堅緻。白色微粒子・少 量多く含む。	良好	5Y5/3 灰 オリーブ	7,5Y7/3 灰	全面回転ナシ。	外面に隣灰。	第8回			
10	E142	-	HG盞	(124)	-	(22)	1-40	堅緻。白色・黒色粒子 含む。	良好	N5-(B) 灰	N5-(B) 灰	天井部3/2回転へラ削り。	高り蓋。 第8回 回7	第8回 回7			
11	灰層	-	HG盞	(126)	-	(17)	1-6	白色微粒子少 量含む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	天井部全面回転へラ削り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回			
12	A94	-	HG盞	(140)	-	(20)	1-7	堅緻。白色微粒子や や多く含む。	良好	30Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部には全面回転へラ削り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回			
13	箕1部左面部	木炭層	HG盞	(140)	-	(14)	1-40	堅緻。白色微粒子 やや多く含む。	良好	30Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部には全面回転へラ削り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回			
14	灰層	-	HG盞	(142)	-	(23)	1-5	白色小粒子含む。	良好	5Y6/1 灰	3Y6/1 灰	天井部へラ切り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回			
15	C46	-	HG盞	(154)	-	(11)	1-40	白色小粒子・灰色の複 合含む。	良好	30Y5/1 灰	10Y5/1 灰	天井部2/3回転へラ削り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回			
16	A1・8・9	-	HG盞	(170)	-	(20)	1-3	白色粒子・小粒子含む。	燒成後 燒成さみ	30Y6/1 灰	2,5Y7/2-6/2 灰	天井部2/3回転へラ削り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回 回7			
17	B5	-	HG盞	(170)	-	(21)	1-8	堅緻。白色・黒色粒子 含む。	良好	2,5Y5/3 灰	2,5Y5/1 灰	天井部2/3回転へラ削り。	高り蓋。抹み部 欠損。	第8回			
18	箕1部	木炭層	抹み盞	(120)	-	(13)	1-40	堅緻。白色微粒子 含む。	良好	10Y5/1-4/1 灰	10Y5/1-4/1 灰	天井部2/3回転へラ削り。	第8回	第8回			
19	E140	-	抹み盞	146	-	36	1-3	堅緻。白色微粒子・細 量含む。	良好	5Y6/1 灰	3Y6/1 灰	天井部1/3回転へラ削り。 内面重ね焼きに る変色。	抹み部13.5cm。 第8回 回7	第8回 回7			
20	B15・ 135・143	-	抹み盞	157	-	35	1-28	堅緻。白色微粒子・細 量含む。	良好	3Y84/3- 3Y5/2 灰 に付く赤褐色 オリーブ	3Y84/3-5Y5/2 灰 に付く赤褐色 オリーブ	天井部2/3回転へラ削り。	抹み部13.5cm。 第8回 回7	第8回 回7			
21	D149	-	抹み盞	(160)	-	(19)	1-8	堅緻。白色・黑色粒子 含む。	良好	30Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部回転ナシ。	11箇部が外反 する。	第8回			
22	A199	-	抹み盞	(161)	-	(29)	1-4	堅緻。白色微粒子含む。	良好	3Y5/1 灰	3Y5/1 灰	天井部1/2回転へラ削り。	第8回	第8回			
23	箕1部	木炭層	抹み盞	(162)	-	(28)	1-3	堅緻。白色微粒子や や多く含む。	良好	5G7/4-1 灰 帯Y4-2/2灰	3Y7/3 灰	天井部2/3回転へラ削り。	抹み部4.0cm。差 で扁平になる。	第8回 回7			
24	箕1部	木炭層	抹み盞	(164)	-	(32)	1-4	堅緻。白色微粒子1-3 mmの大粒子含む。	良好	30Y5/1- 5 灰	10Y5/1- 5 灰	天井部2/3回転へラ削り。	抹み部欠損。	第8回			
25	燒成部	-	抹み盞	168	-	42	2-30	堅緻。白色微粒子0-5 mmの大粒子含む。	良好	30Y4/1- 5 灰	10Y4/1- 5 灰	天井部1/2回転へラ削り。	抹み部4.0cm。差 で黒い斑点。	第8回			
26	箕1部左面部	木炭層	抹み盞	(169)	-	28	2-4	堅緻。白色微粒子1-1 mmの大粒子含む。	良好	5Y5/2-2-5 灰 燒成さみ	5Y5/2-2-5 灰 燒成さみ	天井部3/2回転へラ削り。	抹み部4.0cm。 第8回	第8回			
27	C85	-	抹み盞	(170)	-	(15)	1-40	堅緻。白色微粒子含み、黑色 頭部。	良好	3Y5/1 灰	3Y5/1 灰	前面自然斜付着、調整不明。	抹み部欠損。内 面に赤褐色着。	第8回 回7			
28	箕1部左面部	下層	抹み盞	(172)	-	42	1-5	堅緻。白色微粒子2-6 mmの大粒子含む。	良好	3Y4/1 灰	2,5Y6/1- 6 灰	天井部1/3回転へラ削り。	抹み部13.6cm。 第8回 回7	第8回 回7			
29	燃焼部	-	抹み盞	171	-	(24)	1-2	堅緻。白色粒子含む。	良好	2,5Y5/1 灰	2,5Y5/1 灰	天井部は全面回転へラ削り。	抹み部斜め。差 で黒い斑点。	第8回 回7			
30	燃焼部	-	抹み盞	(174)	-	(21)	1-40	白色微粒子含む。	燒成さみ 燒成さみ	30Y5/3- 3 灰 に付く黒い斑点	10Y5/3- 3 灰 に付く黒い斑点	天井部2/3回転へラ削り。	第8回	第8回			
31	燒成部	-	抹み盞	182	-	(32)	2-30	堅緻-1mmの大粒子 やや多く含む。	良好	3Y6/1-1-3 灰 に付く黒い斑点	10Y6/1-1-3 灰	天井部2/3回転へラ削り。	抹み部4.0cm。 内面斜付着。	第9回			
32	A118・ D108	-	抹み盞	(182)	-	(26)	2-30	白色微粒子・細量粒 子。	燒成後 燒成さみ	31Y7/1-6/1 灰 に付く黒い斑点	31Y7/1-6/1 灰	天井部1/2回転へラ削り。	抹み部欠損。	第9回 回7			
33	燃焼部	-	抹み盞	(186)	-	(27)	1-4	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y7/1 灰	2,5Y6/1- 1 灰	天井部3/4回転へラ削り。	内面に黒い斑点。	第9回 回7			
34	箕1部左面部	下層	抹み盞	(188)	-	(25)	1-5	堅緻。白色粒子小粒子 やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部3/4回転へラ削り。	抹み部欠損。	第9回			
35	燃焼部	-	抹み盞	-	-	(27)	2-30	白色粒子・小粒子含 む。	燒成後 燒成さみ	10Y8/4-4 浅黄色	2,5Y5/2 灰	天井部1/2回転へラ削り。	抹み部13.7cm。	第9回 回7			
36	E141	-	抹み盞	(220)	-	(30)	1-40	堅緻-1mmの大粒子 や含む。	良好	2,5Y5/1-3Y4/1 灰 に付く黒い斑点	3Y6/1 灰	天井部は全面回転へラ削り。	抹み部14.5cm。 第9回 回7	第9回 回7			
37	箕1部左面部	灰層	抹み盞	-	-	(26)	1-40	堅緻。白色微粒子多く 含む。	良好	30Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部1/3回転へラ削り。	抹み部14.0cm。 第9回 回7	第9回 回7			
38	箕1部左面部	木炭層	抹み盞	-	-	(15)	1-40	堅緻。白色微粒子多く 含む。	良好	2,5Y7/1 灰	3Y4/1 灰	天井部回転へラ削り。	焼成物生存。	第9回			
39	燃焼部	-	抹み盞	-	-	(23)	2-30	白色微粒子・黒色 粒子。	良好	10Y3/1- 1 灰 オリーブ	10Y3/1- 1 灰 オリーブ	天井部回転へラ削り。	抹み部14.0cm。 第9回	第9回			
40	燃焼部	-	抹み盞	-	-	(18)	2-30	白色微粒子・小 粒子。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	天井部回転へラ削り。	抹み部14.2cm。 第9回 回7	第9回 回7			
41	箕1部左面部	木炭層	抹み盞	-	-	(17)	1-20	堅緻。白色微粒子・小 粒子。	良好	7,5Y6/1-5/1 灰	7,5Y6/1-5/1 灰	天井部1/3回転へラ削り。	抹み部13.8cm。 第9回 回7	第9回 回7			
42	灰層	-	抹み盞	-	-	(23)	1-5	白色粒子含む。	良好	7,5Y4/1 灰	N-3/0 灰	天井部隣灰により調整不明。	抹み部13.8cm。 第9回	第9回			

番号	出土位置	層位	器種	法量(cm)			縦 厚	横 幅	地土	焼成	色調		形態等	備考	標図番号 図版番号							
											外面											
				口径	底径	高さ																
43	城郭部	-	楕円盃	-	-	(27)	7.4×6.1 1.28cm	直径合掌	堅致、微細白色粒子。 1.3cm	良好	N6e (B) N6d (B) N6c (B)		天井部回転ヘラ削り。	楕み部E3.6cm。 外見E.4.	第9回 図版E.4.							
44	A32	本坂下層	楕円盃	-	-	(21)	天井部 1.28cm	直径合掌	堅致、白色粒子。細緻含む。 1.3cm	焼成度良 好	N6a (B) N6b (B) N6c (B)		天井部回転ヘラ削り。	楕み部E3.5cm。 外見E.8.	第9回 図版E.8.							
45	南窓部中央	上層	楕円盃	-	-	(28)	天井部 1.28cm	直径合掌	堅致、白色粒子。細緻 含む。	焼成度良 好	7.57×4.1 1.6cm	2.57×1.6×1 1.6cm	天井部一端削輪ヘラ削り。	楕み部E3.5cm。 外見E.8.	第9回 図版E.8.							
46	南窓部	下層	楕円盃	-	-	(31)	天井部 1.28cm	直径合掌	堅致、白色粒子。細緻 含む。	良好	2.57×1.6×1 1.6cm	2.57×1.6×1 1.6cm	天井部1周削輪ヘラ削り。	楕み部E3.4cm。 外見E.8.	第9回 図版E.8.							
47	城郭部	-	楕円盃	-	-	(23)	楕み部	直径合掌	堅致、白色微粒子含む。 1.3cm	良好	5.75×5.3 1.6cm	2.75×5.1 1.6cm	天井部回転ヘラ削り。	楕み部E3.4cm。 内面E.8.	第9回 図版E.8.							
48	C40	-	楕円盃	-	-	(30)	天井部 1.28cm	直径合掌	堅致、白色小粒子含む。 1.3cm	良好	5.75×5.1 1.6cm	5.75×5.1 1.6cm	天井部回転ヘラ削り。	内面E.8.	第9回 図版E.8.							
49	D140	-	楕円盃	-	-	(25)	1.30cm	直径合掌	堅致、白色小粒子含む。	良好	7.35×6.1 1.6cm	2.75×6.1 1.6cm	天井部回転ヘラ削り。	楕み部E1.2cm。 楕み部E1.8cm.	第9回 図版E.8.							
50	E6	-	盃	(8.0)	-	5.3	1.25cm	直径合掌	堅致、白色微粒子含む。	良好	10YR4/2 10YR6/2	10YR4/2 10YR6/2	天井部全面回転ヘラ削り。	外見E.8.	第9回 図版E.8.							
51	東口部 B2	-	HG身	9.0	5.5	3.1	1.28cm	直径合掌	堅致、白色粒子。細緻 含む。	良好	7.57×4.1 1.6cm	2.57×4.1 1.6cm	底部ヘラ切り→開縫回転ヘラ削 り。底部外側に焼成 後の沈殿あり。	底部E.74. 洋高部数段。	第9回 図版E.8.							
52	C54・93	-	HG身	9.2	6.8	3.5	1.2	直径合掌	堅致、白色小粒子。細緻 含む。	良好	7.57×5.3 1.6cm	2.75×5.1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	洋高部数段。	第9回 図版E.8.							
53	9.0型T. E13H	-	HG身	(9.4)	6.8	3.3	1.40cm	直径合掌	堅致、白色微粒子。堅 致粒子含む。	良好	7.57×5.1 1.6cm	2.75×5.1 1.6cm	底部ヘラ切り。		第9回							
54	E106	-	HG身	(9.2)	6.0	4.0	1.40cm	直径合掌	堅致、白色小粒子含む。	良好	10YR5/2 10YR5/2	2.57×5.1 1.6cm	底部ヘラ切り。	法量E.65. 洋高部数段13.	第9回							
55	東口部付 近、A75	-	HG身	(10.0)	6.1	(35)	1.40cm	直径合掌	堅致、白色微粒子含む。	良好	10YR5/1 10YR5/1	2.57×5.2 1.6cm	底部ヘラ切り。	法量E.61. 洋高部数段25.	第9回							
56	C30・104	-	HG身	(10.4)	5.4	3.6	1.4	直径合掌	堅致、白色粒子。細緻 含む。	良好	5.75×2.4×2 1.6cm	5.75×2.4×2 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	法量E.52. 洋高部数段35.	第9回							
57	底部	-	HG身	(10.4)	5.0	4.0	2.3	直径合掌	堅致、白色小形粒子や 多く含む。	良好	10YR5/1 10YR5/1	10YR5/1 1.6cm	底部ヘラ切り。	法量E.48. 洋高部数段38.	第9回							
58	B30	-	HG身	(10.4)	7.1	3.1	1.30cm	白色小粒子含む。	燒成化 成度良	10YR5/2 10YR5/2	10YR5/2 10YR5/2	底部ヘラ切り→ナ.	法量E.68. 洋高部数段12.	第10回								
59	C35	-	HG身	(10.8)	6.8	4.1	1.5cm	直径合掌	堅致、白色小粒子や 多く含む。	良好	10YR4/1 10YR4/1	10YR4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	法量E.62. 洋高部数段36.	第10回							
60	E105	-	HG身	(11.4)	7.0	3.9	1.4	白色粒子含む。	良好	2.57×7.1~5.1 1.6cm	2.57×7.1~5.1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナナナ.	法量E.61. 洋高部数段34.	第10回								
61	A89	-	HG身	(11.4)	6.1	4.0	1.3	直径合掌	堅致、白色小粒子や 多く含む。	良好	9.67×4/1 1.6cm	9.67×4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	法量E.55. 洋高部数段35.	第10回							
62	底部右側 T. 木原、 E13H	-	HG身	(11.4)	6.0	4.0	1.3	直径合掌	堅致、白色小粒子や 多く含む。	良好	7.57×5.1 1.6cm	2.75×5.1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	11.0底部E.54. 法量E.54. 洋高部数段33.	第10回							
63	C61	-	HG身	-	6.2	(27)	直径合掌	堅致、白色粒子含む。 底部有	堅致、白色粒子含む。 底部有	良好	7.57×6.3 1.6cm	2.75×6.1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.		第10回							
64	底部左側 T. 木原 E13H	-	HG身	(11.8)	6.4	3.9	2.3	直径合掌	堅致、白色微粒子含む。	良好	7.57×4/1 1.6cm	2.75×4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	11.0底部E.54. 法量E.54. 洋高部数段33.	第10回							
65	C45	-	HG身	(12.0)	6.0	3.3	1.3	直径合掌	堅致、白色微粒子。細 緻含む。黑色調調子。	良好	10YR4/1 10YR4/1	10YR4/1 10YR4/1	底部ヘラ切り。	内面に割裂E.9G 底部E.9. 蓋基法量E.50. 洋高部数段28.	第10回							
66	燃焼部、 A46、底部 下層	-	HG身	(13.2)	7.8	3.2	3.40cm	細砂粒含む。	燒成化 成度良	2.57X/16/1 1.6cm	2.57X/16/1 1.6cm	底部ヘラ切り→回転ヘラ削り。	法量E.60. 洋高部数段24.	第10回								
67	A19、 木原、?	-	HG身	-	6.9	(24)	底部 進行	白色粒子。細砂粒含 む。ややちぎれく。	燒成化 成度良	7.57×1.4~4/1 1.6cm	2.57×1.4~4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→外周回転ナ.	法量E.60. 洋高部数段24.	第10回 図版E.8.								
68	柴11号、 A19	-	HG身	-	8.6	(14)	底部 進行	白色粒子。小粒含む。 底部有	燒成化 成度良	2.57×2.6~2/2 1.6cm	2.57×2.6~2/2 1.6cm	底部ヘラ切り→外周回転ナ.	法量E.60. 洋高部数段24.	第10回 図版E.8.								
69	柴12号、 A124	-	HG身	-	10.0	(26)	底部 進行	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。	良好	7.57×6.1/5 1.6cm	7.57×6.1/5 1.6cm	底部ヘラ切り→外周回転ナ.	法量E.60. 洋高部数段24.	第10回 図版E.8.								
70	城郭部	-	HG身	-	11.4	(1.5)	底部 進行	堅致、白色、白色粒子 2.3mm	良好	7.57×5.1/5 1.6cm	7.57×5.1/5 1.6cm	底部ヘラ切り→外周回転ナ.	法量E.60. 洋高部数段24.	第10回 図版E.8.								
71	城郭部、 底部左側	-	HG身	-	8.6	(1.6)	底部 進行	白色粒子。細砂粒含 む。	燒成化 成度良	10YR4/1~4/1 1.6cm	10YR4/1~4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→外周回転ナ.	法量E.60. 洋高部数段24.	第10回 図版E.9.								
72	底口部、 底部A19	-	HG身	(13.1)	9.6	3.3	1.30cm	堅致、白色粒子。黑色 調子。	良好	10YR5~1~4/1 1.6cm	10YR5~1~4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→全面ナ.	法量E.64. 洋高部数段22.	第11回								
73	A62、木 原下層	-	HG身	(15.2)	9.0	3.3	2.3	堅致、白色、褐色粒子 含む。	良好	5.63/1 1.6cm	10YR5~1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	洋高部数段22. 洋高部数段23.	第11回 図版E.9.								
74	柴11号左側 木原下層	-	HG身	(15.1)	11.0	(35)	1.4	堅致、白色粒子含む。	良好	10YR5~1 1.6cm	10YR5~1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	洋高部数段22. 洋高部数段24.	第11回								
75	A117	-	HG身	(16.2)	10.0	2.6	1.40cm	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。	良好	2.57×3/1 1.6cm	2.57×3/1~4/1 1.6cm	底部ヘラ切り→ナ.	洋高部数段17. 洋高部数段40.	第11回								
76	A73・101	-	HG身	(10.1)	7.0	4.0	1.3	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。さらづく。	良好	5.75~1~4/1 1.6cm	5.75~1~4/1 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	洋高部数段40. 洋高部数段40.	第11回 図版E.9.								
77	南窓丸、 最下層、C92、 木原	-	HG身	(14.4)	7.0	3.3	2.3	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。さらづく。	良好	10YR5~1 1.6cm	10YR5~1 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	洋高部数段40. 洋高部数段40.	第11回 図版E.9.								
78	C51	-	HG身	(14.0)	10.4	3.1	2.3	堅致、白色、黑色調子。 細砂粒、細砂含む。	良好	10YR4/1 1.6cm	10YR4/1 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	杉谷令樹E.まむ. 法量E.62. 洋高部数段22.	第11回 図版E.9.								
79	C72	-	HG身	(15.9)	10.4	4.0	2.3	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。	良好	10YR4/1 1.6cm	10YR4/1 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	法量E.62. 洋高部数段22.	第11回 図版E.9.								
80	柴11号、 木原下層	-	HG身	-	(102)	(1.5)	底部 進行	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。	良好	5Y6/1 1.6cm	5Y6/1 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	法量E.62. 洋高部数段25.	第11回								
81	南窓丸、 最下層	-	HG身	-	(105)	(2.3)	底部 進行	堅致、白色粒子。細砂 粒含む。	良好	5Y7~1~6~1 1.6cm	5Y7~1~6~1 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	法量E.65. 洋高部数段25.	第11回								
82	底口部	-	HG身	-	(105)	(1.7)	底部 進行	堅致、白色粒子含む。	燒成化 成度良	10YR6/2 10YR6/2	10YR6/2 10YR6/2	底部全面回転ヘラ削り。	法量E.66. 洋高部数段25.	第11回								
83	底口部	-	HG身	(18.0)	(32)	4.2	1/40	堅致、白色、白色粒子含む。	良好	2.57×5/2 1.6cm	2.57×5/2 1.6cm	底部全面回転ヘラ削り。	法量E.69. 洋高部数段25.	第11回 図版E.9.								

番号	出土位置	層位	器種	法量(cm)			埋存率	地土	焼成	色調		或形・調整等	備考	標図番号 図版番号	
				口径	底径	高さ				外面	内面				
				(mm)	(mm)	(mm)									
84	灰窓	-	H込身	-	(14.0)	(3.1)	1-60	白色粒子含む。	焼成後 未成り、黄褐色	10YR6-3 に5Y1-黄褐色	10YR6-3 に5Y1-黄褐色	底部全面回転ヘラ削り。		第11回	
85	灰窓	-	盤	-	-	(2.2)	小破片	堅織。白色粒子・繩様含む。	良好	7.5Y5-3	7.5Y5-1	底部ヘラ切り→外周回転ヘラ削り。	外周崩壊、 内面に付着物。	第11回	
86	A82	-	H込身	-	(6.0)	(2.4)	1-4	堅織。白色粒子少量含む。	良好	10Y4-1 に5Y1-黄褐色	10Y4-1 に5Y1-黄褐色	底部回転ヘラ削り→高台貼付→ 回縫ナフ。		第12回	
87	第11部 A90	-	H込身	-	-	(3.8)	小破片	堅織。白色微粒含む。	良好	5V5-1 に5Y1-黄褐色	5V5-1 に5Y1-黄褐色	高台貼付→回縫ナフ。		第12回	
88	A35・40	-	H込身	(16.2)	(12.0)	5.2	1-3	堅織。黑色颗粒含む。	良好	10Y5-1 に5Y1-黄褐色	10Y5-2 に5Y1-黄褐色	高台貼付→回縫ナフ。 口縫部むし、 内壁に気泡割れ。	口縫部むし、 内壁に気泡割れ。	第12回	
89	第11部、 木炭窯 A22・(3-50) 灰窓下部	H込身	(17.0)	11.5	4.2	3-4	堅織。白色粒子・繩様含む。	良好	10Y4-1-3-1 に5Y1-黄褐色	10Y4-1-3-1 に5Y1-黄褐色	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→ 回縫ナフ。	器形全体がむし、 内周崩壊。	第12回 第10回		
90	灰窓、 燒成窯	-	H込身	-	(12.0)	(1.0)	底部	堅織。白色粒子含む。	良好	10Y6-1-5-1 に5Y1-黄褐色	10Y6-1-5-1 に5Y1-黄褐色	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→ 回縫ナフ。		第12回	
91	A109・110・ 115	木炭下部	H込身	16.8- 18.7	13.8- 14.0	4.0- 4.8	堅焼成	堅織。白色粒子・繩様含み、さらつく。	良好	7.5Y6-1 に5Y1-黄褐色	7.5Y6-1 に5Y1-黄褐色	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→ 回縫ナフ。	器形全体にむし、 内周崩壊。	第12回 第10回	
92	第11部	-	H込身	-	(15.2)	(1.5)	底部	堅織。黑色・黒褐色色調含む。	良好	10Y4-1 に5Y1-黄褐色	10Y4-1 に5Y1-黄褐色	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→ 回縫ナフ。		第12回	
93	D60	-	H込身	-	(16.1)	(1.6)	底部	堅織。白色微粒子やや多く含む。	良好	10Y5-1-4-1 に5Y1-黄褐色	10Y5-1-4-1 に5Y1-黄褐色	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→ 回縫ナフ。		第12回	
94	E126	-	高环	(12.4)	-	(3.5)	坪環	堅織粒多く含む。	焼成後 未成り	2.5Y6-1 黄褐色	2.5Y6-1 黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
95	E126	-	高环	(12.6)	-	(2.8)	坪環	堅織。堅織粒少量含む。	良好	5V5-1 に5Y1-黄褐色	5V5-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
96	第11部、 A87	-	高环	(13.4)	-	(3.4)	坪環	堅織。堅織粒微含む。	良好	5V6-1 に5Y1-黄褐色	5V6-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
97	C88	-	高环	(13.8)	-	(3.8)	坪環	堅織粒少量含む。	焼成後 未成り	7.5Y5-6 明褐色	7.5Y5-6 明褐色			第12回	
98	C42-53	-	高环	(14.6)	-	(5.5)	坪環	堅織粒少量含む。	良好	2.5Y5-1 黄褐色	2.5Y5-1 黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
99	E149	-	高环	-	-	(6.7)	坪環	堅織。堅織粒微含む。	良好	7.5Y5-1 に5Y1-黄褐色	7.5Y5-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	輪郭に透かし意、 上半に2つの浅溝、 長脚両端。	第12回 第10回	
100	E116	-	高环	-	(9.8)	6.0	坪環	堅織。堅織粒少量含む。	良好	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	輪郭中央に1条の浅溝。	第12回	
101	E118	-	高环	-	(9.6)	(5.9)	坪環	堅織。堅織粒・繩様少含む。	良好	5V7-1 に5Y1-黄褐色	5V7-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	輪郭上半に1条の浅溝。	第12回	
102	E60	-	高环	-	(7.2)	(4.5)	坪環	堅織。堅織粒・繩様少含む。	良好	3V6-1 に5Y1-黄褐色	3V6-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
103	II-17、96原	-	高环	-	(7.2)	(5.2)	坪環	堅織。堅織粒少量含む。	良好	3V6-2 に5Y2-黄褐色	3V6-2 に5Y2-黄褐色	坪環回板ナフ。	輪郭上半溝がれ。	第12回 第10回	
104	I91	-	高环	-	(10.4)	(6.4)	坪環	堅織粒少量含む。	焼成後 未成り	2.5Y8-2 に5Y2-黄褐色	2.5Y8-2 に5Y2-黄褐色	坪環回板ナフ。	輪郭上半溝がれ。	第12回 第10回	
105	E53、 H底右T	-	高环	-	(11.8)	(3.3)	坪環	堅織粒微含む。	良好	7.5Y4-3 に5Y1-黄褐色	7.5Y4-3 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
106	H原	-	高环	-	8.4	(4.3)	坪環	堅織。堅織粒少量含む。	良好	3V6-2 に5Y2-黄褐色	3V6-2 に5Y2-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
107	E102	-	高环	-	(10.2)	(3.5)	坪環	堅織。堅織粒微含む。	良好	10Y4-1 に5Y1-黄褐色	10Y4-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	外間に隕戻。	第12回 第10回	
108	C39	-	高环	-	(12.8)	(5.1)	坪環	堅織。堅織粒少量含む。	良好	7.5Y6-1 に5Y1-黄褐色	7.5Y6-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	内外間に隕戻。	第12回 第10回	
109	B51	-	高环	-	(13.4)	(5.7)	坪環	堅織。堅織粒少量含む。	良好	7.5Y5-1 に5Y1-黄褐色	7.5Y5-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	外間に自然軸付着。	第12回 第10回	
110	E50	-	高环	(14.6)	(5.3)	小破片	堅織	堅織粒微量含む。	良好	3V6-1 に5Y1-黄褐色	3V6-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回 第10回	
111	C2	-	H-AarB	-	-	(8.2)	小破片	堅織。堅織粒微含む。	良好	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	外面上・中・下 手に浅溝。	第12回	
112	16原	-	蹄	(8.8)	-	(3.0)	1-6	堅織。白色・黑色・白色粒子含む。	良好	7.5Y6-1 に5Y1-黄褐色	7.5Y6-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。		第12回	
113	B7	-	蹄	(8.8)	-	(5.0)	1/4蹄	堅織。堅織粒微含む。	良好	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	坪環回板ナフ。	輪郭上半に1条の浅溝。	第12回 第10回	
114	灰窓左T	-	蹄	(17.0)	(12.6)	7.4	1/2蹄	堅織粒多く含む。	良好	5V5-1 に5Y1-黄褐色	5V5-1 に5Y1-黄褐色	1/2蹄・体側回板ナフ、下手のみ 持ちむへラ削り。底部ヘラ切り。	この機種は1個のみ。	第12回 第10回	
115	第11部、 木炭窯	瓦底盤	(11.6)	-	(4.7)	1/3圓盤	堅織。堅織粒微量含む。	良好	2.5Y3-1 に5Y1-黄褐色	2.5Y3-1 に5Y1-黄褐色	外周回板ナフ。	外周に隕戻。	第12回 第10回		
116	C38	-	瓦底盤	10.8	-	(9.4)	1/3圓盤	堅織。堅織粒微含む。	良好	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	2.5Y7-1 に5Y1-黄褐色	外周回板ナフ。	輪郭の下・中・上 手に1条の浅溝あり。	第12回 第10回	
117	A11	-	瓦底盤	(12.8)	-	(10.0)	1/3圓盤	堅織。堅織粒微含む。	良好	3V6-1 に5Y1-黄褐色	3V6-1 に5Y1-黄褐色	外周回板ナフ。	内面に1条の自然軸付着。	第12回 第10回	
118	E134	-	瓦底盤	(8.8)	-	(3.5)	1/3圓盤	堅織。堅織粒微含む。	良好	3V7-1 に5Y1-黄褐色	3V7-1 に5Y1-黄褐色	外周回板ナフ。		第12回 第10回	
119	16原	-	瓦底盤	-	-	(6.0)	1/3圓盤	堅織。堅織粒微含む。	良好	3V6-1 に5Y1-黄褐色	3V6-1 に5Y1-黄褐色	外周回板ナフ。	輪郭上半に1条の浅溝。	第12回	
120	C98	-	瓦底盤	-	-	(8.5)	側部	堅織。堅織粒微含む。	良好	3V6-1 に5Y1-黄褐色	3V6-1 に5Y1-黄褐色	外周回板ナフ。	対部に1条の浅溝。	第12回	
121	16原	-	瓦底盤	-	8.6	(2.4)	高台盤	堅織。堅織粒・繩様含む。	良好	2.5Y5-2 に5Y2-黄褐色	2.5Y5-2 に5Y2-黄褐色	高台貼付→回縫ナフ。	一部に粘土付着。	第12回	
122	BB底点	-	瓦底盤	10.5	9.8	22.5	堅焼成	堅織。白色粒子・繩様含む。	良好	5V6-2-3-2 に5Y1-2-3-2 オリーブグリーン	5V6-2-3-2 に5Y1-2-3-2 オリーブグリーン	1/2蹄・側面・回縫ナフ・側面ナフ・ 内面に凸凹凹凸部。	内面に凸凹凹凸部に 輪郭で留まる。	第12回 第10回	
123	C78	-	瓦底盤	(10.2)	-	(3.0)	1/3圓盤	堅織。堅織粒少量含む。	良好	5V5-2 に5Y2-黄褐色	5V5-2 に5Y2-黄褐色	外周回板ナフ。	内面に異色色付着。	第12回 第10回	
124	E17	-	木箱と淨瓶	-	-	8.8	(2.0)	高台盤	堅織。堅織粒微量含む。	良好	2.5Y7-2 に5Y1-黄褐色	2.5Y7-2 に5Y1-黄褐色	高台貼付→回縫ナフ。	内面に粘土付着。	第12回 第10回

番号	出土位置	層位	器種	法量(cm)			埋存状況	地土	焼成	色調		形・調整等	備考	標図番号						
										外面										
				口径	底径	高さ				内面										
125	灰窓	-	木輪車掌	-	9.2	[16]	高台型 1.3	堅織、網織・微含む。	良好	5Y7/1 白	5Y7/1 白	高台貼付・周囲ナメ。	一部に粘土付着。	第130						
126	窓跡付近	表探	灰窓	-	5.5	[40]	高台型 1.3	堅織、白色微板子・黒 色微含む。	良好	30Y5/4 白	10Y5/3 白	表面削除・切り。	内面同一器種。	第130 第2011						
127	窓跡付近	表探	木輪車掌	-	7.80	[24]	高台型 2.3	堅織、白色粒子含む。	良好	25Y6/2 白	25Y6/2 白	底部全面削除・削り→高台貼 付・周囲ナメ。	内面全面削除。 X-00号骨丸差打。	第130 第2011						
128	灰窓	-	内面鏡	灰窓伴(135)	-	[17]	高台型 1.4	堅織、網織・粒含む。	良好	3V5/2 白	5V5/2 白	内面削除ナメ。	脚部内面削除。	第130 第2011						
129	灰窓右T, B4	-	内面鏡	外周部片	-	[14]	高台型 1.8	堅織、白色粒子・網織 粒含む。	良好	25Y5/3 白	25Y5/3 白	内面削除ナメ・脚接合部削除。	脚部内面削除。	第130 第2011						
130	灰窓左下部	下層	内面鏡	-	-	[69]	舞踏型 1.4	堅織、網織・粒含む。	良好	10Y6/1 白	10Y6/1 白	脚部に長方形通孔。	脚部内面削除。	第130 第2011						
131	B101	-	舞踏型	[9.8]	-	[64]	舞踏型 1.4	堅織、網織・粒含む。	良好	3Y7/1 白	3Y7/1 白	外周削除ナメ。	内面に隕灰。	第140 第2012						
132	A28	-	舞踏型	[120]	-	[25]	舞踏型 1.4	堅織、網織・粒含む。	良好	7.5M6/3 白	7.5M6/3 白	外周削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
133	灰窓	-	舞踏型	[118]	-	[42]	舞踏型 1.8	堅織、網織・粒含む。	良好	2.5Y6/3 白	2.5Y6/3 白	内面削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
134	E106	-	舞踏型	[124]	-	[49]	舞踏型 1.4	堅織、網織・粒含む。	良好	10YR5/2 白	10YR5/2 白	外周削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
135	A121-125	-	舞踏型	[128]	-	[151]	舞踏型 1.3	堅織・粒多く含む。	焼成化 成	2.5M6/2 白	2.5M6/2 白	内面削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
136	A126	-	舞踏型	[164]	-	[67]	舞踏型 1.4	堅織、網織・粒含む。	良好	2.5Y6/3 白	2.5Y6/3 白	内面削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
137	E130	-	広J7型	[208]	-	[4]	広J7型 1.8	堅織、網織・粒含む。	良好	10YR5/3 白	10YR5/3 白	内面削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
138	A56	-	鏡	[110]	[80]	[6]	鏡 1.6	堅織、白色粒子含む。	良好	3.5V6/2 白	3.5V6/2 白	内面削除・ラメ削り→回転ナメ。 鏡部へラメ付。	内面削除。	第140 第2012						
139	A57	-	鏡	-	[85]	[6.2]	鏡 0.9	堅織、白色粒子や少量 小片。	良好	3.5Y7/1 白	3.5Y7/1 白	内面削除ナメ・下端へラメ削り。 鏡部へラメ付。	内面削除。	第140 第2012						
140	D69	-	鏡	-	[129]	[6.4]	鏡 0.9	堅織、白色粒子やや多 く含む。	良好	3Y6/1 白	3Y6/1 白	外周削除ナメ。底部へラメ付。	内面削除。	第140 第2012						
141	C91	-	舞踏型	-	-	[69]	舞踏型 0.9	堅織、網織・粒少含む。	良好	3Y7/1 白	3Y7/1 白	外周削除ナメ。	内面に隕灰。	第140 第2012						
142	B54	-	舞踏型	-	-	[55]	舞踏型 0.9	堅織、網織・粒少含む。	良好	3Y6/1 白	3Y6/1 白	外周削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
143	A80	-	鏡	[308]	[160]	[13.3]	鏡 1.8	網織・粒少含む。	焼成化 成	5Y7/1 白	5Y7/1 白	内面削除ナメ。	内面削除。	第140 第2012						
144	D153	鏡瓶	-	-	[21.0]	[21.0]	鏡瓶 0.9	堅織・粒多く含む。	良好	2.5Y5/1 白	2.5Y5/1 白	内面平行叩き。 鏡部底辺歪曲。	鏡部底辺歪曲。	第140 第2012						
145	B145	-	鏡	[236]	-	[67]	鏡 1.3	堅織、白色粒子・網織 粒含む。	良好	10YR3/2 白	10YR3/2 白	内面全面削除ナメ。鏡部内 部全面削除。	内面全面削除。	第140 第2012						
146	C93	-	鏡	[196]	-	[52]	鏡 1.4	堅織、白色粒子やや多 く含む。	良好	7.5M3/2-4 白	7.5M3/2-4 白	内面部内面削除ナメ。鏡部内 部全面削除。	内面全面削除。	第140 第2012						
147	B107	-	鏡	[240]	-	[7.2]	鏡 1.9	堅織・粒子・網織・粒含む。 底辺歪曲。	良好	10YR5/2-4/2 白	10YR5/2-4/2 白	内面部内面削除ナメ。鏡部内 部全面削除。	内面全面削除。	第140 第2012						
148	B145	-	鏡	[256]	-	[5.4]	鏡 1.10	堅織、白色粒子含む。	良好	2.5Y6/3 白	2.5Y6/3 白	内面全面削除ナメ。鏡部内 部全面削除。	内面全面削除。	第140 第2012						
149	B22	-	鏡	[260]	-	[5.3]	鏡 1.8	堅織、白色粒子・網織 粒含む。	良好	10YR5/1 白	10YR5/1 白	内面部内面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
150	B131	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色粒子含む。	良好	10Y/4/1 白	10Y/4/1 白	11部内面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
151	D56	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色粒子含む。	良好	2.5Y3/3 白	2.5Y3/3 白	11部内面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
152	C77	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色粒子含む。	良好	3Y5/1 白	3Y5/1 白	11部内面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
153	A16	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織。	良好	2.5Y7/1 白	2.5Y7/1 白	11部内面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
154	A25	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色・黒褐色粒 少含む。	良好	2.5Y3/1 白	2.5Y3/1 白	11部内面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
155	A30-B RH3	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色微板子含む。	良好	5H3-1 暗青	5H3-1 暗青	11部内面削除ナメ。外周部 内面全面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
156	C71	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織・粒少含む。	良好	3Y4/3 白	2.5Y5-3 黄青	11部内面削除ナメ。外周部 内面全面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
157	B15	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色・黒褐色粒 少含む。	良好	10Y/2/1 白	10Y/2/1 白	内面全面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
158	瓶底部 中央	上層	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織・粒少含む。	良好	3Y7/3-1 オリーブ	3Y7/3-1 オリーブ	内面全面削除ナメ。	内面全面削除。	第140 第2012						
159	底部右T	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色粒子含む。	良好	2.5Y5/3 白	2.5Y5/3 白	11部内面削除ナメ。内面全面 削除工具による2段の斜削り。	内面全面削除。	第140 第2012						
160	C8	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織・粒少含む。	良好	2.5Y5/3 白	2.5Y5/3 白	11部内面削除ナメ。内面全面 削除工具による2段の斜削り。	内面全面削除。	第140 第2012						
161	灰窓	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織・粒少含む。	良好	2.5Y6/2 白	2.5Y6/2 白	11部内面削除ナメ。内面全面 削除工具による2段の斜削り。	内面全面削除。	第140 第2012						
162	E1	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織、白色・黒色粒子 少含む。	良好	7.5M3/3-4/3 白	7.5M3/3-4/3 白	11部内面削除ナメ。内面全面 削除工具による2段の斜削り。	内面全面削除。	第140 第2012						
163	B33	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織・粒少含む。	良好	2.5Y3/1-2/1 白	2.5Y3/1-2/1 白	11部内面削除ナメ。内面全面 削除工具による2段の斜削り。	内面全面削除。	第140 第2012						
164	D126	-	鏡	-	-	-	鏡 0.9	堅織・粒少含む。	良好	2.5Y5/3 白	2.5Y5/3 白	11部内面削除ナメ。内面全面 削除工具による2段の斜削り。	内面全面削除。	第140 第2012						

番号	出土位置	層位	器種	法量 (cm)			覆率	出土	焼成	色調		成形・調整等	備考	採団番号 探査番号
				口径	底径	高さ				外面	内面			
165	D125	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子含む。	良好	75Y4/1 灰	75Y4/1 灰	頭部・肩部・頭部のナメ。内面・内面のナメ。外周6.1段の輪縁き渡状況。肩部内面青釉を確認。	第16回 回版14	
166	H30.	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子・小 粒含む。	良好	10Y3/1 灰	10Y3/1 灰	外面・内面青釉を認める。	第16回 回版14	
167	甕1部付近、D127	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小粒子・ 黑色粒子含む。	良好	7.5YS3/1~4/1 灰	7.5YS3/1~4/1 灰	外面・横段の平行文叩き。内面 青釉文叩き。	第16回 回版14	
168	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や少く、小 粒少含む。	良好	10Y3/1 灰+リーブ	75YS/1 灰	外面・横段の平行文叩き。内面 青釉文叩き。	第17回 回版14	
169	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色・黒色粒子 含む。	良好	10Y4/1~3/1 灰+リーブ	10Y4/1~3/1 灰+リーブ	外面・斜段の平行文叩き。内面 →同上文・青釉文叩き。	第17回 回版15	
170	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や少く、 小粒少含む。	良好	7.5YS/1 灰	7.5YS/1 灰	外面・斜段の平行文叩き。内面 →同上文・青釉文叩き。	第17回 回版15	
171	甕頭左T	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子・小 粒含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→等規 則に横段のナメ。	第17回 回版15	
172	甕口部分	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小粒子・ 黑色粒子・小粒含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→等規 則に横段のナメ。	第17回 回版15	
173	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や多く、 黒色粒・小粒少含む。	良好	7.5YR4/2 灰	7.5YR4/2 灰	外面・斜段の平行文叩き 内面・同心内文+青釉文叩き。	第17回 回版15	
174	E27	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。纏邊少含む。	良好	2.5YS/1 灰	2.5YS/1 灰	外面・斜段の平行文叩き。	第17回 回版15	
175	E18	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色粒子・粗理 含む。	良好	7.5YS/1 灰	7.5YS/1~5/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→等規 則に横段のナメ。	第17回 回版15	
176	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色粒子・粗理 含む。	良好	NS/(B) 灰	NS/(B) 灰	外面・ヘラ等で施された平行 文叩き→等規則に横段のナメ。	第17回 回版15	
177	甕頭右T	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や少く、 小粒少含む。	良好	3Y4/1 灰	3Y4/1 灰	外面・纏邊の平行文叩き。内面 →同上文・青釉文叩き。	第18回 回版16	
178	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色粒子・黑色 粒子含む。	良好	2.5GR4/1 灰+リーブ	2.5GR4/1 灰+リーブ	外面・斜段の平行文叩き。内面 →同上文平行文叩き。	第18回 回版16	
179	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や少く、 黑色粒子含む。	良好	7.5YS/1 灰	2.5YS/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→横 段のナメ。内面・同心内文+ 青釉文叩き。	第18回 回版16	
180	D146	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小粒 含む。	良好	2.5Y/1 灰+リーブ	2.5Y/1 灰	外面・纏邊の平行文叩き→等規 則に横段のナメのナメ。内面 →同上文・青釉文叩き。	第18回 回版16	
181	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子・黑 色粒子含む。	良好	2.5YS/1 灰	2.5YS/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→横 段のナメ。	第18回 回版16	
182	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子・黑 色粒子含む。	良好	3Y6/1 灰	2.5YS/2 灰	外面・斜段の平行文叩き→横 段のナメ。内面→横段のナメの ナメ。	第18回 回版16	
183	B122	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子含む。	良好	3Y5/1 灰	3Y5/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→横 段のナメ。	第18回 回版16	
184	B123	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小 粒含む。	良好	7.5GY/3/1 灰	10Y4/1 灰	外面・横段の平行文叩き→横 段のナメ。	第18回 回版16	
185	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や少く、 黑色粒子含む。	良好	7.5GY/4/1 灰	10Y5/1 灰	外面・横段の平行文叩き→斜辺 のナメ。	第19回 回版17	
186	甕頭右T	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小 粒含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→横 段のナメ。	第19回 回版17	
187	D130	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小 粒含む。	良好	10Y5/1~6/1 灰	10Y5/1~6/1 灰	外面・横段・斜段の平行文叩き→ 横段のナメ。	第19回 回版17	
188	C97	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子含む。	良好	7.5Y6/1~4/1 灰	7.5YS/1~4/1 灰	外面・纏邊・斜段の平行文叩き 内面・青釉文叩き。	第19回 回版17	
189	甕頭	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。	良好	5Y4/2 灰+リーブ	5Y4/2 灰+リーブ	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・同心内文+青釉文叩き。	第19回 回版17	
190	甕口部 本居層	甕	-	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子や少 く、小粒少含む。	良好	10Y4/1 灰	2.5Y6/1 灰	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・同心内文+青釉文叩き。	第19回 回版17	
191	D56	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y2/1 灰	外面・斜段の平行文叩き→横 段のナメ。	第19回 回版17	
192	D129	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子・纏 邊含む。	良好	3Y5/3 灰	5Y3/3 灰+リーブ	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・斜段の平行文叩き。	第20回 回版18	
193	甕口部付近	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。	良好	10Y4/2~2.5/3 灰	10Y4/2~2.5/3 灰	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・横段の平行文叩き。	第20回 回版18	
194	甕頭表様	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色微粒子・小 粒含む。	良好	7.5YS/1~4/1 灰+リーブ	3Y5/2 灰	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・青釉文叩き。	第20回 回版18	
195	甕口部付近	-	甕	-	-	-	頭部・肩部・小片	堅致。白色小粒子含む。	良好	7.5YS/1 灰	7.5YS/1 灰	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・青釉文叩き。	第20回 回版18	
196	A20	-	甕	-	(16.0)	[20]	頭部 2.3	堅致。微粒少含む。	良好	7.5YS/1 灰	7.5YS/1 灰	外面・横段・斜段の平行文叩き 内面・横段の平行文叩き。	第20回 回版18	
197	B62	-	土器	(16.0)	-	(5.3)	頭部・ 肩部 上半 1/4	白色微粒子・少 多く含む。	良好	7.5YRS/2~8/3 灰白+浅黄	7.5YRS/2~8/3 灰白+浅黄	1層目 頭部・肩部・土器ナメ。 頭部内面青釉を認める。	第20回 回版18	

第3表 信包中原田古窯跡出土遺物(瓦類)観察表

〔〕は現存値、()は推定値

番号	出土位置	層位	器種	法量(cm)			屢重率	胎土	焼成	色調		形成・調整・備考等(cm)	井田団体 井田番号	
				長さ	幅	厚さ				凸面(外)	凹面(裏)			
1	A177	-	罐6	[102]	(68)	3.0-3.5	罐部片	堅韌。細砂粒含む。	良好	10Y5/1 Kw	10Y5/1 Kw	瓶上部の部位と考えられる破片。内外面ナデ。	井田110 井田18	
2	A176	-	罐6	(90)	(75)	2.5	罐部片	堅韌。白色粒子含む。	良好	75Y5/1 Kw	75Y5/1 Kw	追跡文(直徑約6cm)をもつ壊帶部分の破片。追跡文はいわゆる「直」のコバス抜き。内面ナデ。	井田110 井田18	
3	D154	-	罐6	[105]	(107)	2.8-3.0	罐部片	赤褐色粒子・細砂粒含む。	推定	25Y8/3	25Y8/3	追跡文と筆状の凹溝で示された壊帶部分の破片。裏面のナデ。内外面に凹溝。	井田110 井田18	
4	D76	-	罐6	(97)	(155)	3.7-4.3	罐部片	赤褐色粒子・細砂粒含む。	推定	25Y8/3	25Y8/3	2-3とは異なる追跡文をもつ壊帶の破片。内面一部に凹溝。	井田110 井田18	
5	193	-	罐6	[217]	(110)	3.5-3.7	罐部片	赤褐色粒子・細砂粒含む。	推定	25Y8/3	25Y8/3	2-3とは異なる追跡文をもつ壊帶の破片。内面一部に凹溝。	井田110 井田18	
6	D28	-	軽丸瓦	-	-	-	[17]	内区片	堅韌。黑色小粒子多量含む。	良好	10Y5/1 Kw	10Y5/1 Kw	4と似た追跡文をもつ壊帶の破片。内面内外ナデ。	井田110 井田18
7	D134	-	軽丸瓦	-	-	-	17-23	外区片	堅韌。黑色小粒子多量含む。	良好	10Y4/1 Kw	10Y4/1 Kw	追跡文に似た追跡文をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字に似た凹溝。	井田110 井田18
8	B99	-	軽丸瓦	-	-	1.4-2.9	瓦当片	白色・黒色粒子含む。	推定	10Y8/3-3 オーリーブ黒	10Y8/3-3 暗緑	裏面に黒化された「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
9	A120- 141	-	軽丸瓦	-	-	1.3-1.7	内区片	堅韌。白色粒子や小粒子多く含む。	良好	10Y8/2-3 暗緑	10Y8/2-3 暗緑	裏面に黒化された「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
10	C53	-	軽丸瓦	-	-	1.5-1.5	内区片	堅韌。白色粒子や多く含む。	良好	25G4/1 灰青	25G4/1 灰青	裏面に黒化された「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
11	美11部	本底層	堅斗瓦	[103]	11.3	21	罐頭・西	堅韌。白色粒子含む。	良好	10Y3/1 Kw	10Y3/1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
12	A163	-	堅斗瓦	[125]	11.4	1.4-1.9	罐頭・西	堅韌。細砂粒・小粒 難焼面残存含む。	良好	25Y6/1-6/2 灰青	25Y6/1-6/2 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
13	A155	-	堅斗瓦	[113]	(98)	2.2-2.4	罐頭・西	堅韌。細砂粒・小粒含む。	推定	55Y8/1-1 灰白	55Y8/1-1 灰白	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
14	A148	-	堅斗瓦	(151)	11.0	19-22	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子含む。	良好	10Y4/1 Kw	10Y4/1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
15	A169	-	堅斗瓦	(80)	12.0	12-1.7	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子含む。	良好	25Y7/5-1灰 白	25Y7/5-1灰 白	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
16	A60	-	堅斗瓦	[101]	11.9	1.5-1.7	罐頭・西	堅韌。白色粒子・細 難焼面残存含む。	良好	10Y3/1 オーリーブ黒	10Y3/1 オーリーブ黒	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
17	燒成部	-	堅斗瓦	[134]	7.5	2.3-2.5	罐頭・西	堅韌。細砂粒含む。	良好	10Y4/1 Kw	10Y4/1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
18	187	-	丸瓦	[128]	(124)	1.3-1.7	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子含む。	良好	5Y6/1 Kw	5Y6/1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
19	80层	-	丸瓦	(96)	伏焼締	1.4-2.5	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子少量含む。 難焼面残存含む。	推定	10Y2/4-4 灰青	3Y4/1 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
20	D87	-	丸瓦	[125]	(104)	1.7-2.3	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子や 多く含む。	良好	10Y4/1 Kw	10Y4/1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
21	H160 左T	-	丸瓦	[158]	(103)	1.5-1.7	罐頭面 残存	堅韌。小粒含む。	良好	7.5Y3/1-1/4 灰青	7.5Y3/1-1/4 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
22	H156	-	丸瓦	[173]	15.8	1.8-2.4	罐頭面 残存	堅韌。白色・暗褐色 粒子含む。	良好	5Y5/2 灰 オーリーブ	5Y5/2 灰 オーリーブ	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
23	98层 C17	-	丸瓦	[190]	伏焼締	1.2-1.5	罐頭面 残存	堅韌。細砂粒含む。	推定	25Y8/2-3/2 灰 灰青	3Y4/1 灰 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
24	B197	-	丸瓦	(64)	伏焼締	1.6-1.9	罐頭面 残存	堅韌。黃白色粒子。 難焼面残存含む。	良好	5Y6/1-1 Kw	5Y6/1-1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
25	D116	-	丸瓦	(126)	(92)	1.0-1.2	罐頭面 残存	堅韌。細砂粒多く含む。	推定	25Y6/4-5 灰 灰青	25Y6/4-5 灰 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
26	D35	-	丸瓦	(78)	(79)	1.3-1.6	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子や 多く含む。	良好	10Y4/1 Kw	10Y4/1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
27	美11部右 H160 下層	本底 層	丸瓦	(141)	(112)	1.2-1.5	罐頭面 残存	堅韌。白色粒子含む。	良好	10Y4/1-2/3 灰 灰青	10Y4/1-2/3 灰 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
28	D61	-	丸瓦	(150)	202	1.9-2.2	罐頭面 残存	堅韌。細砂粒・小粒 残存含む。	良好	5Y5/2-4/2 灰 オーリーブ	5Y5/2-4/2 灰 オーリーブ	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
29	燒成部 初期	上層	丸瓦	(190)	17.5	16-1.9	罐頭面 残存	堅韌。細砂粒含む。	良好	7.5Y3/1-3 灰 オーリーブ灰	7.5Y3/1-3 灰 オーリーブ灰	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
30	D94	-	丸瓦	(84)	(87)	1.4-1.7	広焼面・西	堅韌。白色・黒色粒子。 難焼面含む。	良好	25Y5/2 灰 灰青	25Y5/2 灰 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
31	H原左T	-	丸瓦	(125)	(60)	1.8-2.2	広焼面・西	堅韌。小粒含む。	推定	10Y9/8-3 灰 灰青	10Y9/8-3 灰 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
32	C105	-	丸瓦	[110]	(188)	2.7-3.2	広焼面・西	堅韌。白色・黒色粒子。 難焼面含む。	良好	10Y4/1 Kw	7.5Y5/2-2 灰 オーリーブ	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
33	D88	-	丸瓦	[250]	(83)	1.3-1.9	広焼面・西	堅韌。細砂粒含む。	良好	5Y5/1-1 Kw	5Y5/1-1 Kw	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
34	D119	-	丸瓦	(207)	(90)	1.5-1.7	広焼面・西	堅韌。白色粒子含む。	良好	5Y5/3 オーリーブ	5Y5/3 オーリーブ	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	
35	98层	-	丸瓦	(109)	(111)	1.8-2.1	広焼面・西	堅韌。難焼面含む。	良好	25Y7/2-7/2 灰 灰青	25Y7/2-7/2 灰 灰青	裏面に「堅」字。丁字型の開口をもつ壊帶の破片。外側に「堅」字。	井田110 井田18	

番号	出土位置	層位	器種	法量(cm)			埋存率	地土	焼成	色調		成形・調整・備考等	標因番号
				大きさ	幅	厚さ				凸面(外)	凹面(裏)		
36	灰原	-	丸瓦	[16.2] (4.6)	22~24	法量面、縫隙部、細網状やや多く含む。焼成済み。	焼成済 焼成済み	23Y7/4~6 灰青に少く黄 に少く黄	23Y7/4~6 灰青に少く黄 に少く黄	西面-赤切り、丸瓦-の縫合せ。 西面-縫隙部の平行文理と端縁平行のナデ。 西面-赤切りの縫合せ。布目-竹板縫合跡-布目。	第2508 第2623 第2624		
37	C64	-	丸瓦	[14.3] (14.6)	17~20	法量面、堅緋、白色小粒子、小確合なし。	焼成済 焼成済	53Y6/1~5 灰青	53Y6/1~5 灰青	西面-堅緋-の縫合せ。布目-竹板縫合跡-布目。 西面-堅緋方向の平行文理。	第2621 第2621		
38	灰原左T	-	丸瓦	[28.5] (19.0)	13~17	法量面、堅緋、細網状含む。	焼成済 焼成済み	23Y3/2~5 灰青に少く黄 に少く黄	23Y3/2~5 灰青に少く黄 に少く黄	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目-の縫合せ。 西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2616 第2621		
39	灰原	-	丸瓦	[9.5] (11.9)	16~19	法量面、細網状、褐色小粒子、燒成済み。	焼成済 焼成済み	23Y7/4~6 灰青に少く黄 に少く黄	20Y7C4~4 灰青	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。 西面-堅緋-の縫合せ。	第2606 第2624		
40	D69	-	丸瓦	[14.5] (8.9)	16~20	側面残有、細網状、細緋含む。	焼成済 焼成済み	23Y5/3 灰青	23Y5/3 灰青	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。 西面-赤切り工具による端縁平行ナデ。 赤切り板各作り。	第2608 第2624		
41	B196	-	丸瓦	[23.5] (12.5)	18~21	法量面、堅緋、白色、黒色粒含む。	焼成済 焼成済み	43Y1/1~2 灰青	33Y1/1~2 灰青	西面-赤切り、白瓦-の縫合せ。	第2608 第2625		
42	灰原左T (B64)	-	丸瓦	[11.4] (7.7)	17~19	法量面、堅緋、細網状やや多く含む。	焼成済 焼成済み	10Y9/3~1/2 灰青	10Y9/3~1/2 灰青	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2708 第2705		
43	灰原左T	-	丸瓦	[17.5] (8.7)	19~23	側面残有、白色、小色粒子、小確合なし。	焼成済 焼成済み	23Y7/4~6 灰青に少く黄 に少く黄	23Y7/4~6 灰青に少く黄 に少く黄	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。 西面-堅緋方向の平行文理。	第2708 第2625		
44	灰原右T B65	-	丸瓦	[11.4] (8.8)	17~19	側面残有、白色粒子、細網状含む。	焼成済 焼成済み	7.5Y5/6 明褐	7.5Y5/6 明褐	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。 西面-赤切り工具による端縁平行ナデ。	第2708 第2625		
45	A130	-	丸瓦	[14.2] (11.6)	14~17	小破片、堅緋、細網状含む。	焼成済 焼成済み	7.5Y3/2~3 オリーブ	7.5Y3/2~3 オリーブ	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2708 第2625		
46	焼成窯 焼成窯左T 下層	-	平瓦	[14.3] (14.3)	20~22	法量面、堅緋、細網状、細縫隙残有。	焼成済 焼成済み	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2708 第2626		
47	焼成窯	-	平瓦	[11.5] (10.8)	27~31	法量面、堅緋、細縫隙、小確合含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/2~3/2 灰青	10Y4/2~3/2 灰青	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2708 第2626		
48	A166	-	平瓦	[16.5] (12.8)	15~18	法量面、堅緋、燒成済含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2708 第2626		
49	灰原	-	平瓦	41.0	[12.5]	20~24	法量面、堅緋、細網状、黑色粒やや多く含む。	焼成済 焼成済み	2.5Y4/2 灰青	2.5Y4/2 灰青	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2627	
50	燃焼部	-	平瓦	[20.6]	[12.0]	18~22	法量面、堅緋、細網状多く含む。	焼成済 焼成済み	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2626	
51	灰原	-	平瓦	[15.0] (7.8)	23~27	法量面、堅緋、白色微粒子含む。	焼成済 焼成済み	5Y5/2 灰青	5Y5/1 灰	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2808 第2625		
52	灰原	-	平瓦	[13.0] (15.5)	12~17	法量面、堅緋、白色微粒子含む。	焼成済 焼成済み	10Y3/5~1/8 灰	10Y3/5~1/8 灰	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2806 第2627		
53	灰原	-	平瓦	[14.5] (10.3)	20~27	法量面、堅緋、細縫隙、白色粒やや多く含む。	焼成済 焼成済み	3.5Y1/3~1 オリーブ	3.5Y1/3~1 オリーブ	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2627		
54	灰原	-	平瓦	[13.5] (12.0)	16~18	法量面、堅緋、白色粒子、小確合含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2808 第2628		
55	灰原	-	平瓦	[17.0] (20.3)	17~23	側面残有、堅緋、白色小粒子含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/4~2 オリーブ	10Y4/4~2 オリーブ	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2628		
56	E13	-	平瓦	[15.0] (12.9)	20~25	側面残有、堅緋、白色-黒褐色粒子含む。	焼成済 焼成済み	3.5Y7/1~3 灰	3.5Y7/1~3 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2628		
57	灰原	-	平瓦	[11.1] (11.9)	17~20	側面残有、堅緋、白色粒子やや多く含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2806 第2628		
58	灰原	-	平瓦	[12.0] (10.6)	21~23	側面残有、堅緋、白色粒子含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/1 オリーブ	10Y4/1 オリーブ	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2806 第2629		
59	灰原右T	-	平瓦	[12.2] (15.6)	22~34	側面残有、堅緋、白色粒子、細縫隙含む。	焼成済 焼成済み	2.5Y3/1 灰	7.5Y6/2~6 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2629		
60	D81	-	平瓦	[14.3] (15.7)	23~28	法量面、堅緋、白色粒子含む。	焼成済 焼成済み	5Y4/2~3/2 オリーブ	5Y4/2~3/2 オリーブ	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2629		
61	灰原	-	平瓦	[17.0] (16.2)	26~28	側面残有、堅緋、白色粒子、細縫隙含む。	焼成済 焼成済み	3.5Y1/3~1 灰	3.5Y1/3~1 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2629		
62	灰原	-	平瓦	[18.0] (14.3)	16~18	法量面、堅緋、白色粒子やや多く含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	西面-赤切り、竹板縫合跡-布目。	第2806 第2630		
63	C70	-	平瓦	[23.1] (25.4)	20~24	法量面、堅緋、白色粒子やや多く含む。	焼成済 焼成済み	5Y4/2~3/2 オリーブ	5Y4/2~3/2 オリーブ	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第2806 第2630		
64	灰原	-	平瓦	[22.8] (11.6)	18~20	側面残有、堅緋、白色粒子やや多く含む。	焼成済 焼成済み	23Y3/1~5/2 灰	23Y3/1~5/2 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第3108 第2630		
65	D86	-	平瓦	[23.2] (13.2)	20~23	法量面、堅緋、白色粒子やや多く含む。	焼成済 焼成済み	5Y5/2 オリーブ	30Y7B6/4 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第3108 第2631		
66	灰原	-	平瓦	[21.0] (25.0)	12~14	側面残有、堅緋、白色粒子やや多く含む。	焼成済 焼成済み	5Y4/2~3/2 オリーブ	5Y4/2~3/2 オリーブ	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第3108 第2631		
67	灰原	-	平瓦	[10.2] (15.5)	22~24	側面残有、堅緋、細網状含む。	焼成済 焼成済み	5Y4/2 灰	5Y4/2 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第3108 第2631		
68	灰原左T	-	平瓦	[9.2] (8.6)	23~25	側面残有、堅緋、細網状含む。	焼成済 焼成済み	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	西面-赤切り-竹板縫合跡-布目。	第3108 第2631		

番号	出土位置	層位	器種	法量 (cm)			保存率	胎土	焼成	色調		成形・調整・備考等 (cm)	
				長さ	幅	厚さ				凸面 (外)	凹面 (裏)	凹面 (外)	凹面 (裏)
69	黒跡付丘	-	平瓦	[28.4] [13.5]	22~24	筑堤面、堅穂。白色粒子・繊維残存。小穢含む。	良好	5Y0/1'6~1 灰白/灰	5Y0/1'6~1 灰白/灰	西面-赤面-砂利地・布面。筑堤側面に2条の門み。 凸面-堅穂側の平行文印書き。不定方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版32		
70	灰面左T	-	平瓦	[11.6] [16.3]	20~23	筑堤面、堅穂残存。繊維粒少量含む。	悪化焼成或成	25Y8/1'7/1 灰白	25Y8/1'7/1 灰白	西面-赤面-砂利地・布面。筑堤側面に1条の門み。 凸面-一部斜位の平行文印書き。不定方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第329 図版32		
71	前規部 A861	上層	平瓦	[17.3] [18.7]	19~23	筑堤面、堅穂。白色粒子・小穢含む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。筑堤側面に1条の門み。 凸面-一部斜位の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版32		
72	灰面左T 灰原	-	平瓦	[23.5]	26.4	20~29	兩面面 残存	堅穂。小穢多く含む。	良好	7SY3/1 オリーブ黒	SY5/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。筑堤側面に1条の門み。 凸面-一部平行文印書き。繊維・導線方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版33
73	灰原	-	平瓦	[30.3] [17.3]	20~25	筑堤面、堅穂。白色粒子・小穢残存。小穢含む。	良好	25Y6/1'3/1 灰/オリーブ黒	25Y6/1'3/1 灰/オリーブ黒	西面-赤面-砂利地・布面。筑堤側面に1条の門み。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維・導線方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版33		
74	D93	-	平瓦	[18.1] [19.9]	24~26	筑堤面、堅穂。白色粒子・小穢残存。小穢や多く含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版33		
75	前規部 A867	上層	平瓦	[9.5] [14.4]	16~17	筑堤面、堅穂。繊維粒少量含む。	良好	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版34		
76	灰原	-	平瓦	[20.0] [9.5]	20~22	筑堤面、堅穂。繊維・小穢や多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版34		
77	燒成部	上層	平瓦	[16.0] [14.3]	23~25	築面残存。堅穂。繊維粒・小穢含む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版34		
78	A165	-	平瓦	[10.2] [6.0]	20~22	筑堤面、堅穂残存。堅穂。繊維粒含む。	良好	2.5YS/2 灰	7.5YS/2 灰/オリーブ	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版34		
79	D65	-	平瓦	[9.3] [11.6]	20~22	筑堤面、堅穂。繊維粒・小穢含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y6/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。繊維方向のナデ。 ±粘土板施査作。	第328 図版34		
80	焼成部 A180 前規部	-	平瓦	[21.2] [11.9]	18~21	筑堤面、堅穂。白色粒子少 繊維残存。少含む。	良好	5/4'4/1 灰	25Y6/1'6~2 灰/灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。(一部斜位)。 ±粘土板施査作。	第328 図版35		
81	灰原	-	平瓦	[9.3] [12.3]	19~22	築面残存。堅穂。白色粒子少 繊維・小穢含む。	良好	2.5Y4/1'4/2 灰	2.5Y4/1'4/2 灰/灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版35		
82	灰原	-	平瓦	[19.6] [14.1]	20~24	筑堤面、堅穂。白色・黑色粒子少 繊維残存。少含む。	良好	2.5Y5/1 灰	2.5Y6/3 にい-黄	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。±粘土板の叩き。 ±粘土板施査作。	第328 図版35		
83	前規部 (A179)	上層	平瓦	[17.2] [12.1]	21~26	築面残存。堅穂。繊維粒含む。	良好	10YR3/2 灰	10YR3/2 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版35		
84	灰原	-	平瓦	[6.3] [6.0]	14~16	筑堤面、堅穂。白色・黑色粒子少 繊維残存。少含む。	良好	7.5N4/1 灰	7.5Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版35		
85	灰原	-	平瓦	[9.7] [14.9]	18~21	築面残存。堅穂。繊維粒含む。	良好	2.5Y4/1 灰	2.5Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版36		
86	黒跡付丘	-	平瓦	[10.1] [14.1]	15~20	筑堤面、堅穂残存。堅穂粒含む。	悪化焼成或成	10YR7/6 明黃	10YR7/6 明黃	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版36		
87	灰原	-	平瓦	[23.6] [16.2]	20~27	筑堤面、堅穂。白色粒子・小 穢含む。	良好	7.5Y5/2 灰/オリーブ	7.5Y5/2 灰/オリーブ	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。±粘土板の叩き。	第328 図版36		
88	D70	-	平瓦	[13.1] [13.9]	16~17	筑堤面、堅穂。白色粒子少 繊維残存。少含む。	良好	7SY1/4/1 灰/オリーブ黒	5Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版37		
89	黒跡付丘	-	平瓦	[10.0] [13.0]	19~21	筑堤面、堅穂。白色粒子少 繊維残存。少含む。	良好	7.5Y3/1'4/18 灰	7.5Y3/1'4/18 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版37		
90	D85	-	平瓦	[16.6] [12.7]	15~19	筑堤面、 繊維残存	赤色粒子・繊維含む。	悪化焼成 或成	10YR7/6 明黃	10YR7/6 明黃	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版37	
91	D79	-	平瓦	[9.2] [15.9]	18~24	筑堤面、 繊維残存	堅穂。白色・黑色粒子少 や多く含む。	良好	10Y4/19K	10Y4/19K	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版37	
92	B79	-	平瓦	[12.3] [9.9]	32~40	筑堤面、 繊維残存	白色粒子少 繊維含む。	悪化焼成 或成	2.5Y4/1 灰	2.5YB6/4 にい-橙	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版37	
93	灰原	-	平瓦	[15.5] [12.7]	25~30	小破片	白色粒子・繊維粒含 む。	悪化焼成 或成	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版37	
94	E201	-	平瓦	[19.5] [17.3]	15~20	筑堤面、 繊維残存	繊維粒・繊維含む。	悪化焼成 或成	10YR6/6 明黃	Y4/2 灰/オリーブ	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版38	
95	灰原	-	平瓦	[11.4] [13.5]	11~16	筑堤面、 繊維残存	繊維粒・繊維含む。	悪化焼成 或成	10YR8/7/4 灰	10YR8/7/4 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版38	
96	E158	-	平瓦	[26.0] [15.4]	16~23	築面残存	堅穂粒・繊維含む。	悪化焼成	5Y5/2 灰	2.5Y5/3 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版38	
97	灰原	-	平瓦	[13.0] [14.5]	15~18	築面残存	堅穂粒・白色粒子少 繊維少含む。	良好	2.5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版39	
98	C28	-	平瓦	[26.7] [16.0]	17~21	築面残存	堅穂粒・小穢含む。	悪化焼成	10YR7/4'6/4 にい-黄	10YR7/4'6/4 にい-黄	西面-赤面-砂利地・布面。布の縫合せゼロ。 凸面-堅穂側の平行文印書き。	第328 図版39	

番号	出土位置	層位	器種	法量 (cm)			保存率	胎土	焼成	色調		標図番号 図版番号
				長さ	幅	厚さ				凸面 (外)	凹面 (裏)	
99	灰原	—	平瓦	[15.0]	[11.1]	21~24	状端面、堅穂。細砂粒・小穢 物面残存含む。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目。 凸面・正位の瓦力格子文叩きと斜位の平行支押 痕。半筋土合せせり。分割裁断無調整。	第378回 図版39
100	黒跡付瓦	—	平瓦	[18.5]	[8.0]	23~23	端面残存 含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目・開縫方向のナデ。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き。 半筋土合せせり。分割裁断無調整。	第379回 図版39
101	A154	—	平瓦	[16.1]	[15.6]	24~33	状端面、 堅穂。白色微粒子・ 小穢物含む。	良好	3Y5/1 灰	3Y5/1 灰	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目・開縫方向の1 条の凹み・布目。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き。 半筋土合せせり。粘土軋轍合せり。	第378回 図版40
102	C33	—	平瓦	[8.5]	[15.0]	26~30	端面残存 含む。細砂粒含む。	良好	2.5Y7/1'6/1 灰白 黄灰	2.5Y7/1'6/1 灰白 黄灰	凹面・垂切り・端縫方向の1条の凹み・布目・布の 縫合せり。砂粒压痕不明瞭。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き。	第378回 図版40
103	A174 D62	—	平瓦	[32.3]	[11.5]	16~26	状端面、 端面残存 含む。堅穂。細砂粒含む。	良好	2.5Y8/2'6/2 灰白 黄灰	2.5Y8/2'6/2 灰白 黄灰	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き。	第378回 図版40
104	D63	—	平瓦	[14.7]	[9.6]	14~19	端面残存 含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き (端縫方向)。	第390回 図版41
105	灰原	—	平瓦	[8.5]	[10.3]	15~26	端面残存 含む。堅穂。白色微 粒子少含む。	良好	7.5Y6/1'5/1 灰	7.5Y6/1'5/1 灰	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き。 半筋土合せせり。粘土軋轍合せり。	第390回 図版41
106	D29	—	平瓦	[10.2]	[12.3]	18~21	端面残存 含む。堅穂。細砂粒含む。	良好	2.5Y6/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目・布の縫合せり。 凸面・斜位の瓦力格子文叩き (端縫方向)。 半筋土合せせり。粘土軋轍合せり。	第390回 図版41
107	灰原	—	平瓦	[18.4]	[11.3]	18~22	状端面、堅穂。白色・堅穂 物面や多く含む。	良好	5Y3/1 オリヤブ里	2.5Y5/1 黄灰	凹面・垂切り・砂粒压痕・布目。 凸面・堅穂・一端無縫方向のナデ。 半筋土合せせり。	第390回 図版41
108	灰原	—	陶製品	9.2	3.0	3.4	略定形 堅穂。細砂粒含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	角方体の陶製品。両面をヘッドで整え、中央部の角に 筋の立ち方も設ける。	第390回 図版41

第4章 総 括

信包中原田古窯跡の発掘調査は、旧古川町が吉城郡古川町大字信包字中原田地内（現飛驒市古川町信包字中原田）で実施した五ヶ村圃場整備事業がその発端である。土地改良工事により灰原が窯跡の近くまで削り取られ、多数の瓦や須恵器の破片が出土したことによる。当時、古川町史編さん委員を兼務していた大野政雄氏が調査を担当し、昭和53年9月中旬から11月下旬にかけて約2ヶ月間に及ぶ発掘調査が行われた。その結果、窯は瓦と須恵器を焼いた瓦陶兼業窯とされ、ここで焼かれた瓦類は当時、県下ではもっとも古い7世紀中ごろと推測された。また、その供給先として、東に3kmほどの宮川右岸の古川町太江に所在する寿楽寺廢寺の屋瓦に用いたことを明らかにした。これらの所見は、飛驒地域における古代窯業生産に関して一石を投じることとなった。

調査終了から38年が経った昨年7月、未報告分であった信包中原田古窯跡の二次整理作業について飛驒市教育委員会より委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が担当することとなった。7月から基礎整理に入り、記録類ならびに出土遺物の検討を加えた結果、窯は瓦陶兼業窯ではなく須恵器窯であることが判明し、信包中原田1号窯と命名して報告を行った。詳細は前章までに述べたとおりである。

本章では、報告の総括として信包中原田1号窯とそれに関連する事象についてまとめておきたい。

窯跡は丘陵部先端の南東斜面中腹に築かれ、その斜面下方に灰原が広がっている。灰原からは瓦や須恵器類の破片がまとまって出土し、また平瓦の中には桶巻作りの他に一枚作りの技法によるものや、須恵器では7世紀中半から後半のもの、あるいは9世紀代の資料も含まれていることから、1号窯の周囲には時期の異なる瓦窯や須恵器窯などが間違いなく存在しているものと推測される。

窯の構造は、半地下式無階有段登窯と考えられ、焚口から窯尻までは8～9m程度と推測される。最大幅は焚口部で約1.2m、窯体内は上部が下部よりせり出した構造になっていることから、実際はもう少し幅が広かった可能性がある。窯体の勾配は約30度、焚口部から窯尻までの比高差はおよそ4m強である。全体に細長い形態の窯で、断面形はかまぼこ形を呈している。

窯の細部について再度整理すると、焚口部から前庭部にかけては扇状に広がり、前庭部先端で最大1.7m、焚口部付近で1.1m内外を測り、焚口部から燃焼部へは次第にすばまる。焚口部から燃焼部に至るまでの緩勾配を燃焼部と推測すると、長さは1m程度と判断される。窯壁は厚さ10cm前後と考えられ、焚口部から燃焼部の側壁には板石を立て、燃焼部の側壁には角礫の他に瓦も用いられている。焼成部は、燃焼部の傾斜変換部から窯尻に向かって幅を狭めながら立ち上がる。また、焼成部の床面上では、テラス状の段差が確認されたことから有段式の窯構造と推測した。焼成部から窯尻にも側壁に板石や角礫を使用している。この事例は、石組側壁窯の系譜（山田 2010）と考えられ、隣国では美濃や信濃などでもみられるが、飛驒では初例となる。

つぎに、窯の操業年代について示しておきたい。まず結論から述べると、猿投窯編年（尾野 1997）でのⅣ期中段階に対比できるものと推測され、また暦年代推定であるが、猿投窯編年より採用すると、7世紀末葉（第4四半期後半／690）～8世紀初頭頃（第1四半期前半／720）と考えられる。

本窯の器種構成の特徴を示すと、もっとも主要な器種である壺が、古墳時代以来の伝統的な形態の壺Hから、壺G・壺A・壺Bへと確実に転換した時期であり、壺Hや高壺などの器種が認められるが、

これらはⅣ期以前に属する窯の存在を示す資料となろう。坏類の主体は坏Gで、つぎに坏A・坏Bと続く。主体となる坏Gは、底部の切り離し手法としてはヘラ起こし（ヘラ切り）が主流である。蓋の天井部上面には回転ヘラ削りが広く施され、その範囲は中心からほぼ6～8割の範囲に及んでいる。摘みはボタン状の径3～4cm台の大きなもので、この形態の蓋は坏G・坏A・坏Bの蓋ともほぼ共通している。蓋には口径が20cmを超える大型のものから、12cm程度の小型のものまであるが、これらは坏Aおよび坏Bが多様に法量分化しているものと関連性があると考えられる。また、蓋と身の量比が釣り合わないことから、小型の坏は基本的に無蓋であったと考えられる。坏蓋以外に、盤・高盤・短頸壺・長頸瓶・壺・甕・円面鏡などがあるが、これらの中にも時間幅があるため、器種組成を考える上で留意する必要がある。また、技法的な問題であるが、灰原出土の中には焼類に回転糸切り手法のものも確認されていることからV期のものも含まれている。

最後に窯の導入に関しての見通しを示しておきたい。飛騨地方は県内でも最北端の山間部に位置し、古くから東海地方（美濃・尾張）と北陸地方（越中）を結ぶ南北交通・文化の結節点として発展してきた。とくに律令制下の古代においては東山道・飛騨支路経由での交渉が中心であったと考えられる。律令制下の飛騨国は東山道に属し、当初は大野郡と荒城郡の二郡を管した。

窯場は荒城郡内の北西部にあって、東山道から飛騨に向かうルートをみると、美濃国内の武儀駅・加茂駅を経て、下留駅から飛騨川には沿って北上し、分水嶺の宮峠を越えると飛騨国府の比定地とされる高山盆地に入る。そして宮川を北に少し下ると荒城郡の中心である古川・国府盆地に至る。

律令制下の飛騨国は、「養老令」賦役令にみられるように、調庸を免じる代わりに里ごとに匠丁を差し出す国とされ、京における殿舎・寺院などの造営に携わった様々な労務に従事していた人びとの存在が知られている。また、飛騨地域には豊富な森林資源が存在することもあり、第1章でみてきたように、7世紀後半頃になると盆地内では瓦を中心とする窯業生産が開始される。その素地として、隣国の美濃には美濃須衛窯や尾張には狼投窯といった巨大な窯場が相次いで興隆し、数多くの窯場が築かれたことと無縁ではなかったと考えられる。

飛騨に瓦窯が導入された背景には、寺院の造営や官衙の整備などを契機に窯業生産が展開したものと推測される。とくに瓦の系譜論では、愛知県名古屋市尾張元興寺跡出土の忍冬文軒丸瓦との関係を論じた寿楽寺廃寺出土の同系瓦の問題（福垣 1971、八賀 1972、大塚 1994、梶山 1997、山路 1999）や、また縱置型一本作り軒丸瓦の技術的な伝播の問題（柳原 1990・1992、上原 1997、山路 2004）なども尾張や近江・信濃・甲斐などとの関連を示唆するものである。一方、信包中原田1号窯の須恵器製品をみると限りでは、美濃須衛窯をはじめとした西濃や中濃諸窯地域の影響が大きかったものと考えられ、陶邑窯系の技術導入が図られたものと推測される（城ヶ谷 1997・2010）。

須恵器および瓦窯の開窯の背景には、須恵器製作技術の導入や範型の移動を含む中央の造瓦技術の導入などの検討も必要であり、これらを究明する上で有効な手がかりとなる窯場であることを改めて念頭におく必要があろう。また、未だ途中である飛騨地方のタイムスケールとなる須恵器の編年研究にも繋げたいと思う。信包中原田窯跡がそうした糸口をつかむための一助となれば幸いである。

引用・参考文献

- 橋垣晋也 1971「古瓦よりみたる飛鳥・白鳳期の寺院」『古代の日本』第9巻 角川書店
- 八賀 晋 1972「第六章 歴史時代初期の美濃と飛騨」『岐阜県史 通史編原始』岐阜県
- 荻野繁春 1981「7・8世紀の須恵器編年－美濃国・尾張国－」『老洞古窯群発掘調査報告書』 岐阜市教育委員会
- 斎藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVI (史学29) 名古屋大学文学部
- 渡辺博人 1983「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」各務原市資料調査報告書第4号 各務原市教育委員会
- 櫛原功一 1990「瓦」「天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書」 敷島町教育委員会
- 斎藤孝正 1992「猿投窯」「第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会資料集2 古代仏教東へ－寺と窯－2・窯」 東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会
- 櫛原功一 1992「天狗沢瓦窯と出土瓦」「天狗沢瓦窯跡と古代甲斐」 敷島町教育委員会
- 大塚 章 1994「寿楽寺廃寺出土の軒丸瓦について－飛騨地方の古代寺院に関する一考察－」『岐阜県博物館調査研究報告』第15号 岐阜県博物館
- 上原真人 1997「瓦を読む」歴史発掘11 講談社
- 梶山 勝 1997「尾張元興寺跡出土の忍冬蓮華文軒丸瓦をめぐって」「豊田直先生古稀記念論文集』豊田直先生古稀記念論文集刊行会
- 尾野善裕 1997「V 尾張・西三河（窯跡） 猿投・尾北・その他」「古代の土器5－1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）」古代の土器研究会
- 城ヶ谷和広 1997「V 尾張・三河・遠江・美濃 尾張・三河・美濃（消費遺跡）」「古代の土器5－1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）」古代の土器研究会
- 尾野善裕 1999「古墳時代猿投窯編年の再検討」「第4回三河考古合同研究会 古墳時代の猿投窯と湖西窯－分類・編年・西暦年代の再検討」三河考古刊行会
- 山路直充 1999「東日本の飛鳥・白鳳時代の瓦について－下総龍角寺と尾張元興寺－」「飛鳥・白鳳の瓦と土器－年代論－」帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
- 尾野善裕 2001「東海地方における須恵器製作技法の転換とその背景－猿投窯を中心として－」「古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換」古代の土器研究会
- 渡辺博人 2001「美濃」「古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換」古代の土器研究会
- 谷口陽一 2002「太江遺跡・寿楽寺廃寺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第74集 財團法人岐阜県文化財保護センター
- 山路直充 2004「甲斐における瓦葺き寺院の出現－天狗沢窯出土鏡瓦の祖形を追って」「古代の社会と環境「開発と神仏とのかかわり」資料集」帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会
- 城ヶ谷和広 2010「第7章 東海」「古代窯業の基礎研究－須恵器窯と技術と系譜－」窯跡研究会

山田真一 2010「第13章 石組側壁窯の分布と系譜」「古代窯業の基礎研究－須恵器窯と技術と系譜－」
窯跡研究会

三好清超 2014「飛騨における古代寺院の成立に関する一考察」「富山大学大学院人文科学研究科論集」
富山大学大学院人文科学研究科論集編集委員会

河合英夫 2015「第4章 遺跡からみた飛騨古川の古代」「飛騨古川歴史をみつめて」飛騨市